

## 『ドン・キホーテ』の人物像に関する一考察

著者	松田 侑子
学位名	博士(文学)
学位記番号	甲第29号
学位授与年月日	2012-03-23
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00000481/">http://id.nii.ac.jp/1085/00000481/</a>



「ドン・キホーテ」の人物像に  
関する一考察

G06004

松田 侑子

# 「ドン・キホーテ」の人物像に関する一考察

序	1
第1章 ドン・キホーテに関する分析	4
1 騎士道精神	5
一元化できないドン・キホーテの特徴	5
騎士道精神の触発により引き起こされる狂気	9
遅く生まれた騎士、ドン・キホーテ	11
ことばの先駆者、セルバンテス	12
アルカイズム的な言葉づかい	15
「衰退」していくドン・キホーテ	18
2 ドン・キホーテの狂気	19
狂気とは何か	19
16世紀当時の精神病院	23
精神病患者とドン・キホーテ	24
佯狂説に対する疑問	27
ドン・キホーテ狂気説	28
ドン・キホーテ佯狂説	28
ドン・キホーテの正気の部分	31
ドン・キホーテの狂気の部分	34
佯狂説の脆弱さ	38
ドン・キホーテの狂気	42
3 セルバンテスの意図	42
ドン・キホーテという狂人	42
①ドン・キホーテが完全な狂人でないことから生まれる悲喜劇性	43
②われわれ読者に共感が生まれること	44
③正気とも狂気ともつかぬ人物がかもしだす笑い	45
4 ドン・キホーテという人物	46

第2章 サンチョ・パンサ	53
1 両面性	53
2 強欲と禁欲	58
強欲	58
禁欲	66
拮抗	71
3 親愛と裏切り	75
親愛	75
裏切り	76
拮抗	78
4 現実直視と非現実直視	80
現実直視	81
非現実直視	82
拮抗	84
5 臆病と勇敢	85
臆病	85
勇敢	86
拮抗	89
6 愚鈍と知恵	91
愚鈍	91
知恵	94
拮抗	95
7 サンチョ・パンサという人物	95

第3章 相互影響	101
1 関係性	101
2 相互影響についての研究	102
3 サンチョのドン・キホーテ化	106
定義	106
《教育》	107
精神の上昇	108
騎士道精神の高揚	109
魔法への依存	110
現実の歪曲	112
4 キホーテのサンチョ化	115
定義	115
言葉、とくに諺	116
衰退	118
5 サンチョのキホーテ化が起こった理由	125
終わりに	130
参考文献	136

# 『ドン・キホーテ』の人物像に 関する一考察

松田 侑子

## 序

セルバンテスの作品、『ドン・キホーテ』の主人公は、もちろんだン・キホーテであり、ドン・キホーテの従者はサンチョ・パンサ、またドン・キホーテの思い姫はドゥルシネアだと言うことはよく知られているとおりである。ドン・キホーテは痩せており、背が高く、サンチョ・パンサは太っており、背が低い。そして『ドン・キホーテ』といえどんな場面を思い浮かべるかと訊かれれば、たいていのが、風車を巨人だと思い込んで、ドン・キホーテが突進していく場面だと答えるであろう。しかしながら、その場面はクライマックスではなく、前篇第8章に登場するただの一場面でしかない。つまり、聖書についていちばんよく読まれている小説と言われる『ドン・キホーテ』は、その実、通り一遍のイメージで受けとめられていることが少なくない。

また、多くの読者にとっては、ドン・キホーテは理想主義者で狂人、サンチョ・パンサは現実主義者で愚か者だという図式的な見方が支配的かもしれない。登場人物の中にも、ドン・キホーテ主従を単なる狂気と愚鈍の化身だと捉えるものもある。たとえば、学士サンソン・カラスコは後篇第7章で“que puesto que había leído la primera historia de su señor, nunca creyó que era tan gracioso como allí le pintan”「ドン・キホーテの物語の前篇をすでに読んでいたが、現実のサンチョが、そこに描かれているほど滑稽にして愉快的な人物だとは思っても及ば」<sup>1</sup>ず、“dijo entre sí que tales dos locos como amo y mozo no se habrían visto en el mundo”「心のなかで、この主従のごとき一對の狂人はまさに前代未聞、かつてこの世に存在したためしはなかろうと、つぶやい」<sup>2</sup>ている。しかし、ドン・キホーテとサンチョ・パンサはそのような単純な捉え方

で片づけられるような人物ではないことは言うまでもない。

この論文では、サンチョ・パンサがドン・キホーテと長くつきあううちに、ほかのさまざまな要因も手伝って、サンチョ・パンサがドン・キホーテの口上や精神を真似ようとする現象、サンチョ・パンサのドン・キホーテ化が、起きていることを明らかにする。そして最終的に、サンチョ・パンサのドン・キホーテ化はあり得るが、その反対の、ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化はあり得ないことを証明する。

ミゲル・デ・ウナムーノが、サンチョ・パンサのドン・キホーテ化と、その逆のドン・キホーテのサンチョ・パンサ化を指摘して以来、ほとんどすべてのセルバンテス研究者がその意見に追随してきた。筆者も当初はこの立場をとっていた。サンチョ・パンサのドン・キホーテ化が起きていることは明白であったので、相互影響を考えるのであれば、反対の現象、つまり、ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化も生まれるはずだったと考えたからである。しかしやがて、筆者は長年唱えられてきたドン・キホーテのサンチョ・パンサ化に疑問を持ち始めた。

原文を読み返すうちに、サンチョ・パンサのドン・キホーテ化の記述と、ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化のそれとの絶対量が異なることに気がついた。相互影響といっても、等しく双方に及ぶものではないことは言うまでもないが、それにしてもあまりに言葉の量が違いすぎるように思えたのである。また、そもそも相互影響というものが主従のあいだで起こりうるものかどうかとも疑わしかった。ドン・キホーテは正常な人間ではない狂人（狂人の定義は本論中におこなう）なので、正常な人間同士のあいだの現象である相互影響ということ自体が起こるとは限らないからだ。そこで、筆者は真相を検証してみたいと考えた。

サンチョ・パンサは、ドン・キホーテに感化され、教育され、精神を上昇させ、騎士道精神を奮い立たせていく。ただ、騎士道物語の世界に足を踏み入れてしまったため、状況が変われば魔法の存在を信じるようになり、持ち前のピカロ的な考えで現実を歪曲する方法も覚えた。こうしたすべては一般に、サンチョ・パンサのドン・キホーテ化と言われている。

すでに述べたようにドン・キホーテもサンチョ・パンサ化している、という説が唱えられてきた。研究者たちは、ドン・キホーテの狂気が弱まっていき、つ

いには夢から覚めることや、サンチョのように諺を二つ並べることを引き合いに出して、ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化を説明しようとした。しかし、ドン・キホーテの精神が「衰退」していくことは、サンチョ・パンサ化ではない。単にドン・キホーテが俗人のレベルにまで精神性を落とすことである。また諺に関して言えば、たしかにサンチョ・パンサから影響を受けていると考えられるが、一時的なものに留まっており、「ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化」という段階までは達していない。また、ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化が起こりにくいもう一つの理由は、サンチョとドン・キホーテの精神レベルの違いにある。つまり、ふつうに考えれば、高貴なドン・キホーテが、彼よりも無学で粗野なサンチョの感化を受けることはあるだろうが、「サンチョ・パンサ化」というレベルにまでいくとは思われないのである。

以上述べたように、サンチョ・パンサのドン・キホーテ化はたしかに起きているが、反対のドン・キホーテのサンチョ・パンサ化は起きているとはいいがたい。

さて、ドン・キホーテとサンチョ・パンサ主従の関係や相互影響を見る前に、まず両者がどんな特徴をもった人物として描かれているかを見ていくことにする。

---

<sup>1</sup>この論文の引用に関してスペイン語版には Miguel de Cervantes, “*El ingenioso hidalgo don Quijote de la Mancha*”, editado por Riquer, Martín de, Editorial Planeta を底本にし、日本語版には『新訳ドン・キホーテ』牛島信明訳、岩波書店を底本にした。

<sup>2</sup>同上。スペイン語版 p611、日本語版 p58 上段



## 第1章 ドン・キホーテに関する分析

『ドン・キホーテ』は、ミゲル・デ・セルバンテス・サアベドラによって執筆された。前篇は1605年、後篇は、セルバンテスが死を迎えるわずか一年前の1615年に刊行されている。

また、『ドン・キホーテ』は、セルバンテスが序文で書いているとおりであれば、騎士道物語を非難し、批判するという目的があった<sup>3</sup>。そのため、ドン・キホーテは、騎士道物語を読みふけたために頭のおかしくなった人物として描かれている。ドン・キホーテは己自身を、騎士道物語の主人公だと錯覚し、従士を従え、遍歴の旅に出る。そこで様々な狂態を演じるのである。

前篇には、五篇の短篇小説が挿れていたり、セルバンテスが登場人物の口を借りて、みずからの著書やその当時流行していた書物についての所見を述べたりと、あれこれ趣向が凝らされている。しかし、後篇になれば、ドン・キホーテの狂気に変化が生じ、彼を取りまく人物たちも愚弄するものから愚弄されるものへと変わるため、心理小説の色が濃くなっていく。

ドン・キホーテの狂気が、ほかの登場人物に伝染していくのである。前篇で、彼を愚弄していた人間が、もっとも愚かな行動をしているのが、読者に分かるのである。たとえば、ドン・キホーテ主従のことをすでに前篇で読んで知っていた公爵夫妻は、後篇で彼らに会うと、さらに愚弄してやろうとさまざまな冒険へと駆り立てるが、じつのところ、公爵夫妻こそが、馬鹿馬鹿しい振るまいに及んでいる。

今日においては、『ドン・キホーテ』は単なる騎士道物語のパロディーであるとは見做されていない。つまり、魅力的な人物たちが登場し、その複雑な関係を読者に見せる心理小説だと考えられている。そのため、『ドン・キホーテ』が世界的文学作品の一つとして数えられるのであろう。

この章では、まず、ドン・キホーテに焦点を当て、その特徴を考察していきたい。ドン・キホーテは、まず、馬をロシナンテと名づけ、アルドンサ・ロレンソという名前の百姓女を、ドゥルシネア・デル・トボソという姫君に変え、みずからは武具を身にまとい、遍歴の騎士になった。そして、従士サンチョ・パンサを雇った上で、ドゥルシネアのために武勲をたてる旅に出る。当

然ながら言葉遣いは騎士道物語で用いられるような古拙なもの(いわゆるアルカイズム)を口にするようになった。

ドン・キホーテという人物の核心をなす騎士道精神やそれに伴う狂気は、後篇に入ると、前篇に比べればずっと弱まる。理性的なものが徐々に幅をきかせてくるのである。これは何を意味するのだろうか。

その原因を探るためには、ドン・キホーテの狂気がどんな性質のものか考察しなければならない。近年、ドン・キホーテは狂ってはいなかった、単に狂人を演じていただけだと主張する研究者が出てきたからである。

また、そもそもセルバンテスがなぜドン・キホーテのような狂人を創り出したのかもこの章で探りたい。そこに、われわれ読者にドン・キホーテが魅力的な人物に映る理由が隠されていると思われるからにはほかならない。

## 1. 騎士道精神

### 一元化できないドン・キホーテの特徴

田舎の郷士アロンソ・キハーノは、騎士道物語ばかり読みふけたために頭がおかしくなる。彼は、その手の小説を買うために所有していた土地を売りとばすほどだった。やがて、自分は騎士道物語の主人公、ドン・キホーテであるという考えに陥り、遍歴の騎士になることを決意する。そして、馬をロシナンテと名づけ、百姓女を思い姫ドゥルシネアと呼び、サンチョ・パンサを従士に仕立てて、冒険の旅に出かける。

ところが、アロンソ・キハーノの称号である郷士は、『ドン・キホーテ』の中では裕福な農民くらいの社会的地位しかなかった。十六世紀、スペイン経済の発展により、爆発的に増えた郷士の数は、後半、経済危機の影響により、とくに田舎で急激に数が減った。それにもかかわらず、アロンソ・キハーノが郷士の称号を有していること、また、趣味が狩猟であったこと、旅の途中で結構な額の損害補償をおこなっていることなどを考えると、生活に困窮していたとは考えられない。中流的またはそれ以上の暮らしをしていたと見るのが妥当であろう。

サンチョ・パンサは、ドン・キホーテの近所に住む「善良な」農夫で、前篇

第7章で、*ínsula*（島）の領主にしてもらおうという条件で、ドン・キホーテの従士を引き受ける。彼はドン・キホーテと異なり、結婚しており、また年頃になる娘や息子もいる。生活は貧しく、旅の途中で、金銭的なことが原因で、たびたびドン・キホーテと喧嘩をしている。

ドン・キホーテは、彼を取りまく人物たちにどのように映っていたのだろう。後篇第2章において、ドン・キホーテは自分たちの冒険が一冊の本になっていることを知ると、サンチョ・パンサに自分の評判はどうかと尋ねる。すると、腹を立てないという条件で、サンチョはドン・キホーテに次のように答える<sup>4</sup>。

Pues lo primero que digo, es que el vulgo tiene a vuestra merced por grandísimo loco, y a mí por no menos mentecato. Los hidalgos dicen que no conteniéndose vuestra merced en los límites de la hidalguía, se ha puesto *don* y se ha arremetido a caballero con cuatro copas y dos yugadas de tierra y con un trapo atrás y otro adelante...

それじゃ言いますけど、まず下々の連中はお前様を大変な狂人で、おいらをそれに輪をかけたばか者だと思っています。郷士たちは、お前様が田舎の郷士の分際に満足できず、わずかばかりのぶどうの株と小さな畑しか持っていないくせに、またみじめたらしい服を身につけているくせに、思いあがって名前に《ドン》の称号をくっつけ、勝手に騎士になろうとしたと言っていますよ。

つまり、主従の冒険譚は美談として語られているわけではなく、読んだものたちのあいだで物笑いの種になっていたのである。このように、登場人物たちの多くは、ドン・キホーテとサンチョ・パンサのことを狂人とばか者、つまり、狂気と愚鈍の化身と見なしている。

しかしながら、登場人物の何人かは、ドン・キホーテの狂気がそれほど単純なものだとは考えてはいない。たとえば、作中人物である《緑色外套の騎士》、ドン・ディエゴの息子であるドン・ロレンソも、“No le sacarán del borrador de su locura cuantos médicos y buenos escribanos tiene en el mundo: él es un entreverado loco, lleno de lúcidos intervalos.”「世界中の医師と知恵のある公証人が寄ってたかっても、彼（ドン・キホーテ）の狂気を読み取ることは

できないでしょう。あの狂気は判読不能の草稿のようなものですから。あの人は狂気のなかに素晴らしい正気が交錯する変わった狂人ですよ」<sup>5</sup>と、後篇第18章で述べている。

ドン・キホーテとサンチョ・パンサを除けば、『ドン・キホーテ』の作中人物たちを二つに分けることができる。すなわち、ドン・キホーテ主従と面識がある者たちとそうでない者たちである。後篇第2章でおこなわれるドン・キホーテ評価は、彼を本でしか知らない人物が下したものにほかならない。また、後篇第7章で見られるサンソン・カラスコによるドン・キホーテ評価も同様であろう。サンソン・カラスコは、それ以前には二こと三こと言葉を交わしただけである。それに対して、ドン・ロレンソは実際にドン・キホーテに会い、会話を交わしている。ドン・キホーテのことを“*un entreverado loco, lleno de lúcidos intervalos*”「狂気のなかに素晴らしい正気が交錯する変わった狂人」<sup>6</sup>だと考えている。ドン・キホーテと実際に言葉を交わし、ある程度の時間を共有した人物たちは、一様に、ドン・キホーテが博学だと認めている。その上で、騎士道物語のことに話が及んだとたん、狂気を露わにするのを目の当たりにし、憐憫の情すら感じるのである。

また、多くの研究者も、ドン・キホーテは正気と狂気の入り混じった人物であると捉えているが、彼らの見方は妥当だと思われる。ドン・キホーテは狂っているだけではなく、ときにはまっとうな意見を述べ、正しい行動をとるからだ。

たしかに、ドン・キホーテは、騎士道物語の登場人物たちを実在した人物であるかのように語り、真の友人のように擁護する。しかもサンチョも言うように、神父さながらの説教をすることができる。その内容も的を射たものである。

サルバドル・デ・マダリアーガは『ドン・キホーテの心理学』の中で、ドン・キホーテとサンチョ・パンサの特性を一元化してはならない旨の次のような指摘をおこなっている。<sup>7</sup>

No ha mucho leía el que esto escribe en un periódico de Madrid que el *Quijote* debe su valor a la extrema sencillez de sus personajes. Así parece, en efecto, mas no es así. Debe el *Quijote* su popularidad, que no su valor, a que sus figuras son simplificables, y una vez simplificadas,

siguen presentando grandísimo interés. (...) La tradición superficial ha reducido su maravillosa trama psicológica a una línea melódica de elemental sencillez. Don Quijote es un caballero valiente e idealista. Sancho es un bellaco positivo y cobarde. Lo que la tradición superficial no echa de ver es que esta línea antitética de primera impresión se resuelve en un delicado y complejo paralelismo, cuyo desarrollo es una de las maravillas de este libro genial.

これまで『ドン・キホーテ』の一番の長所は、主人公たちの性格が極度に単純なところにある、などと声高に唱えられてきた。なるほどそう見えるかもしれないが、本当はそうではない。『ドン・キホーテ』の人気（長所ではなく）を支えているのは、登場人物が単純化されうるという事実である。しかし、それらは単純化されたあとでも、つきることのない興味を秘めた存在であり続けている。（中略）浅薄な批評の伝統は、この作品の見事に織りなされた驚嘆すべき心理の綾を、単純きわまるメロディの流れに変えてしまった—ドン・キホーテ即、勇ましい騎士にして理想主義者、サンチョ即、実利的にして臆病な田舎者。しかしながら、伝統が見落としてきたことに、一見、対立にもとづいているかのごときこの構図が、実は微妙に錯綜した対応関係を形成しており、その展開のなかにこそ、この天才の手になる書物が達成した驚異のひとつがあるのだ。

マダリアーガの指摘するように、われわれは、ドン・キホーテとサンチョ・パンサの特性を一元化してはならない。ドン・キホーテは十五世紀以前の騎士道精神を有しているが、実際は十六世紀後半から十七世紀という、いわゆるスペインの黄金世紀を生きた人物として描かれている。ドン・キホーテという騎士を名乗っているが、元々はアロンソ・キハーノという郷土である。この点を見ただけでも、ドン・キホーテが二面性を備えていることが分かる。そして、その二面性こそが、『ドン・キホーテ』の面白さを生みだすもとでもあるのだろう。

また、多くの研究者たちは、ドン・キホーテが騎士道精神を触発され、みずから騎士道物語の主人公であると錯覚するとき正気を失うと指摘してきたが、この意見も正当なものであろう。なぜなら、ドン・キホーテがそもそも遍歴の旅に出ようと思った目的が、弱きものを助けようとする、騎士道物語の

主人公たちと同じ理由からだからである。

### 騎士道精神の触発により引き起こされる狂気

ドン・キホーテが狂気に駆られるものは、話が騎士道物語に及んだときにほかならない。

そうした場面は多いので、ここでは①ドン・キホーテがカルデニオと話す前篇第24章、②参事会員と騎士道物語について論議する前篇第49章、そして③周りの人々がドン・キホーテの狂気をどう受け止めていたかが分かる前篇第39章に焦点をあてることにする。

まず、①においてドン・キホーテは、カルデニオの話を遮らないと約束していたにもかかわらず、話題が騎士道に触れたとたん、カルデニオの話を中断させてしまう。その上で“en oyendo cosas de caballerías y de caballeros andantes, así es en mi mano dejar de hablar en ellos”「騎士道だとか遍歴の騎士といった言葉を耳にするとどうしても黙ってはいられなくなる」<sup>8</sup>とカルデニオに詫げる。

しかし、やがて、エリサバット博士が王妃マダシマと情交を結んだとカルデニオが何気なく口にした言葉に対して、ドン・キホーテは猛り狂って、つかみ合いの喧嘩を始めるのである<sup>9</sup>。

ドン・キホーテは騎士道物語の登場人物でしかないマダシマを、まるで実在する高貴な王妃であるかのように、擁護し始める。そして、彼女がエリサバット博士と情交を結ぶなどというのは“una gran malicia o bellaquería”「悪意に満ちた中傷」<sup>10</sup>だとしてカルデニオを非難する。この場面に、まぎれもなくドン・キホーテの狂気が姿を表わしているように思われる。

また、②においても同じことがうかがえる。騎士道物語の中で起こったことなどありはしないと言う参事会員に対して、ドン・キホーテは“una cosa tan recibida en el mundo, y tenida por tan verdadera”「世間に広く受け入れられ、まごうことなき真実と認められておるもの」に対し、冒瀆の言を吐くので、参事会員こそが“el sin juicio y el encantado es vuestra merced”「理性を失い、魔法にかかっている」<sup>11</sup>のだと切り返している。以上のように、騎士道物語が狂気を生み出す起爆剤になっていることはまちがいない。

騎士道物語が引き合いに出されると、狂気を露わにするドン・キホーテについて、周りの人物たちは、どの考えたのだろうか。前篇第38章を例に見てみよう。ドン・キホーテの文武両道についての所見を聞いた司祭や床屋、ルシндаやカルデニオは、ドン・キホーテが難解な哲学に理解力を示し、巧みに論じることができるのに大変驚いた。と、同時に、“le habían sobrevino nueva lástima de ver que...le hubiese perdido tan rematadamente en tratándole de su negra y pizmienta caballería”「いまいましい騎士道のことに話題が及ぶと、とたんに絶望的なまでに理性を失ってしまうのを見て、あらためて憐憫の情を覚え」<sup>12</sup>たことが記されている。

このように、ドン・キホーテのような知識人や有徳者が狂気にとりつかれると、周囲の者たちは、さらに憐憫の情を覚える。ドン・キホーテはシェイクスピアが描いたハムレットと相反する型の人物として、よく比較されるが、彼の狂気はまわりのものには佯狂に映ることはなく、本当に狂人になってしまったのだと思われていた。ハムレットは、高貴な生まれで、それこそ高い精神性を有している人物であり、その精神性はドン・キホーテと似ているといっても過言ではないだろう。王は、ハムレットの狂気を目の当たりにしたとき、“Madness in great ones must not unwatch'd go”「高貴なものの狂気、放つてはおけんだろう」<sup>13</sup>とボローニウスに言っていることから分かるように、高い精神性を持つ人物が狂ってしまったとき、そこに残るものは憐憫の情であり、それだけに一層ドン・キホーテの狂気を治療したいと切に願う者が大勢いるわけである。

騎士道精神と同様、ドン・キホーテの狂気を誘発するのはドゥルシネア・デル・トボソである。ドン・キホーテは彼女にプラトニックな愛情を寄せており、その美しさを疑うことはない。したがって、彼女の存在を知らないと言う者にも、彼女よりもミコミコーナ姫（本当はドロテア）の方が美しいと言うサンチョにも、我慢ならない。

騎士道精神と思ひ姫ドゥルシネア・デル・トボソは、しがない郷土アロンソ・キハーノが、騎士ドン・キホーテであるための不可欠の要素になっている。ドン・キホーテは、思ひ姫のいない騎士など存在しないのだと声高に唱える。たとえば、前篇第20章では、ドン・キホーテはサンチョに、もし自分が死ねば、ドゥルシネアに捧げる武勲のために、一人の騎士が命を落としたと

伝えに行くようにと命令する。その直後の第22章でも、解放した囚人たちに、トボーツ村へ行き、自分の武勲をドゥルシネアに報告するようにと命令する。そのことから、ドゥルシネアの存在が、ドン・キホーテにとって、いかに大きなものであるか分かるであろう<sup>14</sup>。

マダリアーガによれば、ドゥルシネアは、ドン・キホーテにとって“*una Dulcinea perfecta e implicable, digna de su sacrificio*”「命を投げうつことのできる、そして投げうつべき、あらゆる価値の権化」<sup>15</sup>であり、“*Gloria Eterna*”「栄光」<sup>16</sup>そのものなのである。

このように、ドン・キホーテが狂気に陥るのは、騎士道物語と、ドゥルシネア姫に関する話題が発端になっている。そしてこれら二つがドン・キホーテという人物を形成する核心部分と言ってもいいだろう。それでは、十六世紀に生まれたドン・キホーテは、おのれが十五世紀以前の騎士道物語の主人公になるために、どんな工夫を凝らしているのであろうか。というかセルバンテスはどんな趣向を考え出したのだろうか。

### 遅く生まれた騎士ドン・キホーテ

ドン・キホーテは、騎士道物語の主人公に見せかけるために、アルカイズム的な言葉遣いを用いている。それが具体的にどのようなものであるかは後に見ていくことにするが、まずは、それが、どのような効果をもたらすのかについて考察したい。

木村榮一は、『スペインの鱒釣り』において、『ドン・キホーテ』の滑稽さは、騎士道精神が時代錯誤的なものとなってしまったことに起因していると述べている<sup>17</sup>。

騎士道物語でもうひとつ忘れてならないのは、登場人物たちがきわめて饒舌だということである。戦いに際しては、なぜ戦うかについて延々と説明し、言葉で士気を高め、またたえず部下に声をかけて力づけ、励ます。恋をすればしたで、自らの思いを切々と訴え、キリスト教的なモラルを開陳する、敵と相対しては、自らに非のないことを滔々と弁じ立てる。騎士道物語に描かれているまことの騎士というのは、現代人が読めば時には辟易するほど饒舌である。つまり、騎士とは戦士であると同時に、言葉の人でもあるのだ。そ



して、当時の読者はその騎士たちの言葉から多くのことを学びとったのである。しかし、この饒舌を支える騎士道的な理想が崩壊し、それが有名無実、陳腐なものになったとき、饒舌はその方向(センス)を失い、ばかげたもの、ナンセンスなものになる。『ドン・キホーテ』の饒舌さは、その点を見過ごしては理解できない。つまり、ドン・キホーテとは、遅く生まれすぎた騎士にほかならないのである。

ドン・キホーテは、騎士道物語の主人公よろしく、愛馬ロシナンテに跨り、武器に身を固めている。ドン・キホーテは前篇第1章より、埃を払った曾祖父の甲冑をつけ、つまりドン・キホーテは三代前、約一世紀以上の時を経た甲冑を身につけている。また曾祖父の兜を被っていた。さらにその兜も“*era que no tenían celada de encaje, sino morrión simple*”「面頬のついた完全なものではなく、頭の上だけを覆う単なる鉄兜」<sup>18</sup>という不完全なものである。ここからも、のちに床屋から奪った金だらいをマンブリーノの兜と呼び、大事に被っていることの説明がつくであろう。名前をロシナンテつけた馬に跨り冒険の旅に出る。ドン・キホーテの装束すべてが騎士道物語のパロディになっている。読者は、時代錯誤となったドン・キホーテの滑稽さを笑うのである。

さて、研究者のあいだでは、ドン・キホーテはアルカイズム的な言葉づかいをしていると言われるが、それを取り上げる前に、セルバンテスがいかに言葉そのものに対して細心の注意を払っていたかを明らかにしたい。

### 言葉の先駆者、セルバンテス

セルバンテスは、当時、流行していた言い回しに敏感で、登場人物たちの口を借りて、そうした言い回しや表現について言及させたり、実際に口に出させたりしている。

Julio Cejador は、著書“*Lengua de Cervantes*”の中で、“*Y el Quijote está lleno de idiotismos locales, de refranes burlescos, dichos festivos, vocablos picarescos, expresiones intencionadas*”「『ドン・キホーテ』には、田舎特有の言い回しや、冷やかしのことわざ、愉快な警句・表現や、ピカレスク的な言葉づかい、故意表現がふんだんに用いられている」<sup>19</sup>と述べている。これを見ると、セルバンテスがいかに「言葉」そのものにこだわっていたかが分かる。

このような言語に対するこだわりが、『ドン・キホーテ』が近代小説として捉えられている所以であろう。セルバンテスの言葉に対するこだわりがうかがえる箇所は多数あるが、その一例として、絶対最上級-*ísimo* の破格的な使用が挙げられる。

ラファエル・ラペサは、『スペイン語の歴史』において、絶対最上級が十六世紀に誕生したものだ、と指摘している<sup>20</sup>。それは、十五世紀にこの表現がなかったことがネブリハの文法書によって明らかになったからだ(ネブリハの文法書が1492年に出たことを考えると、十六世紀初頭においても絶対最上級の形が汎用されていたとは考えにくいだろう)。ネブリハの意見に耳を傾けてみよう<sup>21</sup>。

Superlativos no tiene el castellano sino estos dos: *primero* τ *postrimero*; todos los otros dize por rodeo de algún positivo τ este adverbio *muy*  
最上級としては、カスティリア語には次の2語、*primero* 『第一の』と *postrimero* 『最後の』しかない。これ以外のものは全部、原級とこの副詞 *muy* 『とても』との組み合わせによって言い表す。

このように、1492年にネブリハの文法書が発行されたときには、絶対最上級の形は存在しなかった。そのため、「とてもおもしろい」と表現するためには、かならず副詞の *muy* が必要であったことが分かる。

そして、当時流行し始めていた、斬新とされる絶対最上級 *ísimo* は、《苦悩の老女》ことトリファルディ、そしてサンチョ・パンサの口を通して使用される。それは、後篇第38章に見られる。それでは、《苦悩の老女》とサンチョ・パンサのあいだで交わされるユーモアたっぷりの会話を見てみよう。まず老女がこう言う<sup>22</sup>。

Confiada estoy, señor poderosísimo, hermosísima señora y discretísimos  
circunstantes, que ha de hallar mi cuitísima en vuestros valerosísimos  
pechos acogimiento, no menos plácito que generoso y doloroso;...quisiera  
que me hicieran sabidora si está en este gremio, corro y compañía, el

acendradísimo caballero don Quijote de la Manchísima, y su escuderísimo Panza.

権勢いと強き公爵様、いと美しき奥方様、いと賢き御参集の皆様、わたくしはわたくしのいと深き苦悩が、皆様方のいと勇壮なる胸のなかに、慈悲深くも寛大な、と同時に安らかな避難場を見いだせるものと確信しております。

(中略)それはこのお集まり、この寄り合い、このお仲間のなかに、いと純粋で無垢な騎士、ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチッシマと、いと従士のパンサがおいでかどうかということですが…

それに対して、サンチョは次のように答える。

...el don Quijotísimo asimismo; así, podréis, dolorísima dueñísima, decir lo que quisieridídimis; que todos estamos prontos y aparejadísimos a ser vuestros servidorísimos.

—(中略)それに、ドン・キホティッシモもおりまさあ。ですから、いと苦悩のいと老女様、お前様はいと言いたいことを言いなさればいいよ。われらはすぐにでもいとお役に立ちたいと、いと用意ができていますからね。

ここでは、絶対最上級の形を乱用し、形容詞に加えて名詞や動詞にも-ísimoの形を付加している。貴族たちのあいだのみならず民衆のあいだでも、この用法が流行していたことが分かる。また、もちろんセルバンテスは、文法的にありえないことを承知の上で、名詞と絶対最上級を組み合わせているが、それにより、サンチョ・パンサの話が抱腹絶倒のものになっている。

《苦悩の老女》が、“si está en este gremio, corro y compañía, el acendradísimo caballero don Quijote de la Manchísima, y su escuderísimo Panza”「ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチッシマと、いと従士のパンサがいるのか」どうかと尋ねたところ、サンチョは、“...el don Quijotísimo asimismo”「それに、ドン・キホティッシモもおりまさあ」と答えている。じつのところ、“don Quijote de la Manchísima”「ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチッシマ」と、“don Quijotísimo”「ドン・キホティッシモ」は同一人物であり、-ísimoを、“Mancha”「マンチャ」につけるのか、それとも“Quijote”「キホーテ」につけるかという違いしかない。しかし、サンチョは、その独特のユーモア・

センスを備えている。またはその単純さで持って、(実際サンチョが、同一人物を指していたことに気付いていたかどうかはわれわれには分からないけれど、その曖昧さがこの作品をよりおもしろくしているのだが)“*asimismo*”「それに」“*el don Quijotísimo*”「ドン・キホティッシモもおりまさあ。」と答えているのだ。そうしたことを考えれば、十六世紀の当時の読者が、この箇所には破顔一笑したことが想像できるであろう。

このように、セルバンテスは、言葉自体の働きを熟知しており、その上で、その時代背景を捉え、『ドン・キホーテ』を執筆していることが分かる。

### アルカイズム的な言葉づかい

ドン・キホーテの言葉づかいは、騎士道物語の主人公のそれ、つまり、アルカイズム的な言葉づかいと酷似している。アルカイズム的な言葉づかいとは、たとえば、《*Non fuyades*》(現代スペイン語で言う《*No huyáis*》の意味)、《*fermosas señoras*》(同様に《*hermosas señoras*》の意味)、《*habedes fecho*》(同様に《*habéis hecho*》の意味)、《*manguer*》(同様に《*aunque*》の意味)《*cautivo*》(同様に《*desdichado*》の意味)などである。これらはすべて中世騎士道物語で用いられていたものにほかならない<sup>23</sup>。

それでは一つずつ、その特徴を確認していく。まず、*fuyades*, *fermosas*, *fecho* に共通することは、*h* のかわりに、*f* の音が出ることである。十四世紀・十五世紀においては、語頭の *f* は文学における好みとして容認・使用されていたが、1500年～1520年にかけて、もはや使われなくなったことが確認されている。つまり、通常の小説では、もはやこの *f* がなくなっていたことが分かる。このように語頭に *f* が来る言葉で、セルバンテスが用いたものはほかに、*fecho*, *facer*, *fermosura*, *fuyan*, *fazer*, *fermosas* といったものがある。

次に、*non fuyades* のように否定辞が *no* ではなく、*non* を用いている点が挙げられるだろう。*non fuyan*, *non vos lo digo* のような、古語的な否定辞は主にドン・キホーテが用いている。

そして、補語に *vos* (*tú* のかわり)を使うことも、アルカイズム的な言葉づかいだと言えるだろう。Julio Cejador は “*La lengua de Cervantes*” の中で、以下のように述べている<sup>24</sup>。

Vos se emplea hoy tú al hablar a Dios o a los santos, en composiciones dramáticas y en ciertas piezas oficiales, donde lo pide la costumbre, y en fin, en poesía. Son reminiscencias del vos antiguo. Además del sustantivo apositivo, pide en singular el adjetivo y sustantivo predicativos; pero no el verbo, que debe ir en plural. El uso de vos en tiempo de Cervantes era muy distinto; aunque la concordancia, que pedía, la misma de hoy. (...)

“Vos”は、戯曲や公式な作品において、神または聖人に対して“tú”と同義で用いられる。それらの中では、そう使われるべきものであり、また、詩の中でも用いられている。その用法は、古典文学の中で vos が使われていた影響を受けている。同格の名詞のほか、形容詞や名詞が述語に来る場合は単数扱いになる。動詞はそうではなく、vos の動詞は複数扱いになる。vos の使い方はセルバンテスの時代とはかなり異なっている。しかしながら、その一致に関して言えば、大体が今日と共通している。

このように、否定辞 non と、補語の vos は、アルカイズム的な響きを持つため、ドン・キホーテは会話の中で多用している。周囲のものはこれらを使わないけれど、ドン・キホーテが口にすれば、知識がなくても理解できる。その点で、後述する cautivo とは異なっている。

そして三番目に、habéis のかわりに habedes、また huyáis のかわりに fuyades といった-des の形を使用する例も見うけられる。この形は、f と h の互換と同じく、十六世紀になれば、民衆のあいだはもちろん、韻を踏む文学作品にも登場しなくなった。ドン・キホーテが使う、古い二人称複数形の形の-des は、十四世紀に使われていた文法だったものである。

十五世紀になれば、amades は、amáes, amáis, amás というように若干の揺れがあったものの、d の音が消失した形で用いられることになった。そして、十六世紀になると、ほぼ現在の形 amáis に落ち着いた。とはいえ、セルバンテスと同時代の作家たち、つまり黄金世紀の作家たち、たとえば、ロペ・デ・ベガ、カルデロン・デ・ラ・バルカなども、-des 形を好み、多用していた作品があることはよく知られている。ロペやカルデロンは主に戯曲を執筆してい

たため、韻を踏ませるために **-des** 形を使用していたと考えられている。

同様に、セルバンテスも、ドン・キホーテの台詞を古めかしく見せるために利用している。

そして、この **-des** 形は、ほとんどの場合、後ろから三音節目にアクセントがあることが分かる。たとえば、**trataredes, alcançassedes gustaredes, quisieredes, quedarades** などがそうである。しかし、少数の例外がある。たとえば **veredes, sepades** など。これらは後ろから二音節目にアクセントがある。

後ろから三音節目にアクセントが来る単語は、スペイン語では **esdrújula** とよばれている。これらは、**aguda**(最後の音節にアクセントがくるもの。たとえば **hotel, hospital** など)、**llana** (後ろから二音節目にアクセントがくるもの。 **patata, camarero** など) にくらべれば数が少ない。

それは、元々スペイン語が後ろから二つ目の音節にアクセントがくる場合が多いからである。さらに、元々存在した最後の **e** などが消失したことにより、最後の音節にアクセントがくる単語 **aguda** の割合が増えたせいである。この変遷には歴史があるので、もう少し詳しく見ていこう。

十二世紀の言語では、ラテン語の **/e/** はまだ完全に衰退していなかったが、それが **r, s, l, n, z, s** の後ろにあったとき、消失した。たとえば、**prendare** → **prender** 「担保として取り上げる」、**Madride** → **Madrid** 「マドリード」のように。しかしやがて、**e** の消失は著しくなった。とくに十三世紀初頭には、歯茎音の **z** や **d** のあとに **e** が残ることは珍しくなった。たとえば **pace, biene** は、それぞれ **paz, bien** に変化していったのである<sup>25</sup>。

ここで述べたことから、後ろから三番目の音節にアクセントがくる単語がなぜ少ないかが分かるだろう。だからこそ、**ínsula** は古語性を有している。この「島」を表す **ínsula** がもたらした効果についてはのちほど見ていくことにするが、**ulo-ula** で終わる語は総じて古語であることはまちがいない。**ínsula** 以外の例としては、**capítulo, fábula** などがあり、これらも、ラテン語から派生した古語にほかならない。この **ulo-ula** のアルカイズム性については **Julio Cejador** も “*La lengua de Cervantes*” の中でこう述べている<sup>26</sup>。

**ulo-ula** : **capít-ulo, carát-ula, céd-ula, escrúp-ulo, fáb-ula, faránd-ula, flám-ula, rôt-ulo, súp-ula, tít-ulo, túm-ulo, etc.** El dimin. latino **-ulus** es

términos eruditos; vulgarmente -uelo.

章、役者稼業、文書、ためらい、寓話、旅芸人、三角旗、看板、少量、称号、棺台など、-ulo,ula で終わるもの。これらはラテン語派生の縮小辞であり、教養語では-ulus,庶民的な言葉としては-uelo という言葉に派生する。

このように、-des 形の古語性ならびに *ínsula* に代表される *esdrújula* をドン・キホーテのアルカイズム的な言葉づかいと見なすことができるだろう。*ínsula* の古語性については、のちに、同じ意味を持つ *isla* と比較することにする。なぜなら、同じ意味を持つ *isla* が存在しているにもかかわらず、わざわざ馴染みのない古語の *ínsula* という言葉を使って、ドン・キホーテがサンチョ・パンサを従士に誘ったところに、秘められた事情があるように思えるからだ。

最後に、ほかのアルカイズム的な言葉づかいとして、接続詞と流行おくれの言葉を挙げることができる。すでに例示に出した *manguer* (現代スペイン語で言う *aunque* の意味) 以外に、ドン・キホーテは *porque* や *pues* の代用として *ca* を何度も用いている。

加えて、時代おくれとなった言葉 (いわゆる *afincamiento*) も見られる。どこまで含めるかという問題はあるものの、*cautivo*(現代スペイン語で言う *desdichado* の意味)、*congoja* (同様に悲痛 *dolor* の意味)、*acuiarse* (同様に *afligirse*, 悲しむの意味), *Ál* (同様に *otra cosa* 別のもの、の意味)、*aquende* (～のこちら側で) などを対象とすることができるだろう。

このように、ドン・キホーテは、騎士道物語の主人公を真似て、鎧甲冑に身を固めるという視覚的な模倣だけではなく、彼らの口調を真似ると言った聴覚的な模倣もおこなっており、そこにドン・キホーテの徹底ぶりを認めることができるだろう。

### 「衰退」していくドン・キホーテ

しかし、のちに詳しく見ていくことになるが、興味深いことに、後篇でドン・キホーテはそれほど、中世騎士道物語から借用した単語や言い回しを用いていない。それどころか、ドン・キホーテの口調は俗人化してきているのである。

たとえば、後篇第64章でドン・キホーテが、《銀月の騎士》と戦い、敗れ、《銀月の騎士》が自分の思い姫の方がドゥルシネア・デル・トボソよりも美しいことを認めよとドン・キホーテに迫る場面で、ドン・キホーテは以下のように述べている<sup>27</sup>。

Dulcinea del Toboso es la más hermosa mujer del mundo, y yo el más desdichado caballero de la tierra, y no es bien que mi flaqueza defraude esta verdad.

ドゥルシネア・デル・トボソはこの世で随一の美姫にして、拙者こそ、地上でもっとも武運つたなき騎士でござる。しかし拙者の弱さゆえに、この真実を曲げることはあいならぬ。

このときは、先に見られたような言葉遣いをしていない。《fermosa》《cautivo》《aquesta》などを口にするのではなく、それぞれ《hermosa》《desdichado》《esta》を用いている。この変遷については多くの説が存在するが、もっとも有力な説は、打ちのめされたドン・キホーテが、もはや独自の理想世界の中で生きることができなくなったからだというものである。これは、ドン・キホーテが「衰退」していき、ついには死に至ったのだという結末にも関連している。このように、ドン・キホーテは理想世界で生きていた前篇と後篇の前半部には騎士道物語的な言葉遣いであるのに対し、終焉に近づくにつれて、俗人的な言葉遣いに変わっていくのである。

ドン・キホーテが「衰退」していく過程については、第3章で詳しく論ずることにし、次の章では、ドン・キホーテの狂気のみを焦点を当てたい。

## 2 ドン・キホーテの狂気

### 狂気とは何か

のちの章で、ドン・キホーテが本当に狂っているのかどうかについて論じるので、ここではまず、狂気とは何か、または狂っているとはどのような状態を



指すのかを見ていくことにする。プラトンは、『パイドロス』の中で、狂気とは「人間がこの世の美を見て、真実の美を想起し、翼を生じ、翔け上がろうと欲して羽ばたきするけれども、それができずに鳥のように上の方を眺めやっつて、下界のことをなおざりにすること」<sup>28</sup>だと定義している。また、パスカルに言わせると「人間たちとはかくも必然的に気ちがいであるので、気ちがいでないとは、狂気の別のひとめぐりによって、気ちがいであること」<sup>29</sup>。さらに、フーコーは、「狂気は野生の状態では見出されず、社会のなかで存在する。狂気は、それを孤立化する感受性の諸形態、それを排除しあるいは捕捉する嫌悪の諸形態の外に存在するものではない」<sup>30</sup>と述べている。

近代社会がはじまったとき、人間が一番最初にしたことは、狂人と理性人を区別することだったとフーコーは指摘している。近代に入り、人間の狂気は大きなテーマとなったので、教養人たちは、狂気とはどのようなものかを論じてきた。近代小説は『ドン・キホーテ』から始まると言われるが、ルネサンスの終わりにさしかかっていたセルバンテスの時代において狂気が大きな題材のひとつとなっていたことを否定はできない。

また、セルバンテスと同時代人のイギリスの劇作家ウィリアム・シェイクスピアの作品にも、狂気がテーマとなっているものが少なくない（あとで触れることにする『リア王』『ハムレット』など）。十六世紀後半から十七世紀初頭にかけて、人間の狂気がいかに人々の関心を集めていたかが分かるだろう。

ドン・キホーテの狂気をどう定義するかによって、ドン・キホーテが本当に狂っているのか、それともまったくの正気（フーコーが定義する理性人）なのかの判断が変わってくるにちがいない。

プラトンとパスカルの「狂気」に対する態度は、概ね同じであると言える。両者によれば、すべての者は、本質的に内に狂気を秘めており、それを外へ出すか内に留めておくかの違いでしかない。

しかしながら、プラトンとパスカルを擁護すれば、ドン・キホーテ狂気説と佯狂説を論議することが無意味になってしまう。したがって本論文では、彼らの考えを受け入れることはできない。なぜなら、総じて人間は何らかの形で「狂って」おり、狂っていない人間は存在しなくなるからである。

フーコーの意見もプラトンとパスカルの意見と似ているが、社会学的な視点に立っている点が異なる。フーコーは、狂気は原始的な社会ではあり得ず、社会が構成され、細分化され、秩序立てられていく内に、狂気が生まれると述べているからである。彼らの意見は、たしかに妥当なものであるが、ドン・キホ

一テの狂気を論ずるのには相応しいとは言えないだろう。なぜなら、フーコーは、他者との関わりを持つ人間なら誰でも狂う「可能性がある」と結論付けているからである。

つまり、ドン・キホーテの狂気を明らかにするためには、哲学的な観点や社会学的な観点ではなく、心理学的な観点（とくに異常心理学的な観点）から探る必要がある。

精神分析学研究の小田晋は、マルクス・トゥッリウス・キケロ<sup>31</sup>の説に倣って、狂気にはインサニアとフュロールと呼ばれる<sup>32</sup>二種類があると述べている。

フュロールは、より重い狂気であり、自分をレンガだと思い込み、壊れるのを恐れていた男性の例を挙げている。セルバンテス『模範小説集』<sup>33</sup>に含まれる「ガラスの学士」の主人公が有していた狂気はフュロールだと言えるだろう。ガラスの学士は、自身がガラスでできていると思い込み、他者が自分に触れようものなら、自身が割れてしまうとびくびくしているからである。

インサニアとは、現世的な価値感に照らして、良識の欠如が見られる人物のこと、またその人物が有する狂気のことである。良い夫であり、隣人であるのに、なぜか空っぽの劇場に座り込んで喝采するような人物のことをさす。彼らは、日常生活にはほとんど支障をきたさないため、その狂気は隠されており、インサニアのことを「正気の狂人」と呼ぶこともある。

キケロはさらに、狂気ははっきりと二分されるわけではなく、ときにはフュロールともインサニアとも判別しがたいものがあるとも述べている。

ドン・キホーテの有する狂気は、インサニア的な部分が大きいと言えるだろう。ドン・キホーテは、現世的な価値感（十六世紀の社会的価値観、つまり騎士道など虚構にすぎないという考え方）に照らして、良識の欠如（騎士道物語に描かれていることは事実であり、騎士道とはかくも高貴なものであるというドン・キホーテの考え）が見られるからである。さらに、キケロが指摘するように、ドン・キホーテもまた「正気の狂人」とみなされているからだ。

しかしながら、ドン・キホーテの狂気は、秘められたものではなく、誰の目にも明らかなものである。ここが、インサニアとは異なる点であろう。また、話が騎士道物語に及べば、狂気を露わにし、激昂することさえある。これはやはり単なるインサニアとは言えないだろう。

つまり、ドン・キホーテは、インサニアより重度の狂気、フュロールを有し

ていると言えるだろう。なぜなら、良識の欠如、言い換えれば、騎士道物語で起こったことは実際の出来事だと思い込むだけに留まらず、自らをドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャという騎士だと名乗り、冒険へと乗り出し、出会った人々（ときには動物や建物）を「貴婦人」「騎士」「巨人」「悪党」などに勝手に分類し、敵と見做した者たちには、槍を振りかざしているからだ。ドン・キホーテにとっては、当時の治安を警備していた宗教団体であるサンタ・エルマンダーも「悪魔」と映り、牢屋に入れられることにも構わず、彼らを「粛清」しようとする。

ここでもう一度『ガラスの学士』に戻ろう。ガラスの学士とドン・キホーテはとても似ている、というのが研究者たちの共通の意見である。たしかに、二者は似ている。つまり、ガラスの学士は自身がガラスでできていると、ドン・キホーテは自身を騎士道物語の主人公だと思い込んでいる。

両者は自分でないものになっているという点で似ている。また、双方とも、かなりの知識人である。ガラスの学士に、相談に来ている人が大勢いるし、ドン・キホーテはサンチョの言うように、説教師になれるほどの知識や雄弁さを有している。また、人々がそれぞれの狂気を笑いの種にしているという点でも共通している。

では、二者はどんな点で異なっているのかと言えば、狂気の根底にあるものが違うと考えることができる。ガラスの学士は、自分の体がガラスでできているから、他者に触られることを極端に怖れている。一方、ドン・キホーテは、騎士道物語を読みすぎたために自身を騎士だと思い込んでいるので、敵とみなしたものと相対すると容赦なく好戦的になるのだ。

つまり、両者はどちらも狂気を有しているものの、ガラスの学士のほうは他人には弱気な人物に映り、いつも何かに脅え、他者と距離をとりたがっているように感じられる。ドン・キホーテはその反対で、自信に満ち溢れており、好戦的になることもあるが、基本的に好奇心が強く、他者と積極的にかかわろうとしている。

ここで、精神病理学の観点から、ドン・キホーテの狂気を分析する必要があるだろう。とは言え、重要なのは、二十一世紀の精神病理学的な捉え方ではなく、セルバンテスの時代に、精神医学がどのように考えられていたかである。したがって、まず、十六世紀当時、「狂気」に侵された人々が行きつく先だった、精神病院について見ていく必要があると思われる。

## 1 6 世紀当時の精神病院

それでは、その当時「狂っている」人はどのような待遇を受け、精神病院とはどのような場所として考えられていたのかを見ることにしよう。十六世紀、狂気は悪魔がついたものと見なされていた。そのため、サンチョ・パンサは、ドン・キホーテの狂気を何度も「何かに憑かれた」と表現しているのだ。

たとえば、前篇第52章で、サンチョは次のようにドン・キホーテを諷める<sup>34</sup>。

¿Qué demonios lleva en el pecho que le incitan a ir contra nuestra fe católica?

カトリックの信仰にたてつくようにそそのかされるとは、お前さま（ドン・キホーテ）の胸には、いったいどんな悪魔が入りこんでいるんだね？

サンチョの言葉からも、当時、狂気には悪魔が取り憑いていると広く信じられていたことがうかがえるだろう<sup>35</sup>。

近代に入れば、科学的な狂気の研究が進むが、中世では狂気は呪術的なものであるという考え方が主流であった。この「憑依」という考え方は、古代以来、狂気の重要な<し>として存在していた。このように狂人にとりついた悪魔は告発されなければならなかった。そして<神のみことば>によって、その不純な魂は追い払われる必要があった<sup>36</sup>。

また、一方では、薬草を用いた精神病の治療や共同体ぐるみのケアもおこなわれだした。この矛盾する傾向を描いたのが、中世の画家、ヒエロニムス・ボッスであると小俣和一郎は言う<sup>37</sup>。たしかにボッスは、『阿呆船』と『愚者の石』という狂人たちを題材にした絵を描いている。阿呆船とは、北部ヨーロッパ都市間の運河を利用して、精神病者を乗船させ、追放するために考案された船である。この船にはほとんど水や食料がなく、精神病者たちは餓死するよりほかに道はなかった。それに対して『愚者の石』では、精神を病む理由だと信じられていた脳内の異物（石）のことにほかならない。絵画においては、僧侶がそれを取り除こうとしている場面が描かれている。このように、当時は、狂人たちを追放・隔離しようとする一方、彼らを治療する試みもあった。

また、狂人たちは一種の見世物で、精神病院には、金を払えば誰でも入るこ

とができ、患者たちを物珍しげに眺めることができたという記録が残っている。『ドン・キホーテ』後篇第1章では、狂人とも正気な人間ともつかぬ男が、病院を退院するか迷っている場面もある。

精神病院の起源は、およそ十世紀ごろと考えられている。精神医学史のフランス人研究者、エスキロールは、モロッコの古都であるフェズに、七世紀以前に精神病院が存在したと主張したが、確たる史料を挙げてはいない。また、フェズは、七世紀にはまだ存在していなかったという説もある。

また、精神病院という施設の起源は、宗教的施設（寺院）、または拘禁的施設（監獄）のどちらかであると言われている。そして、前者の方が、どの国においても古いと、精神医学史研究者は述べている。

スペインでののはじめての精神病院は、1409年にバレンシアで建てられた。カトリックの司祭、ジョフレのイニシアティブによることから、その起源は宗教団体にある。このように、世界の精神病院の多くが、宗教的ないしは拘禁的施設に由来しているのは見たとおりである。

### 精神病患者とドン・キホーテ

それでは、ドン・キホーテは「精神疾患患者として狂っているのか」という問いを投げかけるとしよう。ドン・キホーテは、きわめて精神疾患患者の症状に近い。しかし、完全なる精神疾患患者とは言えないと思われる。なぜなら、精神疾患患者が持つ特徴とは、異なるからである。

では、どう「異なる」のか。狂っている人々の種類（神経症、鬱症、精神分裂症）を挙げ、その症状、特徴を挙げていこう。

精神的疾患とは、異常行動をする人間のことであり、異常行動とは、ある基準から逸脱した行動のことを指す。ドン・キホーテは、インサニア的狂気であり、その意味では精神的疾患を患っていると言えるだろう。

つぎに、ドン・キホーテが神経症や精神分裂症、鬱症を患っているかどうか検証していこう。

ただし、以下に挙げる特徴は、誰にでもあることである。そのため、正常人と精神疾患患者を分けているのは、その行動の程度の違いでしかないということは先に述べておく。

まず、鬱症は、睡眠障害や食欲障害をきたし、食事に毒が入っているのでは

と言う被害妄想を持つことが多い。

そして神経症は、鬱症と違い、睡眠障害や食欲障害をきたすことはなく、急に不安に襲われたり、パニック状態になるパターンが多い。

最後に、精神分裂症を見ていこう。精神分裂症の人は、積極的な行動をとらなくなり、思考や思考過程は異常をきたし、妄想や幻覚が激しくなる。積極的な行動が欠如することにより、自閉症気味になるが、知的な活動には目立った異常が見られないのが特徴である。社会とのかかわりを避けるため、行動は利己的になりやすく、他者への忠誠や愛情もなくなるとされる<sup>38</sup>。

詳しく言えば、精神分裂症は四つに分類することができる。成就の衰微と世界への無関心から起こされる単一型精神分裂症（単純型）、急性に興奮し衝動的になったり、または反対に無言無動になったりする緊張型精神分裂症、強い妄想と幻視、幻聴を伴う幻覚症状を有する妄想型精神分裂症（また、この型に属する発症者はほかの精神病の発症者に比べて、年齢が高く、また通常知能が高いとされていることも付け加えておく）、最後に神経症を思わせるような不眠・頭痛・易疲労感・注意集中困難・抑うつ気分で始まり、異常行動、退行行動まで至る解体型精神分裂症（破瓜型）に分類される。

また、クレッチマーによると、精神分裂症は体型と或る程度の関連性があるという。精神分裂症患者の多くがやせ形であり、そのもともとの性格の特徴も「引っ込み思案でまじめであり」、「内気で、物静かで、非社交的」、「臆病で神経質」な面を持ち「まじめで善良」「厳格で礼儀正し」い半面、「頑固」で「現実離れしており空想」を好む。また「ユーモアを理解せず」「疑い深く」「繊細で過敏」で「興奮しやすく、すぐ不機嫌になる」。

たしかにドン・キホーテは、痩せており、性格的特徴のいくつかも当てはまっている。クレッチマーの説に従えば、精神分裂症患者は、前述した特徴のすべてを有しているわけではないので、ドン・キホーテに当てはまらない点はいくつかあるのも納得がいくだろう。たとえば、ドン・キホーテにはユーモアがあるし、別段、疑い深いわけでもない。騎士道物語のことに話が及ばないのであれば、理知的で、誰もがドン・キホーテの狂気に憐憫の情をおぼえるくらいである。

三つのパターンを検証したところ、精神に何らかの異常をきたしている人は、以下のような特徴を有していることが多いと見られる。①無表情②無関心・自閉的③会話がくどい④知覚異常⑤妄想といった特徴である。

ドン・キホーテは、一見すれば、③④⑤の特徴を有しているようである。し

かしながら、③はヨーロッパ文学の伝統でもあるため、多弁や雄弁と区別しなければならない。③について、前に引用した木村榮一の『スペインの鱒釣り』の文章をもう一度見てみよう<sup>39</sup>。

騎士道物語でもうひとつ忘れてならないのは、登場人物たちがきわめて饒舌だということである。戦いに際しては、なぜ戦うかについて延々と説明し、言葉で士気を高め、またたえず部下に声をかけて力づけ、励ます。恋をすればしたで、自らの思いを切々と訴え、キリスト教的なモラルを開陳する、敵と相対しては、自らに非のないことを滔々と弁じ立てる。騎士道物語に描かれているまことの騎士というのは、現代人が読めば時には辟易するほど饒舌である。つまり、騎士とは戦士であると同時に、言葉の人でもあるのだ。

木村の引用より、ドン・キホーテが雄弁だからといって狂気と結びつけてはならないことが分かるだろう。精神患者は、主語や目的語が欠如したり、またはコンテクストを無視したりするため、だらだらと長い文にならざるを得ない。しかし、ドン・キホーテは、洗練された言葉で騎士道精神を説いているのである。したがって、③もドン・キホーテには当てはまらない。

ドン・キホーテは、のちに見ていくように、他者に対して攻撃的な態度をとることはあっても、人を殺すことはない。それではドン・キホーテは正気なのだろうか。

ドン・キホーテが、正気と言えないのは、ドン・キホーテには、幻聴や幻覚として、現実には起こっていないことが見え、聞こえるからだ。ただし、ドン・キホーテはいつも幻覚を陥っているわけではない。「騎士道物語に関することだけにだけ」ドン・キホーテの知覚は狂ってしまうのである。

これが、ドン・キホーテの狂気である。ドン・キホーテは、つねに気が狂っているわけではない。その論拠に、ドン・ディエゴとの会話において、ドン・キホーテは何と素晴らしい論を展開していたことだろう。また、サンチョとの会話では、従士への気遣いや思いやりを見せることは周知のとおりである。

ドン・キホーテは、精神患者として狂っているとは言えないのだ。じつは、精神患者には、自然治癒はない。必ず通院し、医師との面談や、投薬によってその症状を抑えなければならない。しかし、ドン・キホーテは、後篇第72章に至って、明らかに正気を取り戻しているのだ。これは、通常精神患者

にはない特徴である。

セルバンテスと同時代の文学者の作品を考えてみれば、「狂人」とされた物語主人公たちが、いかに「狂ったまま」人生を終えていることが分かる。セルバンテスの時代では、精神病患者を精神病院という施設に一か所に集めているだけで、彼らに対して適切な「ケア」をおこなっているわけでもない。また、薬を投与していたわけでもない。つまり、精神病患者たちには、「狂ったまま一生を終える」しか道は残されていないのだ。

以上見てきたように、ドン・キホーテは、精神病患者のように狂っているとは言えない。

### 佯狂説に対する疑問

筆者はドン・キホーテが狂気を内に秘めていると考えるものだが、ただしその狂気は、精神病患者（鬱病患者や神経症患者、精神分裂症患者）とは明らかに異なっている。ドン・キホーテはつねに狂気に陥っているわけではないし、また、治療を受けなくても、最後には理性を取り戻したことから見れば分かるからである。

ドン・キホーテが「狂う」のは、睡眠不足と読書に耽ったせいである。そして、騎士道物語に描かれている話は本当のことだと思えるようになった。けれども、最後には徐々にその狂気から覚めていき、死を迎える。

まず、ドン・キホーテが、睡眠不足と読書三昧で狂ったと書かれているが、これは医学的に見ても起こり得る。

この様にドン・キホーテが「狂ってしまった」ことが描かれている一方、ドン・キホーテが真っ当な事を言ったり、その場に相応しい行動をしたりする。そのためドン・キホーテは単なる狂人ではなく、「正気と狂気の混じり合った狂人」だと言われる。これまでこうしたドン・キホーテが狂気と正気を有する人間だと位置づける狂気説が主流を占めてきた。騎士道物語に関する話に話が及べば、理性を失うのである。

しかし、近年になって、佯狂説が登場した。佯狂説は、マーク・ヴァン・ドレーン、マダリアーガ、牛島信明の三人の評者が唱えている説で、郷土アロンソ・キハーノは、自らの意思でドン・キホーテを演じているというものである。つまり、ドン・キホーテは終始正気を保っており、その上で、狂った「ふり」をしてすべての冒険譚をくり広げたのだと主張している。果たして、狂気説と



佯狂説のどちらの説が的を射ているのだろうか。

### ドン・キホーテ狂気説

狂気説は元来からの説で、ドン・キホーテは狂っているのだとする説である。ただし、登場人物たちの多くが考えているように、ドン・キホーテは単なる狂人ではなく、「正気と狂気のまじりあった」狂人であり、一見正気な人間に思われるが、内には狂気を秘めているとする説である。たとえば、片倉充造は、何人かの研究者が佯狂説を擁護していることを引き合いに出しながら、前篇第25章でのドン・キホーテのいくつかの真っ当な意見（ドゥルシネアの返事がつれないものであるのなら、本当の狂人になってしまうだろう、というドン・キホーテの台詞）に対し、「ここでは世人同様恋愛宣言をしているものと解釈したい」、「このことは、普段は有徳の知識・教養人でありながらも、騎士道（物語）のテーマには過剰反応するドン・キホーテ像と、別に矛盾するものではない」<sup>40</sup>と主張している。これによりドン・キホーテが、あるときは真っ当な教養人、また別のときには騎士道物語に書かれていることを信じきる狂気を有する人物というように、その性質を変えていくことを認めている。また、ドン・キホーテの狂気そのものについては、「騎士道（物語）という刺激に過剰反応を引き起こすもの」であり、「わけても15章以降は、〈旅籠＝城〉という認識が、その〈狂気〉の象徴」<sup>41</sup>となっていると述べていることから、ドン・キホーテの狂気が佯狂ではないことを仄めかしている。

### ドン・キホーテ佯狂説

次は、ドン・キホーテは狂っていない、実は狂った「ふり」をしているだけなのだという研究者の意見を見よう。たとえば、マダリアーガ、牛島信明はこの佯狂説を支持している。

マダリアーガの説は、マーク・ヴァン・ドーレンの説に倣っている。ドーレンは今から四十五年ほど前に、著書“*La profesión de Quijote*”の中でドン・キホーテ役者説を唱えた。ドーレンは、後篇第11章のドン・キホーテの台詞、“desde muchacho fui aficionado a la carátula, y en mi mocedad se me iban los ojos tras la farándula.”「拙者は幼少のみぎりより仮面劇を好み、役者稼業にひどく憧れたものじゃ……」という箇所から、ドン・キホーテが役者に憧れていたため、自らが主人公として舞台上に上がり、他者の眼を気にしながら、演技をしているのではないかと主張している。

しかし、このドン・キホーテの台詞で、アロンソ・キハーノが役者になりたいと思ったことは理解できるものの、それが原因で、ドン・キホーテを演じているとは言いきることはできないのではないだろうか。

同様にマダリアーガは、ドン・キホーテのことを“un loco por engaño de sí mismo”「自己欺瞞による狂人」<sup>42</sup>と呼んでいる。

しかし、どのエピソードをして、「自己欺瞞」と言っているのかがはっきりしない。たとえば、風車の冒険など、もしそれらがドン・キホーテの自己欺瞞だとするならば、その根拠を示さねばならないものの、マダリアーガは、後に述べる「ドン・キホーテの狂気の部分」を明らかにすることはない。

牛島信明は、著書『ドン・キホーテの旅—神に抗う遍歴の騎士』の中で、「彼（ドン・キホーテ）はぬるま湯につかったようなこの日常のなかに、書物＝ポエジーを実現してみせようと意識的に試みただけであって、その限りにおいては狂っているわけでもなんでもない」<sup>43</sup>と述べており、ドン・キホーテの狂気は、単に世間一般の思いもよらないことをしているだけだと主張する。

続けて、ドン・キホーテはみずからの言動を、第三者がどのように捉えているのかをつねに意識しており、ドン・キホーテの自意識には徹底したものがあると断定したうえで、以下のような三つの根拠を示している。

一つ目は、前篇第5章のドン・キホーテの発言“sé que puedo ser ... todos los doce Pares de Francia”「フランスの十二英傑のすべてにさえなれるということ存じておる」<sup>44</sup>である。

フランスの十二英傑というのは、シャルルマーニュに仕えた、ローランをはじめとする、いずれ劣らぬ英雄的な騎士たちのことであるが、ドン・キホーテはなろうと思えば、すなわち、その意志があれば彼らのうちの誰にでもなれると言っているのだ。牛島は、役名としてのみ、ドン・キホーテがフランスの十二英傑になれると述べる。それこそがドン・キホーテ役者説を唱える所以であると主張する。

しかし、ドン・キホーテが騎士道物語を読みふけたために頭がおかしくなったのだと、本文に書かれているのだから、ドン・キホーテのこの発言は、その狂気と何ら矛盾するものではないと思われる。

二つ目は、前篇第25章で、ドゥルシネアの元にドン・キホーテの手紙を届けに行くサンチョに対してかけるドン・キホーテの言葉である。<sup>45</sup>

Loco soy, loco he de ser hasta tanto que tú vuelvas con la respuesta de una carta que contigo pienso enviar a mi señora Dulcinea; y si fuere tal cual a mi fe se le debe, acabarse ha mi sandez y mi penitencia; y si fuere al contrario, seré loco de veras, y, siéndolo, no sentiré nada.

そう、わしは狂人じゃ。いま、ドゥルシネーア姫のもとに届けてもらおうと思っている手紙の返事を持ってお前が帰ってくるまでは、なんとしても狂人であるのじゃ。で、その返事がわしの真心に見合うものであれば、わしの狂態や苦行も終わりを告げるが、もしその反対であったら、わしは本当の狂人になるだろう。そうなれば、わしは何も感じなくなるだろう。

牛島は、この箇所に関して、精神病理学を持ち出すまでもなく、ドン・キホーテは実は狂ったふりそしているだけであることを断定できると述べている<sup>46</sup>。

しかしながら、狂人が、「将来自分は狂人になるだろう」と言う可能性もある。また、『ドン・キホーテ』で自分が狂人だと把握している人物もいることから（この場合の狂人はカルデニオを指すが、カルデニオについては後に見ていくことにする）、狂人や狂気が同じパタンにはまっていることは稀であり、色々なパタンの狂気、狂人がいると考えるほうが妥当ではないだろうか。

三つ目に、前篇第15章のドン・キホーテの台詞からも、佯狂であることがうかがえると牛島は主張する。ドン・キホーテは、以下のようにサンチョに言う<sup>47</sup>。

Y si no fuese porque imagino..., ¿qué digo imagino?, sé muy cierto, que todas estas incomodidades son muy ajenas al ejercicio de las armas...

こうしたもろもろの苦難がすべて騎士の武者修行にはつきものであるということを、想像...いや、どうしてまた想像などと言ってしまったのであろう、そう確信しているのに....

この箇所について牛島は、ドン・キホーテがもし本当の狂人なら、ここで「想像」などという言葉がでてはこないのではないかと論じている。牛島は、ドン・

キホーテがここで「演じまちがって」しまったのだと指摘している。ドン・キホーテが遍歴の騎士を演じるためには、次に言う台詞を考えながら、つねに舞台袖に控えて出番を待っていなければならないが、時々、ドン・キホーテ自身でさえ、今舞台に立っている状態なのか、控えている場面なのかがよく分からなくなってしまう。前篇第15章のドン・キホーテのこの発言は、「台詞」を言いまちがえてしまったのだと結論付けている。

しかしながら、この発言だけで伴狂説を唱えるのはあまりにむりがある。たしかにこのとき、ドン・キホーテの正気な部分がこの発言をしたのだと言うのであれば、そこまでは容認できるものの、この発言だけで「ドン・キホーテが演じまちがって」しまった「役者」であるとは言い切ることができない。以上のように、伴狂説支持者の意見に反論することができるだろう。

#### ドン・キホーテの正気の部分

筆者もまた、ドン・キホーテの正気の部分を挙げるができる。

たとえば死に瀕したときの、アロンソ・キハーノの言葉（ドン・キホーテであったときの記憶が完全にあること）や、縮絨機 *batán* の冒険でのドン・キホーテのリアクション（後で見るが、二度見立てなおさなかったこと）などを見れば、ドン・キホーテが単なる狂人でないことは分かるだろう。

それでは、後篇第74章における、ドン・キホーテの台詞を見てみよう。死に瀕したドン・キホーテは、“como dije, no las [misericordias] impiden mis pecados”「わしのおかした数々の罪も、そのお慈悲の妨げとはならなかったのじゃ。」と発言し、続けて、ドン・キホーテが遺言をのこす場面で“Sancho Panza, a quien en mi locura hice mi escudero”「わしが狂気におちいていた時に従士として仕えてくれたサンチョ・パンサ」を“yo loco fui parte para darle el gobierno de la ínsula”「島の領主にするために努力した」と述べている<sup>48</sup>。

ドン・キホーテは、騎士になりきりおこなった冒険沙汰を“*mis pecados*”「おかした数々の罪」だと言い、サンチョを“*en mi locura hice mi escudero*”「狂気におちいていた時に仕えてくれえた従士」だと認識している。また、自分がサンチョを“*yo loco fui parte para darle el gobierno de la ínsula*”「島の領主にするために努力した」ことをはっきりと覚えていることを示す発言をしている。これは、明らかに単なる狂人ではないことを物語っていると見ていいよ

うに思われる。

ここで思い返したいのは、前篇第27章である。その章では、幼少の頃から愛し合っていた貴族の娘、ルシンダが心変わりをして、近郊に住む大富豪フェルナンドに身を任せた、と思ひ込んだ下級貴族のカルデニオが、狂人になってしまったことが語られる。彼はそのさい“vengo a quedar como piedra, falto de todo buen sentido y conocimiento”「まるで石ころのように意識も感覚も失った状態になってしま」<sup>49</sup>い、“y vengo a caer en la cuenta desta verdad, cuando algunos me dicen y muestran señales de las cosas que he hecho ...”「そして、完全に自分を支配する恐ろしい狂気の発作にとらわれているあいだにしでかしたひどい行為について人に言われたり、その証拠を見せつけられたりすると、やっぱりそれが本当であったことに気づく」<sup>50</sup>と述べており、自分が狂っているときの記憶がないようである<sup>51</sup>。

正気に戻ったカルデニオが、恥じ入るような行為をやってしまったのである。そのときカルデニオは、小田晋の言葉<sup>52</sup>を借りれば異常心理的に「キレた」状態になっているからである。

通常、われわれは、自分たちの行動を絶えず言葉に置き換えながら生活している。「いま～している」と、自分の行動をモニターしている。これを「内言語」というが、いわゆる「キレ」た状態になると、内言語も同時に切れてしまうのだ。内言語が切れてしまうと、自らの行動がモニタリングされないで、その間に、自分が何をしたのかを覚えていないのだ。

カルデニオは愛するルシンダの裏切りによって狂ってしまったが、彼とドン・キホーテのあいだには大きな違いがある。それは、カルデニオが正気でないときの記憶が曖昧なものであったのに対し、ドン・キホーテは告解の際に、自分の犯したことをはっきり覚えていた点にほかならない。

しかし、上記は、ドン・キホーテの狂気とカルデニオの狂気が異なるということの証明でしかない。自分の行動を逐一「モニタリング（観察）している」ことが、正常であるとイコールではないと近年の心理学の研究に明らかになっている。そのため、この論証をして、ドン・キホーテの佯狂を導き出すことは難しいと思われる。

ドン・キホーテが単なる狂人ではないと感じさせられる箇所はまだある。たとえば前篇第20章で、ドン・キホーテとサンチョは、暗がりの中、不気味な音を出すものの正体をつきとめにいく。怪物だと思っていたが、じつは縮絨機であった。そのとき、サンチョ同様、ドン・キホーテも、“*Cuando don Quijote vio lo que era, enmudeció y pasmóse de arriba abajo. Miróle Sancho, y vio que tenía la cabeza inclinada sobre el pecho, con muestras de estar corrido.*”

「ばつが悪そうに、頭を胸の上にたれて」<sup>53</sup>現状をありのままに把握していた。

この箇所だけ見れば、なんということもないかもしれないが、今まで現実を歪曲させ、風車を巨人と見立てていたドン・キホーテが、なぜ縮絨機を怪物だとことあげしなかったのか疑問が残る。

元々ドン・キホーテは、自分の名前をアロンソ・キハーノからドン・キホーテへと「変え」、思い姫をドゥルシネーアと「名づけ」た。当初、ドン・キホーテには独自のルールがあった。ドン・キホーテが風車を巨人だと一度思い込めば、サンチョがどれほど巨人ではないのだと言っても、また、ドン・キホーテ自身が大けがを負ったとしても、風車は巨人であり続けた。途中から、やはり風車だったと認めることもないし、まったく別の物(たとえば城や巨大な馬)だと考え直すこともない。

それは、二段構えになってはならないのである。二段構えとは、この場合、Aという物体をドン・キホーテがBだと認識すれば、ドン・キホーテにとってBであり続け—それがBでないと気付いたとしても—、今度はCだと主張することはないという意味である。

ここまでだと、ドン・キホーテは単なる狂人のようだが、縮絨機になると事情が異なる。なぜなら、そこで初めて現実をありのままに捉えるからである。ドン・キホーテは「不気味な音＝巨人や冒険の到来」だというルールを設けた。そして、極度の緊張からか、正気なときに働く理性のせい、不気味な音の正体が縮絨機だとドン・キホーテは気づく。するとドン・キホーテの脳内では、「不気味な音＝縮絨機＝冒険の到来」という図式はなりたたなくなる。

これがただの狂人であれば話は変わってくるだろう。そうなればおそらく、縮絨機の正体が分かった後でさえ(単なる狂人であれば、もはや縮絨機が縮絨機だと判別すらできないであろうが)、サンチョに「巨人だ、冒険の到来だ」などと叫び、風車の冒険のときのように、縮絨機に突進したにちがいない。

しかしながら、この点については、「佯狂説の脆弱さ」の章で、もう少し詳

しく見ていく必要がある。ドン・キホーテは、また別の章においては、やはり現実を認識できていないことがはっきり分かるからである。周囲のものが何と言おうが、旅籠が城であり、宿の主人が城主であると言ってきかないのだから。

### ドン・キホーテの狂気の部分

このようにドン・キホーテが正気である例を挙げてみたものの、佯狂説は根拠が薄いように思われる。たしかに、ドン・キホーテには正気の部分があり、ときには「演じまちがって」「台詞」が正しくないこともあるのだから、それらの部分だけを見れば、ドン・キホーテ役者説は的を射たもののように見える。しかし、ドン・キホーテには、狂気としか言いようがないときもある。その例を挙げていくことにしよう。

まず、見ているもの、触っているものを認識する能力、すなわち知覚に異常をきたしている部分を見ていきたい。

前篇第16章では、マリトルネスとのあいだにおこった事件が描かれている。ドン・キホーテ主従が泊まった旅籠にはマリトルネスという女中がいた。彼女は、旅籠に泊る客からの要望があれば、夜中に客の元を訪れ、客を満足させている。ドン・キホーテとサンチョ・パンサが泊まった夜、ドン・キホーテたちの隣の部屋の男が、彼女に「仕事」を頼んで待っていた。マリトルネスは、あやまってドン・キホーテの寝室に入ってしまう。

そのころ、ドン・キホーテは、自分たちが招かれた城には、自分に思いを寄せる若く美しい姫がおり、姫はその思いを遂げようと、一人ドン・キホーテの部屋にやってくるという妄想に駆られている。そんなわけで、マリトルネスが部屋に入ると、ドン・キホーテは彼女を強く抱きしめるのだが、そのときこう感じる<sup>54</sup>。

Tentóle luego la camisa, y, aunque ella era de harpillera, a él le pareció ser de finísimo y delgado cendal. Traía en las muñecas unas cuentas de vidrio; pero a él le dieron vislumbres de preciosas perlas orientales.(...) Y el aliento, que, sin duda alguna, olía a ensalada fiambre y trasnochada, a él le pareció que arrojaba de su boca un olor suave y aromático; (...) Y era

tanta ceguedad del pobre hidalgo, que el tacto, ni el aliento, ni otras cosas (...) no le engañaban,(...)

粗末な麻布のシュミーズに手をふれたが、彼にはそれが極上の薄絹に思われた。女中の手首にはめられたブレスレットはビーズをつないだものであったが、彼にはそれが、東洋の真珠の輝きを発しているように思われた。(中略) 古くなったニンニク入りのサラダの悪臭を発していた女(マリトルネス)の息さえ、彼にとってはそれが、馥郁たる芳香と感じられた。(中略) 実際、この哀れな郷士の盲目ぶりはたいそうなものだったので、手ざわりにしても口臭にしても、(中略) 彼が幻想から目覚めることはなかった。

このとき、ドン・キホーテの知覚は、完全に狂っていると言えるだろう。知覚の異常といえば、視覚・臭覚・聴覚・触角・味覚、いわゆる五感の異常が考えられるが、この条りにおけるドン・キホーテは、聴覚・味覚を除く三感が麻痺している<sup>55</sup>。

ちなみに、ドン・キホーテの狂気は徐々に弱まっていくことはよく知られている。後篇になるとドン・キホーテの狂気は急速に弱まっていく。後篇第10章で、醜い田舎女をドゥルシネアに見立て、満足な体のサンチョであったが、ドン・キホーテには、そのまま田舎女として映ってしまうのである。そのときのドン・キホーテは次のような台詞を口にする。“Yo no veo, Sancho, sino a tres labradoras sobre tres borricos.”「わしにはな、驢馬に乗った三人の百姓女にしか見えぬぞ。」<sup>56</sup>、“la transformación y volvieron en una figura tan baja y tan fea como la de aquella aldeana”「あの田舎娘のような下賤で醜い姿」<sup>57</sup>に変えられてしまったドゥルシネアからは、“me dio un olor de ajos crudos, que me encalabrinó y atosigó el alma.”「生ニンニクのものすごい臭いがぷーんときたので、わしは頭がくらくらして、魂まで毒された気になったものよ。」<sup>58</sup>このとき、ドン・キホーテの知覚はまったくの正常な状態だと言えるのだ。

この章と比較すれば、前篇第16章においていかに、ドン・キホーテが知覚の異常をきたしているかが分かるのである。

次に、風車の冒険、羊の大群に突進するなどのエピソードからもドン・キホ



一テの狂気がうかがえるだろう。

ドン・キホーテは、前後篇通して誰一人殺しているわけではないが、人に大けがを負わせることは何度もある。また、危うく他者を殺すところだった、と書かれている箇所もある。大けがを負わせた回数は五回、「殺す」手前だったのが三回ある。この合計八回にわたるドン・キホーテの狂態はすべて前篇においてくり広げられている<sup>59</sup>。

前篇第3章では、馬方二人に対して、槍を振りかざす。始めの馬方には頭上に槍をふるい、次の馬方に対しては頭を四か所にわたって切りつけている。前篇第8章では、幸い大事には至らなかったものの、サン・ベニート派の修道僧に対して、槍を低く構えて襲いかかっている。

前篇第9章においては、ドン・キホーテはビスカヤ人に対して、頭に槍を振りおろし、大けがを負わせる。そして「降参しなければ首をはねる」と詰め寄っている。また、前篇第19章では、白装束の聖職者アロンソ・ロペスに対して槍を構え襲いかかり、彼の片腕を折っている。さらに、前篇第24章では、マダシマ王妃が不義を働いたか否かで口論になり、カルデニオに襲いかかっている。

正常な人間であれば、他者に四度も槍を振りかざせばどうなるか分かっているであろうし、また、キリスト教徒にもかかわらず修道僧に襲いかかるなど正気沙汰とは思えない。前篇第3章の馬方は、ドン・キホーテには“*atrevido caballero*”「無謀な騎士」<sup>60</sup>、また前篇第8章の修道僧は、“*gente endiablada y descomunal*”「神の遣いなどではなく、悪魔に憑かれた異形の化け物」<sup>61</sup>、アロンソ・ロペスは“*caballeros*”「騎士」<sup>62</sup>、カルデニオも“*caballero*”「騎士」<sup>63</sup>として映っていたので、剣を抜くことにも騎士道の観点からは問題はないかもしれない。しかし、前篇第8・9章で登場したビスカヤ人は、“*Si fueras caballero... cautiva criatura*”「騎士ではなく下郎」<sup>64</sup>とドン・キホーテが呼んでいたことから、ドン・キホーテの目にも騎士として映っていたわけではないのだから、ここで剣を抜くこと自体はおかしいのではないだろうか<sup>65</sup>。

次に、ドン・キホーテが人を殺しそうになる場面に目を転じてみよう。全三回のうち二回の被害者はサンチョ・パンサである。まず、前篇第20章において、ドン・キホーテは、自らが愚弄されたと知り、サンチョの頭上に槍を二度振りおろす。以下に原文を引くことにする。“*si como los recibió en las espaldas los recibiera en la cabeza, quedara libre de pagarle el salario, si*

no fuera a sus herederos”「サンチョが背中でそれをうけていなければ、給金を払う手間ははぶけていたであろう。」<sup>66</sup>

同様に、前篇第30章では、思い姫ドゥルシネア姫を愚弄したサンチョに、槍を二度打ちおろし、地面に倒している。“si no fuera porque Dorotea le dio voces que no le diera más, sin duda le quitara allí la vida.”「ドロテアがおやめくださいと声をかけなかったとしたら、間違いなくその場で従士の命を奪っていたことであろう。」<sup>67</sup>つまり、サンチョは二度、ドン・キホーテを「愚弄した」罪により、主人の逆鱗に触れ、死んでいた「かもしれない」場面に遭遇している。

最後に、前篇第45章で、ドン・キホーテは争っていた捕吏の喉元を両手で締め上げる。“que a no ser socorrido de sus compañeros, allí dejara la vida antes que don Quijote le presa.”「仲間が助けなかったとしたら、その捕吏は自らの命を手ばなしていたであろう。」<sup>68</sup>これらはすべて、非現実条件文で表されており、その分臨場感が増している。

つまり、たしかにドン・キホーテは人を殺してはおらず、それゆえに『ドン・キホーテ』は悲劇性を帯びることなく、狂気も乾いたものになっている。しかしながら、その内実一つ一つを見ていけば、ドン・キホーテはプライドが高いがために、すぐに激昂し、剣を抜き、相手に襲いかかっていることが分かる。

ドン・キホーテの狂気は、ほかの冒険的なエピソードからも、読み取れる。

たとえば、前篇第8章で、風車を腕の長い巨人とみなし、ロシナンテに乗って猛突進する。その結果、風車に激突した瞬間、風により翼が回転し、槍は折れ、ドン・キホーテとロシナンテは反対側に放り出され、野原を転がりしたたかに地面にたたきつけられる。もしドン・キホーテが佯狂だとすれば、自分が巨人などではなく風車に突進していると分かっていたであろうし、馬に跨っていれば、大けがを負うことくらいは予期できたはずだ。

また、前篇第17章では、ドン・キホーテはみずからが調合したフィエラブラスの霊薬を、飲み、嘔吐し、そのため三時間寝込んでしまう。けれども、その様子を見ていたサンチョが飲みたいとせがむので、渡す。もし正気の間であれば、そんなことをするだろうか。もしドン・キホーテが狂った「ふり」をしているのであれば、ドン・キホーテはどんな心境でサンチョに霊薬を飲ませたのであろうか。

さらに、前篇第18章においては、羊の大群を騎士や巨人の軍勢と思い、猛

進していく。羊飼いたちは、石投げ器でドン・キホーテを迎え撃つ。すると、ドン・キホーテの骨は折れて、前歯や奥歯は欠け、手の指は叩きおられてしまう。

役者と言えども、舞台上「本当に」怪我をすることは許されない。ドン・キホーテが狂気を有していないのであれば、こんな事態を招くことはなかったであろう。

同様に、前篇第21章では、頭に金だらいをのせた床屋を、マンブリーノの兜をつけた騎士と思い、その金だらいの奪取にかかる。つづく前篇第22章では、ガレー船に連れて行かれる囚人の縛めを解いている。また、前篇第25章・26章では騎士道物語の主人公を真似て苦行をすすんでおこなうし、前篇第35章では、目をつぶったまま（寝ているにもかかわらず）、大声でどなりながら、刀でぶどうの皮袋に切りつける。

ここに挙げた振るまいには、狂気が潜んでいると言わざるを得ない。次の章では、さらに詳しく佯狂説の脆弱さを明らかにしてみたい。

### 佯狂説の脆弱さ

佯狂説の脆弱さは、三つに分類される。すなわち①佯狂説を唱えている研究者が、ドン・キホーテの狂気に関して、定見を有していない場合、②佯狂説支持者がドン・キホーテの狂態について何の言及もしていない場合（しかし実際には、ドン・キホーテは多くの狂態をおかしている）。③ドン・キホーテが、同じような場景下でも異なる行動をとっている場合である。

まず、佯狂説支持の立場に立つ研究者たちが、ドン・キホーテの狂気についてどう考えていたのかを見ていこう。牛島信明は、佯狂説を唱えているが、『ドン・キホーテの旅一神に抗う遍歴の騎士』の中で、次のように述べている。

（『ドン・キホーテ』は）騎士道物語を読みすぎて頭のおかしくなった田舎紳士がみずからをドン・キホーテと名取る遍歴の騎士となし、世の不正を正すために旅に出発してから、最終章で狂気から覚め、善人アロンソ・キハーノに戻って死ぬまでの、間断なき下降（あるいは上昇）である。<sup>69</sup>

ドン・キホーテの狂気は、サンチョを媒介とする現実との接触によって少し

ずつ吸いとられてゆく。<sup>70</sup>

(ドン・キホーテは《銀月の騎士》に敗北したことを)魔法使いのせいせず、ここで初めて自分の弱さのせいにするのである。〈魔法〉に頼ることをやめたドン・キホーテ、換言すれば、騎士道物語の枠組から外れたドン・キホーテはもはや狂気から覚め、善人アロンソ・キハーノに戻って死ぬしか道は残されていない。<sup>71</sup>

上記の文章からは、たしかにドン・キホーテが狂気を秘めていることを肯定しているように感じ取られる。しかし、牛島信明は、これまで見てきたように、ドン・キホーテ佯狂説を擁護している。それなら、ドン・キホーテは、「計画された」狂気(実際には、狂気と呼べないかもしれない)に駆られていなければならないのに、その狂気が弱まったり吸いとられたりするというのは理屈があわないように思われる。

二つ目は、ドン・キホーテ佯狂説を掲げる研究者たちは、正気の部分を列挙するだけにとどまり、狂態を説明しようとししない点である。たとえば、なぜドン・キホーテが風車に突進したのか、なぜドン・キホーテは人を殺しそうになったのかなどについてははっきり言及していないのである。

ドン・キホーテが佯狂だとすれば、第三者の目を気にしながら、正気の状態ですべて役を演じ続けていることになる。ドン・キホーテが後篇第12章で述べて居るように、役者は、劇がおこなわれているあいだだけ、その役を演じているので、劇が終わってしまえば、各々現実に戻らなくてはならない。そのため、舞台の上で実際に怪我を負ったり、他者を傷つけたり、ましてや他者を殺めたりすることはありえない。

最後に、ドン・キホーテは、同じような状況の下でも、異なる行動をとっていることがある。これは、先に見た縮絨機の冒険と、今から見る城主の違いである。前篇第20章でおこなわれた縮絨機の冒険では、ドン・キホーテは不気味な音の正体が縮絨機だと分かったあとでは、縮絨機を縮絨機として見ている。しかし、宿の主人はドン・キホーテにとっては、冒険のあとでも、宿の主人であり続けるのである。ドン・キホーテの態度をもう少し詳しく見ていくことにしよう。

前篇第15章で大けがを負ったドン・キホーテとサンチョ・パンサは、ひどい体たらくで、一軒の旅籠に到着する。しかし、ドン・キホーテにとっては、旅籠は城に見える。つづく第16章では、ドン・キホーテは“castillo”「城」に招待されて嬉しいと述べているし、そこで働く女中マリトルネスを、城に住む、若く美しい姫だと思い込んでいる。

そして、前篇第16から17章にかけて起こった騒動をすべて魔法使いのせいにし、旅籠が“castillo”「城」だと言い張るが、翌日、勘定を求める亭主に、こう答えている<sup>72</sup>。

…Engañado he vivido hasta aquí, que en verdad que pensé que era castillo, y no malo; pero pues es así que no es castillo. sino venta, …

どうやら、拙者は今まで思い違いをしていたようじゃ。実を言えば、拙者はこれを城とばかり、それもなかなか立派な城とばかり思い込んでおったのだが、そうではなくて旅宿であるとすれば、(…)

このように、城ではなく旅籠、城主ではなく旅籠の亭主であることを認めた上で、ドン・キホーテは宿代を払うことを、拒否している。このとき、縮絨機の冒険と同様に、ドン・キホーテの頭の中では、魔法使いが起こす冒険という可能性がなくなり、「旅籠＝城」という図式が成り立たなくなる。したがって、そこに住む姫や奥方の存在も消えてなくなる。しかし、そうした現実も、サンチョの毛布あげのあとすぐに揺らぎ始める。前篇第18章において、毛布あげにされ、息も絶え絶えなサンチョに対して、ドン・キホーテは次のように述べる<sup>73</sup>。

Ahora acabo de creer, Sancho bueno, que aquel castillo o venta es encantado, sin duda;

善良なるサンチョよ、あの城だか旅宿だかが魔法にかかっていることは、やはり間違いないと、わしはやっと確信したぞ。

このように、断定を避け若干の疑いを残しつつも、ドン・キホーテは、旅籠が城だと再び確信していることが分かるだろう。そして後の章で断言するに至る。

前篇第3章で、ドン・キホーテ主従は、司祭や床屋とともに、もう一度同じ旅籠に宿泊することになる。さらに前篇第4章では、ドン・キホーテは宿の娘と女中のマリトルネスにからかわれ、草置き場の戸にはりつけにされてしまう。そのとき、宿の娘を“*la doncella hermosa, hija de la señora de aquel castillo*”「姫」<sup>74</sup>と、マリトルネスを姫につかえる侍女と思い、旅籠は“*castillo*”「城」<sup>75</sup>、自分がはりつけにされたのは“*aquel moro encantado*”「悪い魔法使いのせい」<sup>76</sup>だと考えている。前篇第5章での騒動のあとでさえ、“*la bacía por yelmo y la venta por castillo en la imaginación de don Quijote*”「ドン・キホーテの想像力のなかには、あいかわらず金だらいは兜で、旅籠は城でありつづけ」<sup>77</sup>ていた。

このように、同じ条件下でありながら、縮絨機はいったん縮絨機と見なされれば、縮絨機以外にはなりえなかったが、旅籠は、ドン・キホーテにとっては当初城と映り、一度は旅籠と結論づけられたが、すぐにその概念は揺らぐ。しかし、結局は城として落ち着き、それ以降、ふたたび旅籠として見なされることはなかった。

さらに、初めはドン・キホーテにとって、マリトルネスが城の姫であったが、前篇第4章になると、宿の娘が城の姫になり、マリトルネスは姫の侍女になり下がる。このようにドン・キホーテは、同じ人物についての判断がころころ変わることが分かる。

つまり、ドン・キホーテには一貫性がないのである。もしドン・キホーテが第三者の目を気にしながら役者を演じているのであれば、その行動や思考にも一貫性があるべきではないだろうか。しかしながら、ドン・キホーテは、再認識しないというルールを設けているにもかかわらず、また別のときには再認識を許しており、明確な立場をとっているわけではない。冒険だと思っていたものをありのままに捉えきることになれば、何度も見方を変えて冒険の到来に仕立てる。とても計画された狂気＝佯狂だとは考えにくい。この点からも、ドン・キホーテ役者説、つまりドン・キホーテ佯狂説には少し無理があるのではないかという結論が導き出すことができよう。

### ドン・キホーテの狂気

「狂っている」とは、「まわりの者の眼を気にせずに、ふるまうこと、さらに責任能力がない(警吏に捕まったとしても、その精神性から罪に問われない)と思われること」として定義するならば、ドン・キホーテは狂っていると言える。

「狂っていない、完全に正気の人間だ」とする伴狂説支持の研究者の意見だと、なぜドン・キホーテは躊躇なく風車に突っ込んでいったのか、なぜ彼の行動に一貫性がないのかについて説明がつかない。

また、原文を照らし合わせてみれば、ドン・キホーテの騎士道精神が触発され、自身が騎士道物語の主人公であると錯覚するときにつねに正気を失う、と断言するのはおかしい。水車の冒険と縮絨機の冒険では、同様に騎士道物語の世界にいるとは言え、結果がまったく異なるからである。

ただ、この水車の冒険と縮絨機の冒険の結末が異なるのは、ドン・キホーテの狂気が「変化」していったからである。つまり、ドン・キホーテの狂気は段々と弱められていく。

以上をまとめれば、ドン・キホーテの狂気は伴狂ではなく、本当の狂気であり、その狂気は普段は隠れており、ドン・キホーテを有徳の知識人のように思わせる。しかしながら、ドン・キホーテは、その狂気が何らかの理由で弱まっていくまでは、騎士道物語やドゥルシネア姫のことに話が及ぶと正気を失うため、「狂気と正気の混じり合った狂人」と呼ぶほかないのである。

## 3. セルバンテスの意図

### ドン・キホーテという「狂人」

セルバンテスはなぜ、このような「狂人」を創り出したのだろうか。三点の意図がこめられているように見える。つまり、①ドン・キホーテが完全な狂人でないことから生まれる悲喜劇性、②ドン・キホーテが正気の部分を残しているがゆえにわれわれ読者に共感が生まれること、そして、③その正気とも狂気ともつかぬ人物がかもしだす笑いにほかならない。

完全な狂人は悲劇しかもたらさない。それは、すでに『リア王』を取りあげたとき指摘したとおりである。また、ドン・キホーテが完全な狂人であったとしたら、われわれは彼にほとんど共感しないだろう。しかし、作中人物と同様、

われわれもドン・キホーテの狂気に憐れみを感じる。そして、冷たい無機質の狂気ではなく、いわば温かみのある狂気であると感じる。さらに、正気な部分を残した人物が「まじめに」ふざけたことをしていることによる笑いの効果もある。これはのちにくわしく見ていくが、ドン・キホーテの行動そのものが主として読者に笑いをもたらしているわけではない。

まず①の悲喜劇性から見ていくことにしよう。

### ① ドン・キホーテが完全な狂人でないことから生まれる悲喜劇性

ドン・キホーテに悲劇性のない狂気を持たせることで、作品が喜劇性を帯びる。完全なる狂人の出てくる喜劇などあり得ない。セルバンテスは、作品に喜劇性を持たせたかったという可能性がある。つまり、狂人を主人公に据えた悲劇と、その狂人の振るまいによって笑いをもたらす喜劇を融合させ、『ドン・キホーテ』を悲喜劇にしようと考えていたのではないか。喜劇とは、その名のとおり、楽しい笑いを誘う劇で、主人公は庶民、最後は大団円で締めくくられる。対して、悲劇とは、哀しい劇で、主人公は高貴な身分のものであり、概して何らかの障害を抱えている。最終的には、身を滅ぼし、国を追われたり地位を追われたりするか、または、主人公みずからの死によって幕を閉じる。黄金世紀文学には、悲喜劇と分類される作品が数多く見られる。

たとえば、ロペ・デ・ベガの作品『オルメドの騎士』<sup>78</sup>は悲喜劇である。しかし、『ドン・キホーテ』と『オルメドの騎士』には大きな違いがある。それ両者とも、主人公の死によって終わるが、ドン・キホーテは誰かの陰謀で死ぬわけでない。また、何より、『オルメドの騎士』は、身分の高い騎士が主人公であるのに対し、ドン・キホーテ（またはアロンソ・キハーノ）はしががない郷士で、決して身分は高くないということだ。この場合身分の程度は、世界（世間）に影響を及ぼすかどうかで決まる。ドン・キホーテはたしかに最下級とはいえ貴族（郷士）である。しかし、ドン・キホーテが狂っても、その狂気はせいぜい姪と家政婦にしか影響しない。しかし、オルメドの騎士は違う。彼の一挙手一投足は、広範囲の人々に影響を及ぼす。

さらに、『オルメドの騎士』の喜劇性は前半部に集中しており、後半になれば、喜劇性はまったく見当たらない。前半部が喜劇、後半部が悲劇のため、悲喜劇というジャンルに分類されているのだろう。これに対して、ドン・キホーテは、前半部・後半部どちらも喜劇の割合が圧倒している。そして、最終章でドン・キホーテは死を迎えるのだが、ドン・キホーテ（アロンソ・キハーノ）



自身、告解をおこなって何も後悔がない状態で死を迎えるのだ。結末が主人公の死によって締めくくられはするものの、『オルメドの騎士』ほどの悲劇性はつきまとわないことが分かる。オクタビオ・パスは、著書『弓と豎琴』の中で、『ドン・キホーテ』の悲喜劇性が、アイロニーとユーモアの融合であると述べている<sup>79</sup>。

悲劇的葛藤にユーモアを加えれば、小説にはもはや悲劇性がなくなる。セルバンテスは、ユーモアを加えるためにドン・キホーテを「半分頭のおかしい人物」にした。もし、ドン・キホーテが完全なる狂人ならどうだろうか。そこにはユーモアも何もない。ここで重要なのは、ドン・キホーテみずからの言動からもわれわれはその喜劇性がうかがえるかもしれないが、周りのものたちの反応にも見出せるという点だ。周囲の人物たちはドン・キホーテ主従を愚弄してやろうとつねに画策している。

パスの指摘するように、『ドン・キホーテ』はもはや悲劇ではありえない。それでは、読者は、ドン・キホーテの言動に、何を感じ取ることができるのだろうか。他人事であるとして対岸の火事のように眺めているのだろうか。次は読者から見てドン・キホーテがどんな人間に映るのか見てみよう。

## ②われわれ読者に共感が生まれること

セルバンテスが、まったくの狂人とは言えない登場人物を創り出したのは、読者が共感できる余地を残すためではないだろうか。

本当の狂人には悲劇性がつきまとう。たとえば、モーツァルトは、つねに被害妄想に苦しめられるという狂気に駆られた人生を送ったため、彼は悲惨な日々を送らねばならなかった<sup>80</sup>。

しかし、ドン・キホーテは被害妄想だけではなかった。ドン・キホーテは、たしかに羊の群れを軍勢だと「妄想」し、幻覚をおこしたが、その軍勢はドン・キホーテが何ら関与するものではない。いわば、敵・味方に分かれた軍勢が、「勝手に」戦争を始めようとするところに、ドン・キホーテが加勢しに行こうとしている。ドン・キホーテにはその悲劇性がつきまどっていない。なぜなら狂気ははじめじめとした陰気なものではなく、周りに笑いをもたらすような、陽気なものだからである。

高橋康也によれば、ハムレットの場合、「道化性そのものも佯狂というモチ

ーフと絡みあって、不安定で曖昧な複雑さを孕」<sup>81</sup>んでいるのに対し、ドン・キホーテにはそのようなものが感じられないという。ドン・キホーテには不安定さはまったくない。その根拠として、①ドン・キホーテが国王ではなく、②はじめから狂っていることを挙げている。リア王は国王なので、世界の中心におり、その「愚行と生死は共同体の秩序にもろに影響を与えずにおかない」が、ドン・キホーテは国王（領主）ではなく、単なる田舎の貧乏郷土であり、その意味において「いつどこで死のうと、世界の成行きにはまったく関係ない」のである。また、ドン・キホーテは、（佯狂のハムレットは別にして）リア王が途中から狂ってしまったのとは異なり、始めから狂っている<sup>82</sup>。リア王は「世界について思いがけぬ認識を得た（正しくは強要された）その衝撃によって」狂うのであり、「その認識には深い真実が含まれているがゆえに、衝撃の結果たる発狂は悲劇的な問題性を帯びている」<sup>83</sup>。けれども、ドン・キホーテにはその悲劇性は微塵も感じられない。さらに言えば、アウエルバッハの言うように、ドン・キホーテの狂気はまさしく「非問題的」であるにちがいない<sup>84</sup>。

### ③正気とも狂気ともつかぬ人物がかもしだす笑い

セルバンテスは、ところどころドン・キホーテにまともな考え方や、まっ当な態度をとらせることにより、読者の笑いを誘いだしている。わたしたちは、本物の狂人に対しては共感できる部分はほとんどないが、ドン・キホーテのような狂気と正気の入り混じった人物に対しては、親近感を覚えて感情移入することができる。

たとえば、前篇第44章でドン・キホーテは、フェルナンド<sup>85</sup>たちと旅籠にいるときに、旅籠の主人と客とのあいだに起こった騒動を、騎士同士の決闘とは見なさず、平民同士のけんかなので加勢できない、とおかみさんに言う。そのとき、おかみさんと娘が髪の色をかきむしって悔しがる場面がそれにあたる。以下は、ドン・キホーテの台詞である<sup>86</sup>。

Deténgome porque no me es lícito poner mano a la espada contra gente escuderil;

拙者が手をこまねいているのはほかでもない、騎士たる拙者には、従士ふぜいを相手に剣を抜くことが掟によって禁じられておるからでござる。

加勢することにより、ドン・キホーテの狂気は一層高まるのだろうが、そうはせずに、サンチョ・パンサを呼ぶようにと二人に助言する。この箇所、読者は肩透かしを食らったような気持ちになる。その後の二人の女が地団太を踏む場面とともに笑いを誘うこと請け合いである。ドン・キホーテは、身のまわりでひと騒動が起きれば、すぐ冒険の機会到来とふるい立つものだが、ここで読者はみごとにはぐらかされるのである。

《銀月の騎士》<sup>87</sup>も、ドン・キホーテを馬鹿にして、彼を村に返そうと考えていたときよりも、彼に敗れ、どうにかしてひと泡吹かせてやろうと企む後半でこそ、読者の笑いを誘う。

以上のように、セルバンテスが『ドン・キホーテ』を創り出した意図を分析することができる。

#### 4. ドン・キホーテという人物

以上、見てきたように、ドン・キホーテは一筋縄ではいかない人物である。ドン・キホーテは、時代遅れの概念である騎士道精神にのめりこみ、遍歴の騎士になろうと決心した。ドン・キホーテは、身なりや思想、言葉遣いも中世の騎士たちに倣っている。「騎士道物語世界」を真似て、みずからの思い姫を創り出し、ドゥルシネーアと名づけ、駄馬にはロシナンテと名付け、曾祖父伝来の甲冑の埃を払い、それで身を固める。また、機会あるごとに、騎士道精神を論じ、あるべき理想の社会を説く。言葉遣いは、たとえば、*hermosa*、*desdichado*ではなく、*fermosa*、*cautivo* というアルカイズム的なものを好んだ。このように、時代錯誤的ドン・キホーテの姿は周りの者からは嘲笑の対象になり、前篇では床屋やカルデニオたちが、後篇では公爵夫妻がドン・キホーテのをさんざん愚弄するのである。

このドン・キホーテの狂気は、近年になり、佯狂ではないかと疑う研究者が出てきた。ドン・キホーテ役者説とも言われる説で、研究者たちは、ドン・キホーテがつねに第三者の目を気にしていると主張している。

たしかに、ドン・キホーテはカルデニオとは違い、その狂態を覚えていたし、前篇第20章でも、不気味な音の正体が縮絨機だと分かれば、それ以上巨人の

襲来だ、などとは言わなかった。これらはたしかにドン・キホーテの正気の部分だと言えよう。

しかし、ドン・キホーテが完全に正気だとは言えない。ドン・キホーテは、躊躇なく風車や羊の大群をめがけて攻撃をおこなっているのだ。もし彼が正気だとすれば、どんな結果が待っているか想像がつくはずだ。

つまり、ドン・キホーテは正気の人物は言い切れないので、「正気と狂気の混じり合った」人物と見なされるのである。

最後に、セルバンテスが、なぜドン・キホーテという「正気と狂気の混じり合った狂人」を創り出したのかを見た。ドン・キホーテのような狂人は、リア王とは異なり、あまり悲劇性を帯びておらず、その狂気も乾いており、あっけらかんとしている。むしろ喜劇性を備えており、だからこそ、当時、大衆に人気があった。また、正気の部分を残すことによって、読者もドン・キホーテに感情移入しやすくなる。また、そんな人物が、真剣にほかの登場人物たちと対話することによって、読者はさらに嘲笑の対象を拡げることができる。嘲笑されるべき対象、ドン・キホーテが、その「完全ではない狂気」で、登場人物たちを翻弄し、結果的に彼らも嘲笑の対象にしてしまうのである。

以上より、ドン・キホーテが、単なる狂人ではないことが分かった。では、次章で、ドン・キホーテの片腕とも言うべき従士、サンチョ・パンサについて見ていこう。

---

<sup>3</sup>序章に “todo él es una invectiva contra los libros de caballerías” 「君（セルバンテス）の本は徹頭徹尾、これまでの騎士道物語に対する攻撃である」（スペイン語版 p18、日本語版 p9 上段）、“llevad la mira puesta a derribar la máquina mal fundada destes caballerescos libros, aborrecidos de tantos y alabados de muchos más” 「君（セルバンテス）のこの書物のねらいは、騎士道物語が世間と大衆のあいだで享受している権勢と名声を打倒すること以外にない」（スペイン語版 p19、日本語版 p9 下段）とあるように、当初セルバンテスは騎士道物語を批判するために『ドン・キホーテ』を執筆していたことが分かる。

<sup>4</sup>後篇第2章。スペイン語版 p577、日本語版 p23

<sup>5</sup>後篇第18章。スペイン語版 p690 日本語版 p141 下段

<sup>6</sup>同上。

---

<sup>7</sup>Salvador de Madariaga, *Guía del lector del “Quijote”*, 原文 pp121-122、サルバドール・デ・マダリアーガ『ドン・キホーテの心理学』日本語版 pp191-192。

<sup>8</sup>前篇第 2 4 章。スペイン語版 p249、日本語版 p238 上段

<sup>9</sup>前篇第 2 4 章。同上。以下がドン・キホーテの台詞全文である。Eso no, ¡voto a tal! y ésa es una muy gran malicia, o bellaquería, por mejor decir: la reina Madásima fue muy principal señora, y no se ha de presumir que tan alta princesa se había de amancebar con un sacapotras; y quien lo contrario entendiere, miente como muy gran bellaco. Y yo se lo daré a entender, a pie o a caballo, armado o desarmado, de noche o de día, o como más gusto le diere. 「いや、それは違いますぞ、神に誓って！それは大変な邪推、いや、より適切に言えば悪意に満ちた中傷じゃ。王妃のマダシマ殿は実に立派な婦人でござって、かくもやんごとなき方が一介の藪医者ふぜいと情交を結ぶなど、想像することさえできぬわ。それを違うと言ひ張る奴は、平気で嘘をつく大悪党よ。そんな奴には拙者がこの腕で思い知らせてやるから、徒歩でなり馬に乗ってでなり、武装してあるいは丸腰で、夜中だろうとまっ昼間だろうと、いつでも好きなやり方がかかってくるがよいわ。」

<sup>10</sup>前篇第 2 4 章。同上。

<sup>11</sup>前篇第 4 9 章。スペイン語版 p516-517、日本語版 pp534 下段—535 上段

<sup>12</sup>前篇第 3 8 章。スペイン語版 pp413-414、日本語版 p429

<sup>13</sup> *The tragedy of Hamlet*, William Shakespeare, p61

<sup>14</sup>囚人たちの中にヒネス・デ・パサモンテがいる。ヒネス・デ・パサモンテは単なるフィクションの人物ではなく、実際にセルバンテスと面識があったアラゴン人、ヘロニモ・デ・パサモンテがモデルである。ヘロニモ・デ・パサモンテは、カラタユッド (Calatayud) で 1553 年に生まれ、数々の戦争に参加、1574 年から 1592 年まで捕虜となり実際にガレー船での労働を強いられており、自由の身になったときに、自叙伝 “*La vida y trabajos de Gerónimo de Pasamonte*” を執筆した。ヒネス・デ・パサモンテは後篇でペドロ親方として再び主従の前に姿を現わす。

<sup>15</sup>『ドン・キホーテの心理学』原文 p119、訳文 pp187-188

<sup>16</sup>同上。

<sup>17</sup>木村栄一『スペインの鱒釣り』p58

<sup>18</sup>前篇第 1 章。スペイン語版 p37、日本語版 p20

<sup>19</sup>Julio Cejador “*Lengua de Cervantes*” p556。拙訳による。

<sup>20</sup>ただし最近の研究では、絶対最上級の使用はラペサの指摘より以前に遡る可能性があると言われている。たとえば Real Academia Española の電子コーパス Corpus Diacrónico del Español (CORDE) で検索すると、15 世紀前用例がたやすく見つかる。

<sup>21</sup>ラファエル・ラペサ『スペイン語の歴史』和訳は中岡省治による。スペイン語版は Rafael Lapesa, *Historia de la lengua española*, p335

<sup>22</sup>これらすべては後篇第 3 8 章。スペイン語版 p841、日本語版 p313 上段

<sup>23</sup>同様に、ミコミコーナ姫を演じたドロテーアの台詞も意識的に騎士道物語で使われるような言葉づかいになっている。これらはミコミコーナ姫としてドン・キホーテに嘆願する前篇第 2 9 章、3 0 章に顕著である。たとえば、*fasta, hermosa, en pro, lueñes* などを用いている。

<sup>24</sup>Julio Cejador “*Lengua de Cervantes*”, p150。拙訳による。

---

<sup>25</sup>ラファエル・ラペサ『スペイン語の歴史』 p201。

また、おなじように、多くの研究者が、12-13世紀に起こった e の消失または維持についてのその時代の揺れについて言及している。d, t, l の後に e がついたりつかなかったりといった語には、たとえば、tod, sacerdot, val, volundade, veze など。これらは、*Estudios de historias de la lengua española*, Real Academia Alfonso X el sabio, Pilar Díez de Revenga Torres, 2008, Murcia, にくわしい。(ただし、13世紀、アルフォンソ 10 世のもとで「正しいカステイリア語」が目指されたときに限り、r と t の後にくる e を除くと言った、外国風の e の脱落を認めようとしなかったが、王の死後、また e の脱落化が進行した。

<sup>26</sup>Julio Cejador “*Lengua de Cervantes*”, p194。和訳は拙訳による。

<sup>27</sup>後篇第 6 4 章、スペイン語版 p1041、日本語版 p543 下段

<sup>28</sup>プラトン『パイドロス』 p188 (249D)

<sup>29</sup>パスカル『パンセ』 p159(414)

<sup>30</sup>ミシェル・フーコー『思考集成・狂気』 p207

<sup>31</sup>『キケロ選集』第 1 2 巻。「トゥスクルムの別荘での対話」

<sup>32</sup>以下の説は小田晋『狂気の構造』に詳しい。

<sup>33</sup>Miguel de Cervantes Saavedra, “*El licenciado vidriera y otras novelas ejemplares*”

<sup>34</sup>前篇第 5 2 章。スペイン語版 p535 日本語訳 p558 上段

<sup>35</sup>同様に、サンチョ・パンサは、ぐだぐだと文句を言う女房に対しても “*Ahora digo que tienes algún familiar en ese cuerpo.*” 「お前の体にはなにか悪魔がとりついているに違いねえ。」(後篇第 5 章。スペイン語版 p597、日本語版 p44 上段) と答えているところからも、狂気＝悪魔の図式がうかがえる。

スイス生まれのプラター(1536-1614)は、精神病を精神薄弱、せん妄および混迷、メランコリー(黒い＝メラノス、胆汁＝コロス)、悪魔憑きの四種類に分類する論を展開した。彼は精神疾病学の祖と讃えられていたことから、当時オカルト的な考えから脱却していると言えないことが分かるだろう。また、学のないものほど、悪魔憑きを信じていたことは言うまでもない。

<sup>36</sup>ミシェル・フーコー『精神疾患とパーソナリティ』 p127

<sup>37</sup>小俣和一郎『精神医学の歴史』

<sup>38</sup>精神分裂病者は、幻覚のほかにも、幻聴を聞くと霜山徳爾は述べる。霜山によれば、精神分裂病は、絶えず「見られている」という被害妄想に苛まれているのだと言う。「精神分裂病者は、しばしばほかの人は知っているのに何かが自分に隠されている、という感じをもち、こちらからは判らない不気味な、正体不明のまなざしが自分にむけられている、と思い込み、ひどく被害的になったりする。(中略) 分裂病者の幻聴も、よくたずねてみると聴覚性が次第に怪しくなり、実は見られているという体験に近くなっていることが少なくない。」

(霜山徳爾『天才と狂気』 p142)

<sup>39</sup>木村榮一『スペインの鱒釣り』 p58

<sup>40</sup>片倉充造『ドン・キホーテ批評論』 p80

---

<sup>41</sup>同上。pp91-92

<sup>42</sup>*Guía del lector del “Quijote”*p103、また日本語版『ドン・キホーテの心理学』pp170-171

<sup>43</sup>牛島信明『ドン・キホーテの旅—神に抗う遍歴の騎士』p102

<sup>44</sup>前篇第5章。スペイン語版 pp66-67、日本語版 p50 上段

<sup>45</sup>前篇第25章。スペイン語版 p256 日本語版 p246 上段

<sup>46</sup>牛島信明『ドン・キホーテの旅—神に抗う遍歴の騎士』p102

<sup>47</sup>前篇第15章。スペイン語版 p151、日本語版 p128 上段

<sup>48</sup>これらすべては後篇第74章。一つ目の台詞はスペイン語版 p1093、日本語版 p602、二つ目と三つ目の台詞はスペイン語版 p1095、日本語版 p604。また、下線部はすべて筆者による。

<sup>49</sup>前篇第27章。スペイン語版 p282、日本語版 p272 上段

<sup>50</sup>前篇第27章。スペイン語版 p282、日本語版 p272 上段

<sup>51</sup>また、司祭と床屋に、カルデニオは自分がいかに恥知らずなことをしているのかについて、以下のように述べている。

Otras veces me dicen ellos, cuando me encuentran con juicio, que yo salgo a los caminos, y que se lo quito por fuerza, aunque me lo den de grado, a los pastores que vienen con ello del lugar a las majadas.P283

「わたしは時として、村から自分たちの部落に食糧を運ぶ途中の羊飼いたちを襲い、彼らが喜んで与えようというのにもかかわらず、力づくで奪い取るのだそうです。」

<sup>52</sup>小田晋『狂気の構造』p60

<sup>53</sup>前篇第20章。スペイン語版 p202、日本語版 p182 下段

<sup>54</sup>前篇第16章。スペイン語版 pp159-160、日本語版 pp136 下段—137 上段

<sup>55</sup>味覚の異常には錯味（にんじんなのになすびの味がする）・鈍麻（本来の味よりも薄く感じられる）などがある。また、聴覚の異常には難聴・耳鳴りが挙げられるが、ドン・キホーテは前後篇通してもこの味覚・聴覚の異常が見られないのは興味深い。

<sup>56</sup>後篇第10章。スペイン語版 p629、日本語版 p75 下段

<sup>57</sup>後篇第10章。スペイン語版 p632、日本語版 p79 上段

<sup>58</sup>同上。

<sup>59</sup>後篇第14章で、ドン・キホーテは鏡の騎士に勝利し、その命を奪わんとする場面がある。しかしそれは、ドン・キホーテの激昂など騎士に理由があるわけではなく、サンチョ・パンサの助言により剣を抜いていることから、この章の例証として相応しくないと思われるので、この論文では問題にしない。

<sup>60</sup>前篇第3章。スペイン語版 p52、日本語版 p33 下段

<sup>61</sup>前篇第8章。スペイン語版、p93 日本語版 p75 下段

<sup>62</sup>前篇第19章。スペイン語版 pp186、日本語版 p165 下段

<sup>63</sup>前篇第24章。スペイン語版 p242、日本語版 p231 下段

<sup>64</sup>前篇第8章。スペイン語版 p96、日本語版 pp77 上段

---

<sup>65</sup>前篇第44章で、宿の亭主の加勢をしてくれと懇願する女将とその娘に対して、“*Deténgome porque no me es lícito poner mano a la espada contra gente escuderial;*”「拙者が手をこまねいているのはほかでもない、騎士たる拙者には、従士ふぜいを相手に剣を抜くことが掟によって禁じられておるからでござる」と、相手が騎士でないことを理由に加勢を断り、従士であるサンチョを呼ぶように言う。(スペイン語版 p475、日本語版 p491 下段) ここからも、ドン・キホーテの行動に一貫性がないことが分かるだろう。

<sup>66</sup>前篇第20章。スペイン語版 p203、日本語版 p184 上段。下線部は筆者。

<sup>67</sup>前篇第30章。スペイン語版 p325、日本語版 p324 下段。下線部は筆者。

<sup>68</sup>前篇第45章。スペイン語版 p485、日本語版 p501 下段。下線部は筆者。

<sup>69</sup>牛島信明『ドン・キホーテの旅—神に抗う遍歴の騎士』p151。下線部は筆者。

<sup>70</sup>同上。p156。下線部は筆者。

<sup>71</sup>同上。p187。下線部は筆者。

<sup>72</sup>前篇第17章。スペイン語版 p169、日本語版 p148 上段

<sup>73</sup>前篇第18章。スペイン語版 p172、日本語版 p152 上段

<sup>74</sup>前篇第43章。スペイン語版 p467、日本語版 p481 上段

<sup>75</sup>前篇第43章。スペイン語版 p469、日本語版 p484 下段

<sup>76</sup>前篇第43章。スペイン語版 p467、日本語版 p483 上段

<sup>77</sup>前篇第45章。スペイン語版 p483、日本語版 p500 上段

<sup>78</sup>Lope de Vega, *El caballero de Olmedo*, 『オルメドの騎士』長南実訳

<sup>79</sup>Octavio Paz 『弓と豎琴』p359 *El arco y la lira*, p227

La desarmonía entre Don Quijote y sumundo no se resuelve, como en la épica tradicional, por el triunfo de uno de los principios sino por su fusión. Esa fusión es el humor, la ironía. La ironía y el humor son la gran invención del espíritu moderno. Son el equivalente del conflicto trágico y por eso nuestras grandes novelas resisten la cercanía del teatro griego. La fusión de la ironía es una síntesis provisional, que impide todo desenlace efectivo. El conflicto novelístico no puede dar nacimiento a un arte trágico.

ドン・キホーテとその世界との不調和は、伝統的な叙事詩におけるように、一方の原則の勝利によってではなく、双方の融合によって解消されるのである。その融合がユーモアであり、アイロニーである。アイロニーとユーモアこそ近代精神の偉大なる発明である。それらは悲劇的葛藤にとって代わるものであり、それゆえ、われわれの偉大な小説の数々は、ギリシャ演劇との隣接を拒むのである。アイロニーによる融合は、あらゆる有効な結末を妨げる仮の統合である。小説の葛藤は、悲劇的芸術を生み出すことができないのである。

<sup>80</sup>中西信男『天才と狂気』p4



---

彼（モーツァルト）のすばらしい、天才的な、疾風のような高度の創造性の背後にあるものは、見世物同様の児童期、その頃からの病弱、絶えざる心身症的な症状、対人関係の拙劣さ、他人の見る眼のなさ、熱狂と失望、不幸な結婚、経済観念のなさ、など——たとえ当時の音楽家の地位が時の権力者によって左右されているとはいえ——あまりにも悲惨な人生である。

<sup>81</sup>『道化の文学』 p182.以下、すべて第IV章セルバンテスより。

<sup>82</sup>ハムレットも、最初は佯狂だったが、段々と真の狂気に染まっていったと河合祥一郎は主張する。河合によれば、ハムレットは誰よりもオフィーリアを一番必要としており、そのオフィーリアから裏切られた瞬間に、悲しみと怒りで狂乱状態になり、激しく罵りはじめ、狂気に侵され始めたのだという。その裏切りとはハムレットがオフィーリアに「君の親父はどこにいる」と聞いたとき、オフィーリアが「家におります」と嘘をついたことだと説明している。（『謎解きハムレット』 p186）

<sup>83</sup>同上。 p186

<sup>84</sup>アウエルバッハ『ミメーシス下』 p171. 「日常の現実をこれほど広くあまねく、多層的に、それでいて無批判的に、そして無問題的に描こうとしたものはヨーロッパにその後ない。」など、アウエルバッハは如何に『ドン・キホーテ』に悲劇性と問題性がなかったのかを述べている。

<sup>85</sup>貴族の男。ルシンダと結婚しようとしていたが、ドロテアの聡明さに頭を冷やし、彼女とやり直そうとする。

<sup>86</sup>前篇第44章。スペイン語版 p475、日本語版 p491 下段

<sup>87</sup>《銀月の騎士》の正体は、ドン・キホーテたちの村の得業士、サンソン・カラスコで、彼はドン・キホーテを村に連れ戻すため、《森の騎士》として後篇第15章でドン・キホーテに戦いを挑むが、結局敗れ、今度は《銀月の騎士》として後篇第64章で再びドン・キホーテに戦いを挑み、勝利する。

## 第2章 サンチョ・パンサに関する分析

以上見てきたように、ドン・キホーテはさまざまな両面性を備えている。それでは、『ドン・キホーテ』のもう一人の主人公、サンチョ・パンサはどうだろうか。サンチョ・パンサは、従来狡猾で、現実主義者だと言われてきた。しかし、はたしてそう単純に位置づけられてしかるべきなのだろうか。サンチョ・パンサの持つ両面性について考察していくことにする。

ドン・キホーテの両面性は、 $A \rightarrow B$ へと段々と推移していくと、 $B$ へと変容したものが $A$ には戻らないという非可逆的な性質である。それに対し、サンチョ・パンサの両面性は、 $A \rightarrow B$ へと単に一方方向に変わるのではなく、 $B$ へと変わったかと思えばすぐに $A$ に戻り、また $B$ に行きつくといったように、可逆性のある性質である。

ドン・キホーテの非可逆的な変容と異なり、サンチョ・パンサの可逆的な性質が、両者の違いを際立たせ、『ドン・キホーテ』をより興味深いものになっているということは疑いようがない。

さらに、サンチョ・パンサの可逆的な両面性こそが、彼のドン・キホーテ化をより推し進める結果になったということを考察していきたい。

それでは、 $A \leftrightarrow B$ という可逆性のある両面性に関して、①強欲と禁欲②親愛と裏切り③現実直視と非現実直視④臆病と勇敢⑤愚鈍と知恵、という五点について考察していくことにしよう。

### 1. サンチョ・パンサの両面性

サンチョの特徴について考察しよう。大食漢でずんぐりとしていることはよく知られている。また、何かを比較するときには、実際に体験したことをもとにしていることが多いことや、ドン・キホーテに比べて金銭面にもしっかりしていることも、『ドン・キホーテ』を通じてうかがえる。

当初ドン・キホーテから“*hombre de bien-si es que este título se puede dar al que es pobre-, pero de muy poca sal en la mollera*”「近所に住む農夫で、善良な人間（もっとも、この称号が貧乏人にも通用しうるものとして）だが、ちょっとばかり脳味噌の足りない男」<sup>88</sup>という評価をされていたとおり、単語をまちがえたり、前後の見境なしに行動を起こしてしまったりとあまり頭が良

いとは思われない。しかし生活に根付いたことであれば、主人よりも知恵を働かせるので、現実主義者であると言われてきた。

こずるく、ドン・キホーテを見捨ててやろうかとも思うこともあるが、実際にはそうせず、後半になれば、絶対に主人を見捨てないと発言し、人間味にあふれる人物である。

清水憲男は、サンチョを「一見世俗的欲求が高そうだが、高い精神性を有する人物」と高く評価している<sup>89</sup>。同じく Mauricio Molho もサンチョが複雑な人物であることを認めている。彼は“*Cervantes: raíces folklóricas*”でサンチョを“*el listo haciéndose el tonto, o el tonto pasándose de listo*”「馬鹿者から転じた利発者、利発者から転じた馬鹿者」と呼んでいる。以下に引用をひくことにする<sup>90</sup>。

En virtud de su dinámica reversible, el personaje de Sancho Panza se presenta en el primer Quijote como una figura ambigua que por su comportamiento se presta a una doble lectura, calificándose alternativa o incluso conjuntamente de necia o de astuta (...) . La ambigüedad sanchesca implica, en efecto, dos ejes: el eje narrativo, en que se invierten y suceden el tonto y el listo; eje horizontal, diacrónico, en el que el uno y el otro avatar del personaje se van sustituyendo de momento en momento; pero interviene además un eje vertical sincrónico, por el que los avatares coexisten superponiéndose, de modo que bajo la inmediata apariencia del tonto o del listo obran ocultamente sus respectivos enveses, a saber, el listo haciéndose el tonto, o el tonto pasándose de listo.

サンチョ・パンサの可逆的なバイタリティーによって、前篇ドン・キホーテにおいて、あいまいな人物像になっている。というのも、彼の行動によって二つの解釈ができるからである。愚かな、あるいは賢い人物であるということが交互に、または同時にすら起こりうる人物なのだ。サンチョの曖昧性は、事実2つの軸を示唆している。一つは叙述的な軸で、その軸内でサンチョは愚かな人物と頭の冴えた人物を行き来する。それは水平つまり通時的な軸で、その軸内では、サンチョの人物像が一瞬一瞬変化していく。しかし、さらに同時的な垂直の軸が加わっていると言える。その軸を介して、互いに

積み重なったサンチョの変化が共存している。だから馬鹿者または利発者という一見ただけでは分からないが、それぞれの裏側が作られている。すなわち、馬鹿者に転じた利発者、利発者に転じた馬鹿者という具合である。

清水憲男の意見には賛成できる。また、Molhoの意見にも大部分同意できるものの、サンチョ・パンサの変化が*sincrónico*（同時的）という点においては納得しかねる。なぜなら、これから検討していく彼の二面性は、常に交互に起こっているからだ。もしその変化が同時的なら、彼は後述するように、アンビグイティではなくアンビヴァレントな存在になるからだ。

マダリアーガは、サンチョ・パンサがドン・キホーテのように騎士道物語の枠組みに縛られて旅に出るわけではないので柔軟性があり、故に、自由で、千変万化、アンビヴァレントだと定義づける<sup>91</sup>。また、同様に牛島信明は以下のようにサンチョの特性を結論付けている<sup>92</sup>。

サンチョ・パンサはドン・キホーテのように騎士道物語の枠組みに縛られて旅に出るわけではなく、この点に彼の重層性と柔軟性の基盤がある。枠組みにとらわれてはいないが故に、サンチョはそれだけ自由で、まさに千変万化、アンビヴァレントで微妙な心理の動きを見せることになる。（中略）騎士道物語という十字架を背負っているドン・キホーテは、みずからを騎士にした過去の規範をおのれの行動原理とし、みずからの意に反するあらゆる現象一棒による殴打、愚弄、幻滅などを超克し、あるいは無視することによって、おのれの〈生〉を創り出していく。それに対して自由人サンチョは、自分の置かれる状況、つまり外的条件次第でいかようにも変わりうる一金に目のくらむ野卑な男でもあれば、従順この上ない従士でもあり、超俗的な哲学を口にするかと思えば、バラタリア島ではソロモン王の再来と言われるほどの名統治者ぶりを示し……一のである。すなわち、サンチョの直面する外的現実には、原則としてすべて彼の行動を動機づけうるが故に、彼の〈生〉は刻々更新され、新たな展開をみせるのである。

とはいえ、「アンビヴァレント」とはどんな意味で牛島信明は用いているの

だろう。と言うのも、Mauricio Molho は、サンチョをアンビグイティ（曖昧）と評しており、牛島の評価とは若干異なるように思われるからだ。サンチョのことを「アンビヴァレント」だと言っている研究者たちは、どんな意味で用いているのだろう。心理学者の山崎喜直は、著書『異常心理学入門』において、アンビヴァレント（山崎はアンビヴァレンツと複数形で言っている）について、以下のような見解を述べている<sup>93</sup>。

アンビヴァレンツとは両価性、一つの対象に対して友好—敵対、愛する—憎む、何かしようとする—何もしないようにするなどの、相反する感情や態度が同時に存在する心理状態をいう。

本論に入る前に明らかにしておかなくてはならないことだが、アンビヴァレントとアンビグイティは明らかに異なっている。

ある人物が曖昧だというとき、それは、ある人物がAにもBにもなり得るという可能性があるということである。以下、説明していくことになるが、サンチョはドン・キホーテを見捨ててやろうと何度も思うものの、実際にはそうせず、後篇になれば、決して見捨てたりはしないと述べている。しかしながら、それとは別の面で、ドン・キホーテを最後まで騙し、少しでも多くの金をせしめようとしている。

だから、われわれはサンチョ・パンサを一面的にとらえることができない。サンチョが冷血だとすれば、なぜドン・キホーテを最後まで見捨てなかったのかという疑問が残るし、サンチョがドン・キホーテを大切に思っていたのであれば、主人を最後まで騙そうとは思わないだろう。

しかしながら、アンビヴァレントにとらえれば、「相反する」感情がほとんど「同時に」湧かなければならない。これこそが曖昧さと異なる。つまり、通常の理性人であればアンビヴァレントな状態に至ることは決してない。山崎は、アンビヴァレントな状態にいる人物を「異常」だと言っている。同様にフーコーも、「病には葛藤のアンビヴァレントな側面が存在する」<sup>94</sup>「精神分裂患者はアンビヴァレンツのうちに生き」<sup>95</sup>と述べており、アンビヴァレントな状態を異常な状態だと見ている。

つまり、サンチョがアンビヴァレントであるためには、ドン・キホーテに対

してつねに「愛情」と「憎しみ」を「同時に」感じていなければならない。しかし、上記を見ただけで、サンチョはドン・キホーテに愛情を感じているものの、憎しみを抱いていないことが分かる。ドン・キホーテを見捨てようとしたのは、サンチョの「強欲」からであり、強い憎しみを抱いていたわけではない。

以上より、サンチョ・パンサがアンビヴァレントであるという牛島信明の所見もいささか過ぎているのではないかと思われる。もしも、われわれがサンチョ・パンサをアンビヴァレントと位置づけるのであれば、正常人とは位置づけられなくなってしまい、第3章で見ていくドン・キホーテとサンチョ・パンサの相互影響にも違いが生じてしまう。

しかし、ドン・キホーテは正気と狂気の入り混じった人物、サンチョ・パンサは、曖昧さという両極性を多くもつ正常人なので、これ以降サンチョがアンビヴァレントな存在だという言い方は差し控えることにするし、その両極性が同時に起こっていることを許容しない。

それでは、サンチョ・パンサはどのような面で曖昧なのだろうか。上記の例により、サンチョの曖昧さは、AとBの対抗だけで説明されるというよりも、もっと深く、AとB、さらにCという関係性のなかで生まれていると言っても過言ではないだろう。つまり、「ドン・キホーテを見捨てなかったのは彼を愛しているからだ」、しかし「サンチョは強欲だ」、そのため、「愛しているドン・キホーテを最期まで騙す」という少なくとも三点が浮かび上がってくるからだ。

サンチョは、強欲でありながらキリスト教徒としての抑制力を持っており、ずる賢く主人を騙すが、絶対に主人を見捨てない。つまり、相反する態度や感情を場面ごとに切り替えることの多い人物だと思われる。「島」“*ínsula*”への執着心をはっきりと見せるものの、領主就任前にドン・キホーテからいくつかの忠告を受けると“*si a vuesa merced le parece que no soy de pro para este gobierno, desde aquí le suelto;*”「この場で島を手放してもよい」<sup>96</sup>、“*y si imagina que por ser goberbador me ha de llevar el diablo, más quiero ir Sancho al cielo que gobernador al infierno*”「領主になって地獄に落ちるより、ただのサンチョで天国にいったほうがまし」<sup>97</sup>と発言するなど、強欲と禁欲の狭間にいることが分かる。また主人への親愛と裏切りに関してサンチョは、前篇第25章でドン・キホーテのしたためたドウルシネーア・デル・トボーソへの手紙を預かる。しかし、結局ドウルシネーアに会えず、前篇第30章でドン・

キホーテに彼女の様子を尋ねられると、作り話をして騙している。また、後篇になると、サンチョはドゥルシネアの魔法とすのために、自身を 3300 回鞭打たなければならなくなる。実際はしていないにもかかわらず、鞭打ちはみずからおこなったのでその分を払ってくれと、ドン・キホーテを欺いている<sup>98</sup>。これが主人への裏切り（エゴイズム）である。しかしながら、《森の騎士》の従者との会話では、ドン・キホーテを見捨てるつもりはないことを明言する<sup>99</sup>。そして最終章では、ドン・キホーテが死んでいくことを心から悲しんでいる。サンチョはドン・キホーテに対してかなり強い愛情を抱いていることがうかがえる。

以上のことから、サンチョ・パンサは、相反する感情や態度をそのときどきに応じて切り替えていることが分かるので、サンチョの特徴を深く知るために、以下の点を考察する。まず、島を手に入れたいと渴望する「強欲」、それに反し、清いキリスト教徒として死にたいと願う「禁欲」、ドン・キホーテを決して見捨てない「親愛」（アルトゥイズム）、それにもかかわらず、ドン・キホーテよりも自分の利益を優先させてしまう「裏切り」（エゴイズム）、ドン・キホーテの世迷事を諫め、主人の理想主義と比較されることの多い「現実直視的態度」、しかしながら場面と対話者がかわれば魔法の存在を信じてしまう「非現実直視的態度」、当初のドン・キホーテがサンチョに下した判断である「愚鈍」、後篇になるとサンチョが少しずつ愚鈍でなくなり、物語の終わりにはドン・キホーテを凌ぐほどになる「知恵」、自分に実害が及びそうであれば、絶対に回避しようとする「臆病さ」、場面を変えれば、自分に実害が及ぶとしても、みずからの誇りを優先させ、たとえ自分よりも力のある者であっても立ち向かっていく「勇敢」の十点について個別に見ていこう。

## 2 強欲と禁欲

### 強欲

サンチョは、「島」“*insula*” という聞きなれない単語で、主人と冒険を共にしようと思った。その後も、何度も島という単語を用い、ドン・キホーテと会話をしており、島がサンチョの行動の強い動機づけになっている。サンチョは島を統治し、皆から敬われたいと願っている。即興従士は無欲とは言えず、それどころか強欲とすら言うことができるだろう。

なぜなら金への執着を覗かせ、ただで旅籠に泊まれることを良しとしたり<sup>100</sup>、持ち主不明の百エスクードの入った袋を自分のものにしたり<sup>101</sup>しているからである。強欲という言葉がわれわれが用いるとき、その強欲さは、何もその時代のみに限ったことではなく、昔から存在するものだと分かる。つまり、サンチョ・パンサの強欲さは、セネカのいう強欲さに似ているのではないだろうか。

というのも、われわれとセルバンテスの時代を生きた人々には何の接点もないが、唯一そこに感情移入できるのは精神構造が同じだからである。トビ・ナタンは以下のように言う<sup>102</sup>。「人々は『オイディプス王』を読むと今でも身震いする」。そして「古代ギリシア人とわれわれのあいだにどのような共通性がある」のかを考えたとき、「文化的世界も言語も、技術も、共有して」いない。共通するのは「精神現象だけである。」「人間の精神の普遍性は、心理的障害の記述の中にも同様に現れており、それはプファイファー(W.M.pfeiffer, 1971)が「複数の文化を通じて、心の病を持つ人々同士は、健康な心をもつ人々同士よりも互いに似ている」と書くことができたほどである。」

つまり、われわれが二十一世紀で持つ強欲さも、セネカの時代の強欲さも、セルバンテスの時代の強欲さも、その根底は同じである。

元々、サンチョは「島」を手に入れたいと思ったことから、ドン・キホーテと冒険にでかけている。サンチョにとって「島」とは一体何なのだろうか。

清水憲男は、サンチョの《島》観について、「島」(isla)のことを話すのに、当時のスペイン語では使われなくなっていた古語(ínsula)をドン・キホーテが用いてしまったことによりサンチョの理想化に拍車がかかり、胸は高鳴り希望に燃えたのだと分析している<sup>103</sup>。

清水の指摘は妥当だと思われる。理由は、二点ある。まず、前章で見てきたように、-ulo,ulaで終わるものはラテン語派生であり古語であることが証明されているという語史的な点。そして『ドン・キホーテ』の登場人物が、ínsulaという単語を理解していない点である。たとえば、後篇第2章では、サンチョとドン・キホーテの姪、家政婦が会話を交わしている。そのとき、姪は以下のように言っている<sup>104</sup>。

Y ¿qué son ínsulas? ¿Es alguna cosa de comer, golosazo, comilón que tú eres?



で、そのインストラっていったい何よ？おおかた食べる物なんでしょう、意地きたなくて大食いのあんたのことだもの。

さらに、追い打ちをかけるように、家政婦は次のようにサンチョに言う。

*dejaos de pretender ínsulas ni ínsulos.*

そんなインストラだかインスロだかを欲しがるのはやめにしてさ。

この箇所から、姪と家政婦は *ínsula* の意味を知らなかったことが分かるだろう。

同様に、後篇第5章のサンチョ・パンサの女房テレサ・パンサの言葉<sup>105</sup>、“*idos a ser gobierno o ínsulo.*”「お前さんは御自由に、領地でもシマでも手に入れて」からも、インストラという言葉が、いかに当時の庶民のあいだで汎用されていなかったかが分かるだろう。

このように、得体のしれない“*ínsula*”「島」を手に入れようと、サンチョは冒険に出ようと思った。だから、島が手に入らないのではという不安が擡げれば、故郷に帰ろうと考えるのである。司祭が騎士道物語の内容を信じ込んでいる旅籠の主人を窘めているのを耳にしたサンチョの反応からも、明らかである<sup>106</sup>。

*A la mitad desta plática se halló Sancho presente, y quedó muy confuso y pensativo de lo que había oído decir que ahora no se usaban caballeros andantes, y que todos los libros de caballerías eran necedades y mentiras, y propuso en su corazón de esperar en lo que paraba aquel viejo de su amo, y que si no salía con la felicidad que él pensaba, determinaba de dejalle y volverse con su mujer y sus hijos a su acostumbrado trabajo.*

会話の最中に部屋に入ってきたサンチョは、遍歴の騎士など今では時代遅れであり、騎士道物語などどれもこれも馬鹿げた嘘っぱちにすぎないと言っているのを聞いてすっかりうろたえ、不安にかられて考えこんでしまった。そして、主人との今度の旅の成り行きを見守って、もしそれが期待しているような首尾よい結果をもたらさなかったら、思い切って彼を見捨て、妻子のもとに戻って、また慣れ親しんだ仕事をしようと心に決めた。

マダリアーガや、Eduardo Urbina も、サンチョが島という物欲によって冒険に出ることになったのだと認めている。Urbina は、“La 《ínsula》representa la prueba del interés o codicia del improvisado escudero, motivo que reaparece una y otra vez cunde la desilusión y la permanencia de la pareja peligra,(...)” 「《島》はすなわち従士の利益、強欲を象徴していおり、主従が危機に陥ったり、失望の念に駆られたりするごとに動機として再び現れる」<sup>107</sup>と述べている。しかしながらマダリアーガは、サンチョの“materialismo”「物質主義」が、土地を買い、優雅に暮らしたいと言う欲望からでてきたものなので、“ínsula”「島」の“gobernador”「領主」になりたがるのは至極当然だと主張しながら、サンチョが真に欲していたものに対して、以下のように述べている<sup>108</sup>。

Y es que lo que verdaderamente desea no es riqueza, sino poder. El poder es para Sancho lo que la gloria para Don Quijote. Como Dulcinea personifica la gloria para Don Quijote, la ínsula materializa el poder para Sancho. Y así, como Don Quijote tiene que creer en Dulcinea, a fin de creer en sí mismo, Sancho tiene que creer en Don Quijote para creer en la ínsula. De este modo la fe del caballero va a nutrir el espíritu del criado después de haber sostenido el espíritu propio.

彼（サンチョ・パンサ）が心の底で望んでいるのは、実は富ではなく権力なのである。サンチョにとっての権力とはすなわち、主人にとっての栄光である。そして、ちょうどドン・キホーテにとってドゥルシネアが栄光の化身であるように、サンチョにとっては島が権力の形象なのである。したがって、ドン・キホーテが自分自身を信じるためにドゥルシネアを信じなければならないのと同じく、サンチョは〈島〉を信じるためにドン・キホーテを信じなければならない。このようにして騎士の信念は、みずからの士気を支えるだけでなく、従僕の士気をも養っているのである。

マダリアーガの意見は妥当だと思われる。サンチョは“ínsula”に住む人種

のことを引き合いに出しながら、「黒人であっても立派に治めてみせる」<sup>109</sup>と言ったり、または島の領主を手ばなした後でも「もう一度人に命令し、服従されてみたい」<sup>110</sup>という願望を持っていた。ここから、彼の欲は単なる物欲ではなく、人から尊敬のまなざしで見られたい、命令してみたいという征服欲に近いものだと分かる。

同様に、サンチョ・パンサにとって「島」がいかに重要なものであったかについても言及している<sup>111</sup>。

La 《ínsula》 representa la prueba del interés o codicia del improvisado escudero, motivo que reaparece una y otra vez cuando cunde la desilusión y la permanencia de la pareja peligra, dado lo extremado de la parodia. Así, mientras Sancho impide el encuentro entre don Quijote y Dulcinea, resaltando inconscientemente lo burlesco de sus amores, su interés por la ínsula es lo que le mantiene unido a su amo. Es, como lugar de refugio y objeto de conquista, motivo paródico cierto en conflicto con el interés amoroso de don Quijote. La manera en que Sancho obtiene su recompensa demuestra la posición y valor que la ínsula tiene *vis-à-vis* la carrera caballerisca de don Quijote. Junto con el encanto-desencanto de Dulcinea, la promesa de la ínsula se convierte en piedra de toque con la cual se mide la ingeniosidad de don Quijote y la creatividad de Cervantes. El capítulo(I.7) concluye con el primer diálogo entre don Quijote y Sancho y el ahora escudero Sancho Panza. Su tema ha de ser la ínsula como recompensa prometida. En esta ocasión queda sentado ya que la simpleza y el propio interés de Sancho conocen límites, dudando éste de la posibilidad de verse entronado en compañía de su mujer. El diálogo termina en términos contradictorios, habiéndose vislumbrado el más absurdo de los extremos al manifestar Sancho su confianza en la provincia divina y en los poderes articulatorios de su amo.

すなわち、《島》は即興従士の利益や強欲を象徴している。サンチョが幻滅したり、主従が危険に晒されたりすると、《島》は何度も現れ、原動力となる。そして動機そのものはパロディーである。サンチョがドン・キホーテの

恋情を無意識にからかい、ドン・キホーテとドゥルシネアが出会うことを妨げる一方、島への利益が、サンチョとドン・キホーテを結びつけている。島は、ドン・キホーテの恋情と対を成す、サンチョにとっては逃げ場や征服すべき物としての、パロディ的な動機である。サンチョが己の褒賞を獲得するための手段は、ドン・キホーテの騎士としての経歴に、島の獲得があつてしかるべきだという態度や価値観を映している。ドゥルシネアの魔法や魔法解きと共に、島の約束は試金石に変容する。ドン・キホーテの巧妙さとセルバンテスの創造性を図ることができる。その章（前篇第7章）はドン・キホーテと、今や従士となったサンチョとの初めての対話で締めくくられる。会話の中心は、島という約束された褒美についてである。この時、サンチョの単純さと彼特有の利益とが限界を超え、妻と一緒に王位につく可能性を疑っている。対話は矛盾した言葉で終わっている。つまり、サンチョは崇高なる島とドン・キホーテの口上を信じたとき、最も馬鹿げた矛盾が立ち現れるのである。

島はサンチョ・パンサが冒険に出かけるきっかけとなっていることには疑いようがない。「島」こそ、サンチョの欲を具現化したものであり、サンチョが最後まで「島」にこだわっていたのである。

ここで、アベジャネーダが書いた『贋作ドン・キホーテ』<sup>112</sup>のサンチョを見てみよう。アベジャネーダ版の『ドン・キホーテ』（以後『贋作ドン・キホーテ』と呼ぶことにする）は、1614年、フェリペ四世の統治下で発刊された。『ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ』の第二部として、ドン・キホーテはサンチョ・パンサとともに三度目の旅に出かける。作者はアロンソ・フェルナンデス・アベジャネーダである。しかし、このアベジャネーダというのは偽名であり、彼の本名が何であったのかは未だ明らかにされていない。ただ、最近の研究により、セルバンテスが、実はアベジャネーダなる者が誰であったのかを知っていたのではないかと、その上でその人物の名前を言わなかった、または言いたくなかったのではないかと考えられている。また、このアベジャネーダなる人物は、アラゴン地方出身ではないかとも言われている。それは、セルバンテスが指摘しているとおおり、『贋作ドン・キホーテ』には、数多くのアラゴン方言が見受けられるからだ<sup>113</sup>。また、ドン・キホーテ主従がサラゴサへ槍試

合に行った折の風景や通りなどが詳細に描写されていることも、この仮説を裏付ける証拠となるであろう。またもうひとつ、研究者のあいだで言われていることは、アベジャネーダが聖職者だろうということである。聖書のものを多く引用したり、逸話がすべて宗教がかかっていたりしているからだ。『贋作ドン・キホーテ』の逸話の一つ「幸せな恋人たち」もそうである。たしかにモチーフは、宗教を中心に成り立っている。ルター派に対する憎悪の念にもすさまじい。実際、サンチョの口を借りて、「コンスタンティノープルの人々は人肉を食していた」<sup>114</sup>と言わせている。さらに正確に言えば、アベジャネーダはドミニコ会修道士だというのが研究者たちの共通の意見である。それは、『贋作ドン・キホーテ』にドミニコ会の習わしなどが事細かに書かれているからであり、この点に関しても研究者のあいだで意見は概ね一致している。

アベジャネーダは、セルバンテスに明らかな敵意を持って『贋作ドン・キホーテ』を執筆した。それは、序章のセルバンテスに対する中傷からも明らかだ。多くの研究者は、アベジャネーダ版とセルバンテス版の『ドン・キホーテ』を比較して、アベジャネーダ版のドン・キホーテには二面性がなく狂っているだけだ、サンチョ・パンサも同様に単なる大食漢として書かれており、面白みがない、主従には会話が成立せず内容がない、などと批判している<sup>115</sup>。

ここではそれらの言及は控えるが、サンチョのある一点にのみ焦点を当てたい。それは、アベジャネーダ版のドン・キホーテでは、サンチョが“*ínsula*”「島」に限定すれば、数回しか用いていないという点である。

たしかに贋作のサンチョ・パンサが、何の間違いも持たせずに*ínsula*と*isla*を使用しているということを確認してみよう。

まず、『贋作ドン・キホーテ』において“*ínsula*”という言葉を用いているのは五回、しかしいずれも“*reino*”「王国」や“*península*”「半島」と同時に使用しており、またその発話者はサンチョ・パンサに限られている。第18章の、“*Aunque sepa perder o dilatar la posesión de la gran ínsula y reino de Chipre...*”（大いなる島とカプリ王国を手にいれられなくなると分かっちゃいても）<sup>116</sup>、第22章の、“*tenido por esos mundos, ínsulas y penínsulas por caballero andante, como vuesa merced lo es.*”（お前様が仰るように騎士様は島とか半島を手にいれなさるといふ…）<sup>117</sup>、第33章の、“*tras que juntamente vuesa merced me había de jurar y prometer hacerme por sus tiempos rey o almirante de alguna ínsula o península, como mi señor don Quijote me*

tiene prometido desde el primer día que le sirvo;” (ドン・キホーテ様にお仕えしたその日に約束してくださったように、どこかの島か半島の王様とか総督になるという) <sup>118</sup>、第35章の “pues me ha de dar la gobernación de la primera ínsula o península, reino o provincia que ganare;” (ドン・キホーテ様が勝利をおさめたときには、まず島か半島か、王国とか地域を治めさせてくれるって) <sup>119</sup>、同じく第35章の、“me dará lo que me tiene prometido, que es la gobernación de algún reino, provincia, ínsula” (どこかの王国、地域、島の統治をまかせてくれるって約束してくれた) <sup>120</sup>である。

この場合、サンチョが半島や王国という単語とともに *ínsula* を用いることにより、*ínsula* の価値が曇っている。前述のとおり、ドン・キホーテが *isla* ではなく、あえて古語の *ínsula* を使ったのでサンチョが、*ínsula* をはつきりと理解できず、未知のものに対するあこがれからドン・キホーテの従士になったということが正篇で仄めかされている。それにもかかわらず、同義語と並列させることで、*ínsula* という語自体が無意味に映ってしまう。また、贋作のドン・キホーテは第22章でサンチョの治めることになるであろう島を “*amenísima isla*” 「素晴らしい島」 <sup>121</sup> と評している。そのためサンチョは、自分が治めようとしているものが何なのかはつきりと理解している。また、サンチョを従士にしたほかならぬドン・キホーテ自身が “*ínsula*” という言葉を用いていないというのは矛盾しているだろう。

このように、『贋作ドン・キホーテ』は “*ínsula*” 「島」について、『正篇ドン・キホーテ』で意図していたものをまったく汲み取っておらず、この点において(たとえセルバンテスでない第三者が続篇を書いたのだということも考慮したとしても) アベジャネーダ版の『贋作ドン・キホーテ』は、正篇には遠く及ばない。

正篇のサンチョ・パンサや彼の周囲の者たちは、後篇になったとしても、*ínsula* への古語性をなくすことなく、一種奇異なものとして *ínsula* という単語を用いていることは明らかである。

それこそが、先ほどのドン・キホーテの姪や家政婦の台詞、またはサンチョの妻であるテレサ・パンサの言葉であろう。姪は “Y ¿qué son ínsulas? ¿Es alguna cosa de comer, golosazo, comilón que tú eres?” 「で、そのインストラっていったい何よ? おおかた食べる物なんでしょう、意地きたなくて大食いのあんたのことだもの。」 <sup>122</sup> と、サンチョを馬鹿にする。家政婦は “*dejaos de*

pretender ínsulas ni ínsulos.”「そんなインスラだかインスロだかを欲しがるのはやめにしてさ」<sup>123</sup>と、まるで *ínsula* という言葉が存在しないかのようにサンチョをからかう。夫が何か未知のものに乗り出そうとするのを、まるで不吉なことかのようにおびえながらテレサ・パンサは “idos a ser gobierno o ínsulo.” 「お前さんは御自由に、領地でもシマでも手に入れて」<sup>124</sup> しまえばいい、とまちがった単語を用いてしまう。

このように、サンチョがいかに “ínsula” に執着をしていたかが分かるだろう。しかし不思議なことに、サンチョは欲ばかりの人間ではない。なぜならサンチョは「古くからのキリスト教徒」だからである。

## 禁欲

サンチョは、ドン・キホーテと冒険をするうちに、キリスト教徒としての禁欲に、より注意を払うようになった。たとえば前篇第47章では、自分が “Soy cristiano viejo” 「親代々の古くからのキリスト教徒」<sup>125</sup>だと主張しており、信者であることに大変な誇りを持っていることがわかる。そもそもキリスト教とは何か。その死生観はどのようなものなのだろうか。

まず、キリスト教はどのように発生したのだろうか。ローマ皇帝ティベリウス（紀元前14—37）の治世に、サウロ（ギリシア語名ではパウロ）というイエスを迫害していた若者が、ダマスコに向かう途中で天の声を聞き、失明する。しかし、幻の中でイエスの指示を受けた弟子のアナニアの手で、サウロは視力を取り戻す。この逸話により、キリスト教が始まった。キリスト教は救済を必要とする人々とともにあった。当初、キリスト教は新興宗教の一つに数えられ、キリスト教徒も迫害されていた。しかし四世紀はじめにコンスタンティヌス1世により公認されたことにより、キリスト教徒の迫害はおさまった。

キリスト教の死生観は、ユダヤ教の死生観とはかなり異なるものである。旧約聖書の中では、死者の世界は「シオル」と呼ばれ、沈黙と暗黒の国として描かれている。それこそ「二度と帰って来られない暗黒の死の闇の国」であり「その国の暗さはまったくの闇で、死の闇に閉ざされ、秩序はなく、闇がその光となるほど」の場所であったとも記されている<sup>126</sup>。

しかしカトリックでは、死の世界は天国と呼ばれ、善行を積んだものはそこにいくことができた。当時のキリスト教徒について、シェイクスピア『ヴェネスの商人』<sup>127</sup>から分かるほかのヨーロッパの国々の状況とスペイン内部の状

況を見ていくことにしよう。

このころ、西方キリスト教は、トマス・アキナス<sup>128</sup>の論により、十三世紀以降急速に神の内在の直接性を見失っていく。キリストはこの世界に内在したけれど、誰も実に十世紀以上のあいだ彼の姿を見たことはなく、神は超越的な存在であったからだ。そのため、人間には近づくことができない絶対的な存在となってしまった。落合仁司は、キリストとの対話の欠如という大きな問題から、「このような神の絶対的な沈黙を前にして、人間が神への関心を失って行くことはむしろ当然であろう。西欧はこのような理路を巡って世俗化して行ったのである。」<sup>129</sup>と述べており、当時のキリスト教の権威が失墜しつつあったことが分かるだろう。

また、キリスト教の権威が失墜したもうひとつの理由は、「キリスト教改宗者」が多くなったため、何をもってしてキリスト教徒だと言えるのかに疑問が生じたためだ。また、キリスト教徒の人数も増えたため、誇りを高く持てなくなったためであろう。

ヨーロッパ全土において、キリスト教徒の数が増えていたことは、ヴェニス商人からもうかがえる。以下は、キリスト教徒のラーンスロットが、キリスト教に改宗したユダヤ人のジェシカに言った台詞である<sup>130</sup>。

we were Christians enow before. e'en as many as could well live one by another. This making of Christians will raise the price of hogs; if we grow all to be pork-eaters, we shall not shortly have a rasher on the coals for money.

キリスト教徒はあり余ってるんですぜ、押し合いへし合い息が詰まるぐらいだ。これ以上キリスト教徒をつくったりしちゃ豚の値が上がり上がったたまらない。おれたちみんなが豚肉を食ってごらんない、そのうちいくら金を積んだってあぶったベーコンの薄い一枚も買えなくなる。

だからこそ、スペインでは、キリスト教の失墜を抑えるために、「古いキリスト教徒」という言い方をした。古いキリスト教徒とは、新たにキリスト教徒に改宗したものたちと分けられた言い方である。この場合、新しいキリスト教徒とは、とくにコンベルソ（改宗ユダヤ教徒）である。

十六世紀を通じて、祖先にユダヤ教徒やモーロ人の血が混ざっていないのだ



という証明、「血の粛清」が、各々の信徒会や職能団体に拡がっていった。「古いキリスト教徒」がいかに重要視されたかについてだが、黄金世紀のスペインでは、「カトリック教徒」ということだけでは社会的名誉は得られなかった。「由緒正しき古くからのカトリック教徒」、すなわち先祖にユダヤ教徒やモーロ人の血が混ざっていない純潔なカトリック教徒であることが求められたのだ<sup>131</sup>。さらに、「古くからのキリスト教徒であるスペイン人」こそが「国家の一体性の基礎であり、異端者である外国人と自らを分かち国民意識の基礎」だと謳われた。「太陽の沈まぬ帝国」を統治していたフェリーペは、「異端者に君臨するくらいなら命を百度失うほうがよい」と、宗教第一義を掲げ、結果的にはスペイン国内におけるキリスト教の威信を保ったのである<sup>132</sup>。

史実には“En qué medida esa hostilidad cristiana vieja hacia los conversos respondía a una realidad”「古いキリスト教徒が、コンベルソに持っていた敵意はすさまじいものだった」<sup>133</sup>と残っていることから、いかに改宗者がスペイン社会の中で疎外されていたかがうかがえるだろう。

その理由は、コンベルソと言っても、隠れてみずからの宗教を信仰し続けているからであり、実際、貴族のコンベルソは、子どもを古いキリスト教徒と結婚させ、キリスト教徒かのように見せかけていたのに、葬式はユダヤ教徒式に執りおこなうなど、キリスト教を軽視するような行動が目立ったためである<sup>134</sup>。

ここで、モリスコとコンベルソについて指摘しておく。モリスコとコンベルソはまったく異なっている。モリスコは、都市に住みながら田舎で生活し、独自の宗教や言語、服装をしていた。対してコンベルソはキリスト教徒に混じって生活をおこない、慣習や洋服もキリスト教徒のものと同じであった。そのためコンベルソとキリスト教徒を見分けることは難しく、コンベルソたちはキリスト教徒と同じ特権を有していた。

このように、ユダヤ教徒がコンベルソとなり、名ばかりのキリスト教徒であることを嫌った古いキリスト教徒たちは、十五世紀に、その策を講じた。それが“limpieza de sangre”「血の粛清」である。

血の粛清が始まったのは十五世紀中ごろのことである。以下は、血の粛清がおこなわれた史実の記述である<sup>135</sup>。

Para defenderse de las supuestas infiltraciones judías, y además de la

vigilancia del aparato inquisitorial, la sociedad cristiana vieja utiliza otra arma, ya aplicada en el siglo XV: los Estatutos de limpieza de sangre. Fue muy debatido el que acabó imponiendo el Arzobispo Silíceo al cabildo toledano a mediados de siglo, no encontrando al principio el apoyo de la Corona; pero una vez logrado, dio la pauta para que otras instituciones religiosas y oficiales lo siguieran.

Silíceo大司教が十五世紀中葉トレド司教座参事に課した最初の血の粛清は議論的になり、当初は王家から賛同されなかったが、一旦血の粛清がおこなわれると、ほかの宗教機関や公共機関も次々と血の粛清をおこなった。

このように、大司教がおこなった「血の粛清」は、当時のスペインでの背景に押され、数多くおこなわれたため、古いキリスト教徒という価値は高まっていった。

だからこそ、サンチョは『ドン・キホーテ』の中で、自身が古いキリスト教徒であったと、あのようにならぶ自負できたのである。

それでは、自らを古いキリスト教徒だと言うサンチョは、いかなる点において、キリスト教徒としての誇りを持っていたのだろうか。また、上記に見たように、キリスト教においては、現世で善行をつめば、死後誰でも天国に行くことができたのであるが、サンチョは、所謂この「魂の解放」について随所に不安を示していることも見ていこう。

サンチョがキリスト教徒として誇りを持っていたことが分かる場面は多々ある。たとえば、前篇第21章 “que yo cristiano viejo soy, y para ser conde esto me basta.” 「おいらは昔ながらのキリスト教徒。これだけでも、伯爵になるのに十分な資格ですよ。」<sup>136</sup>といった台詞や、前篇第47章の、“Yo no estoy peñado de nadie, ni soy hombre que me dejaría empeñar, del Rey que fuese; y aunque pobre, soy cristiano viejo, y no debo nada a nadie.” 「それにおいらは、おめおめと人に、それが王様であろうと、たぶらかされるような男じゃねえ。なるほど貧乏はしているが、親代々の古くからのキリスト教徒で、誰にも何も負っちゃいませんや。」<sup>137</sup>と言った台詞からもうかがえる。

二点に共通しているのは、サンチョがはっきりと “cristiano viejo” 「古いキリスト教徒」だと公言している点である。このことから、当時、キリスト

教徒というだけではなく、「古い」キリスト教徒であるということがいかに重要な意味を持っていたかが推測できるであろう。

また、後篇第43章で、サンチョは、島の領主になるためにドン・キホーテがいくつか忠告するのを受けて、次のように答えている<sup>138</sup>。

-Señor-replicó Sancho-, si a vuesa merced le parece que no soy de pro para este gobierno, desde aquí le suelto; (...) más, que mientras se duerme, todos son iguales, los grandes y los menores, los pobres y los ricos; y si vuesa merced mira en ello, verá que sólo vuesa merced me ha puesto en esto de gobernar: que yo no sé más de gobiernos de ínsulas que un buitre; y si imagina que por ser goberbador me ha de llevar el diablo, más quiero ir Sancho al cielo que gobernador al infierno.

「旦那様」とサンチョが応じた、「もしお前様が、サンチョって男は島の統治にゃ向いてねえと思いなさるなら、おいらこの場で島を手放すことにしていいよ。(中略) それに考えてみりゃ、人間眠ってるあいだは、身分の高いも低いも、金持も貧乏人も、みんな同じですからね。だいいち、おいらを島の領主にするなんてことを考え出したのは、一体どこのどなただね？ほかならぬお前様じゃありませんか。おいら島の統治なんかについちゃ、それこそ禿鷹よりも無知なんだから、領主になれば悪魔にさらわれるっちゅう恐れがあるというなら、領主になって地獄に落ちるより、ただのサンチョで天国へ行ったほうがましですよ。」

このとき、サンチョは自らをキリスト教徒だと誇示することはないが、その内容としては、徳を積んだ僧のようである。キリスト教の死生観からすれば、現世で徳を積めば天国に行けるので、サンチョのこの発言は非常に重要である。また、「人間眠っているあいだは平等」と言うのも、根底に平等主義を掲げるキリスト教の教えに倣っていると言える。

サンチョは天国に行くことを願っており、自分の魂が死後、解放されないのではないだろうかという不安も読み取ることができる。

つまり、サンチョという人物は、先祖代々からのキリスト教徒であり、当時の背景も含めれば、自身が“cristiano viejo”「古いキリスト教徒」であると

いうことに相当の誇りをいだいている。また、キリスト教徒としての善行を積もうという意思も見られるし、魂の解放が望めないようならば“*ínsula*”（島）をあきらめるつもりだとさえ言っているのである。

## 拮抗

これまで、サンチョ・パンサが、*ínsula*を求めて冒険に首を突っ込んだこと、また、物語が進むにつれて*ínsula*が彼にとって栄光の化身となっていることを見てきた。

また、サンチョは、“*cristiano viejo*”「古いキリスト教徒」であることに誇りを抱き、魂の解放と“*ínsula*”島をはかりにかけた場合、魂の解放を優先させるような発言をドン・キホーテにしている。

それでは、果たしてサンチョは強欲なのか、それともキリスト教徒として節制をより重んじているのか。つまり、二つをはかりにかけた場合、いかなる場合も魂の解放に重きが置かれるのだろうか。

この場合、サンチョの強欲さの化身を*ínsula*とし、ほかの欲（百エスクードの袋を拾ったり、ただで旅籠に宿泊しようとしたりといった場合）を考えないことにする。

まず、*ínsula*の領主になる前であるが、この場合は、キリスト教徒としての魂の解放を優先させているということは先ほど見たとおりである。

次に《島》で悲惨な目に遭い、領主であることを放棄してしまうときも、サンチョはキリスト教徒としての誇りを優先させている。以下は、ひどい体たらくのサンチョが、領主職を捨てて、ドン・キホーテのもとに従士として戻らんとする場面である<sup>139</sup>。

Abrid camino, señores míos, y dejadme volver a mi antigua libertad y dejadme que vaya a buscar la vida pasada, para que me resucite de esta muerte presente. Yo no nací para ser gobernador, ni para defender ínsulas ni ciudades de los enemigos que quisieren acometerlas. Mejor se me entiende a mí de arar y cavar, podar y ensarmentar las viñas, que de dar leyes ni de defender provincias ni reinos. Bien se está San Pedro en Roma; quiero decir, que bien se está cada uno usando el oficio para que fue nacido. Mejor me está a mí una hoz en la mano que un cetro de gobernador; y más quiero recostarme a la sombra de una encina en el

verano, y arroparme con un zamarro de dos pelos en el invierno, en mi libertad, que acostarme con la sujeción del cedés se queden con Dios, y digan al duque, a mi señor, que desnudo nací, desnudo hallo: ni pierdo ni gano;

さあ、皆の衆、道をあけておくんなさい。そして、昔の自由な生活に戻らせておくんなさい。どうかわしをこの生地獄から抜け出させ、昔の暮らしを探しにいかせてもらいたい。わしは領主になったり、攻め寄せてくる敵から島や市を守ったりするために生まれてきた男じゃねえ。わしには法律をつくったり、国や地方を治めたりするよりか、鍬や鋤で畑を耕したり、ぶどうの木の刈り込みや取り木をしたりすることのほうが、よっぽど性に合ってるよ。《サン・ピエトロ寺院はローマにあってこそ光り輝く》、つまりわしの言いたいのは、人にはそれぞれ生まれに合った仕事をするがいいってこと、わしの手には、領主の権威の杖よりか、鎌のほうがおさまりがいいってことなんだ。それに、わしを飢え死にさせようとしている性悪な医者にけちなものをあてがわれるよりか、ニンニクのたっぷり入った野菜スープをたらふく飲むほうがどんなに幸せか知れねえ。まったくの話、領主という重荷を背負いながら、上等のオランダ製のシーツにくるまって寝たり、黒貂の衣装を身にまとったりするより、夏は櫛の木陰で寝そべり、冬には厚手の羊の毛皮を着こんで、自由に、勝手気ままにしてるほうがよっぽどありがたいさ。まあ、お前さん方は、ここで楽しく暮らすがいいよ。公爵様には、こう言っといてくれる。サンチョは裸で生まれて、今も裸、損もしなけりゃ得もしねえってね。わしは一文なしでこの島を治めにきて、一文なしでこの島を出ていく。

マダリアーガは、このときサンチョが「哲学的心境に至った」と主張している。以下は、マダリアーガの論拠である<sup>140</sup>。

pero aquella última aventura del ataque a la ínsula con el vapuleo que le hacen pasar los desalmados familiares del Duque, acumulándose a las incomodidades y hambres que le impone el doctor Pedro Recio, le convencen de que el gobierno de una ínsula no es cosa tan descansada y muelle como él se lo imaginara. Al penetrarse de esta idea, reacciona

Sancho y se da cuenta de que en desear una ínsula no anduvo acertado. Esta sensación de desacierto, esa íntima humillación le inspiran aquel silencio tan elocuente de sus preparativos para dejar el gobierno sin previo aviso, escena rodeada de una atmósfera tan clara e impregnada de una emoción tan fina y verdadera.(...) Por este camino de esengaños llega Sancho a un estado de ánimo dominado por la filosofía que le lleva a la renuncia de las ambiciones vanas. Abrazando al rucio, testigo de su pasada sencillez, que había sido su pasada tranquilidad, el gobernador desgobernado vuelve a escudero andante.

島が襲撃されるというあの最後の事件で、一連の愚弄を演出する公爵の息のかかった者たちにひどい目にあわされた彼は、それまで領主付きの医師ペドロ・レシオによって押しつけられる飢餓状態といやがらせにほとんど参っていたことも手伝って、島の統治などというものは、自分が想像していたほどなま易いことではないと悟る。そして、この考えを反芻するうち、そもそも島を望むこと自体が不埒であったことに気づくのである。この挫折感、この密かな屈辱感によってもたらされるのが、あの雄弁この上ない沈黙であり、その沈黙のなかで、彼は突然の辞任と出立に向けての準備を整えるのである。(中略) こうした幻滅の道をたどることになったサンチョは、虚しい野心をみずから放棄するような、哲学的心境に到達する。そして自分の質素な過去一彼の平穩だった日々への証人である灰毛ロバの首をかき抱きながら、失格した領主はふたたび遍歴の従士にもどるのである。

マダリアーガは《サンチョの上昇》として、サンチョが野心に目がくらんでいた田舎者から、本来の古いキリスト教徒としての哲学的心境を持つ聖人へと変貌していったことを指摘している。この場合、哲学的的心境とは、物欲を持たないという意味で用いられていると考えてまちがいはないだろう。

マダリアーガの指摘するように、たしかにこのときサンチョは窮屈な領主であるよりも、自由な従士であることに重きを置いている。サンチョは、金にならないのなら従士をやめてやろう、ドン・キホーテを見捨ててやろうと考えていたこともあるので<sup>141</sup>、このときの意は並々ならぬものであったのだろう。

また Denys Armand Gonthier も、“*El drama psicológico del Quijote*”において、「サンチョはもはやエゴイストではなく、従順で寛大な人物になった」

と述べている。以下は、その引用である<sup>142</sup>。

Sancho, sobre todo el Sancho de la segunda parte, no es ya el personaje egoísta, ambicioso y grosero que dejó por primera vez la aldea anónima de la Mancha; se ha ido transformando en una criatura simpática, obediente bondadosa y hasta generosa.

サンチョはとくに後篇になると、ラ・マンチャ地方の無名の村を初めて後にしたときのような、エゴイストで野心高く、粗野な人物ではもはやなくなり、感じが良く従順で善良な、寛大ですらある人物へと変容していったのである。

このように、サンチョがドン・キホーテの従士であったときのように物欲や野心を優先させることなく、すべてをあきらめているため、無欲な人物として描写されている。しかし、領主職を辞める直後の心境はなるほど哲学的心境に至ってはいるが、それだけではないと推測できる箇所が多々ある。たとえば後篇第62章やつづく63章、65章で、サンチョがまだ野心家であることが分かる。

それは、後篇62章の台詞¿por ventura, cabeza, tendré otro gobierno? ¿Saldré de la estrechez de escudero? 「首どん、ひょっとして、わしがまた領主に返り咲くなんてことがあるだろうかね？ わしはみじめだったらしい従士の生活から抜け出せるかね？」<sup>143</sup>や、その直後の後篇63章にある記述、“y Sancho, aunque aborrecía el ser gobernador, como queda dicho, todavía deseaba volver a mandar y a ser obedecido; que esta mala ventura trae consigo el mando, aunque sea de burlas.” 「一方サンチョは、すでに述べたように、領主の職に嫌気がさしてやめたのであったが、それでもなお、もういちど人に命令し、服従されてみたいという願いを抱いていた。権力を握るということは、たとえそれが冗談によるものであったとしても、このような不幸な結果をもたらすものなのである。」<sup>144</sup>。また65章でサンチョがドン・キホーテに言った言葉“Y si bien se considera yo soy aquí el más perdidoso, aunque es vuesa merced el más mal parado. Yo, que dejé con el gobierno los deseos de ser más gobernador, no dejé la gana de ser conde.” 「まあ、よく考えてみると、いちばん痛い目にあったのはお前様（ドン・キホーテ）かも知れねえけ

ど、いちばんの貧乏くじを引いたのは、このおいらだね。たしかにおいらは、あの島の経験で、このうえ領主になる気は捨てたけど、伯爵になりたい気持まで捨てたわけじゃあなかったからね。」<sup>145</sup>からも、サンチョが領主職を手ばなしたことを後悔していることが分かるだろう。

以上のことから、サンチョが最後まで野心からは完全に解放されなかったと考えられる。サンチョが領主職を辞退した直後は、たしかに野心から完全に解放されていたと言えるが、その状態が維持されるわけではなく、二つの状態(野心と哲学的心境)を行ったり来たりしている。しかもその変化は、緩やかなものではなく、状況に応じてかなり急に变化するものだと言えるだろう。先に多くの研究者が指摘しているように、「曖昧な」存在なのである。

### 3 親愛と裏切り

#### 親愛

サンチョは当初、ドン・キホーテから島の領主にしてやると言われて、彼の従士になることを決心した。その後、主従は共に冒険に出かける。サンチョは、ドン・キホーテに対して、どのような感情を有していたのだろうか。

サンチョがドン・キホーテを慕っていたということはその行動から明らかである。また後篇第13章で《森の従士》に対して語った、ドン・キホーテへの評価からもうかがえる<sup>146</sup>。

digo que no tiene nada de bellaco, antes tiene una alma como un cántaro: no sabe hacer mal a nadie, sino bien a todos, ni tiene malicia alguna: un niño le hará entender que es de noche en la mitad del día, y por esta sencillez le quiero como a las telas de mi corazón, y no me amaño a dejarle por más disparates que haga.

おいらの主人にはずる賢さなんぞこれっぽっちもねえんだ。それどころか、あの人の魂がまるで水瓶の水みたいに澄んでいるから、誰に対しても悪いことなんかできないし、よいことばかりしようとなさる。底意地の悪いところなんか薬にしたくてもねえよ。あの人なら、それこそ子供でもまっ昼間を夜だと思いきませることができさ。それほど無邪気なもんだから、おいらは



あの人が自分の心の臓みたいにあおしく思われて、いくらばかげたことをしなさせても、見捨ててしまおうなんて気にはとてもなれねえのよ。

後篇第13章になり、ドン・キホーテをいかに慕っていたかがうかがえる重要な場面である。サンチョは、これ以前にも主人であるドン・キホーテを騙してはいるが、ドン・キホーテはそのようなことに思いもつかない。たとえば、後篇第10章で、サンチョが醜い田舎女をドゥルシネアに見立てたときも、ドン・キホーテは従士の言い分を信じた。このように純粋なドン・キホーテをサンチョが愛おしく思っていたことは、明らかである。

また、ドン・キホーテが、前篇第20章で不気味な音の正体をつきとめにくと言ったときも、サンチョはさめざめと泣き、“...pues cuando más vivas las tenía de alcanzar aquella negra y malhabada ínsula que tantas veces vuestra merced me ha prometido, veo que, en pago y trueco della, me quiere ahora dejar en un lugar tan apartado del trato humano.”「お前様が何度も何度も約束してくれなされた、あの運が悪くて不幸な島が、いよいよわがものになりそうだと望みがますますのってきたこの時になって、こともあろうに、人里から遠く離れたこんな侘しい場所においらを置き去りにしようとなさるんだものね。」<sup>147</sup>と、ドン・キホーテを思いとどませようと懇願している。

上記は“ínsula”という言葉が邪魔をして、まるでサンチョが強欲のためにドン・キホーテを見捨てまいとしているのではないかと考えられるかもしれないが、同じ章で“De nuevo tornó a llorar Sancho oyendo de nuevo las lastimeras razones de su buen señor, y determinó de no dejarle hasta el último tránsito y fin de aquel negocio.”「サンチョは善良な主人の情のこもった、悲しげな言葉を聴くと、またしても涙を新たにし、このたびの一件の最後まで、その決着がつくまで、主人を見捨てるようなことはすまいと心に決めたのである。」<sup>148</sup>と書かれており、サンチョが単に欲に左右されて見捨てまいとしたわけではないことがよく分かるだろう。

## 裏切り

しかし、サンチョはドン・キホーテに対し、つねに忠実で貢献的な態度をとっているわけではない。とくに、前篇においては、二人の関係は脆く、何度も

ドン・キホーテを見捨てようと考えている。

たとえば、前篇第18章、“Estábase todo este tiempo Sancho sobre la cuesta, mirando las locuras que su amo hacía, y arrancábase las barbas, maldiciendo la hora y el punto en que la fortuna se le había dado a conocer.”「この間サンチョはずっと丘の上にあって、主人のおこなうとんでもない狂気沙汰を見守りながら、いらだたしさのあまり、自分の顎鬚をかきむしり、運命が自分とドン・キホーテを引き合わせた時と場所を呪っていた。」<sup>149</sup>や、ドン・キホーテが羊の軍勢に突進した後、従士らしくドン・キホーテをいたわるサンチョだったが、運悪く主人の吐しゃ物を被ってしまったときのサンチョの心情、“Maldíjose de nuevo, y propuso en su corazón de dejar a su amo y volverse a su tierra, aunque perdiese el salario de lo servido y las esperanzas del gobierno de la prometida ínsula. 「彼はあらためてわが身の不幸を呪い、もう、これまでの給金や約束の島の領主になるという希望を棒にふるってもかまわない、今度こそ主人を見捨てて村に帰ろうと心に決め」<sup>150</sup>でいたことなどからも分かる。

また、サンチョはドン・キホーテを何度も騙しているのも、それも裏切りと言える。たとえば、ドン・キホーテがドゥルシネア姫へと届けるようにと渡した手紙を失くしてしまい、実際には彼女に会っていないにもかかわらず、手紙を渡したとドン・キホーテに報告している<sup>151</sup>。また、ドゥルシネアの家連れていくようにとドン・キホーテから言われたときも、道にいた醜い田舎女を主人の思い姫に見立てて騙した<sup>152</sup>のも事実である。

この二例は、いずれも、サンチョの愚鈍さと臆病さがまじり合ったことから派生したものである。二例は因果関係を持っている。まずドゥルシネアに手紙を渡したと嘘をついたことにより、「手紙を渡した＝家を知っている」ということになった。そして家に連れていけとドン・キホーテに言われ、苦肉の策として、醜い田舎女をドゥルシネアだと思い込ませるために一芝居うったのである。

ただし、この二例は、のちに記すように、ある一点において異なっている。それは、手紙をなくしたくだけで、サンチョは、ドン・キホーテに罪悪感を持ってたどたどしく報告しているのに対し、醜い田舎女をドゥルシネアと呼び一芝居うっているときには、サンチョは生き生きとしている。サンチョは、ドン・キホーテを騙すことに少なからず快感を得ていくのである。

公爵夫人に事のくだりを説明したサンチョであったが、公爵夫人はサンチョをも抱き込み、ドゥルシネアの魔法を解くためには、サンチョが3300回鞭打ちをされなければならないと信じ込ませることに成功する。しかし、その鞭打ちにおいて、サンチョは主人であるドン・キホーテを騙している。たとえば、鞭打ちを迫るドン・キホーテに襲いかかったり<sup>153</sup>、自らを鞭打たず木を鞭打って騙し、金を要求したり<sup>154</sup>しているのである。

この鞭打ちをめぐる主従の関係は非常に興味深い。なぜなら、ドン・キホーテの思い姫を元の美しい姿に戻すには、サンチョの力が不可欠だからである。つまり、この件に関してはドン・キホーテ一人だけではどうにもならず、サンチョの力に頼らざるをえないからである。

さらに、サンチョはドン・キホーテを慕ってはいるものの、いつでも制御可能なわけではないため、単に主従だからという命令では、鞭打ちを了承しないのである。

そのため、鞭打ちを迫るドン・キホーテにサンチョは襲いかかり、厭だと言う態度を露わにしている。さらに、強欲なサンチョは、鞭打ち一回につき、金銭的要求をしてくる。このとき、なぜドン・キホーテがサンチョの提案に賛成したかの言及は避けるが、「金は出すから是非鞭うってくれ」という切なる願いが垣間見える。それを逆手にとったサンチョは、一人で鞭うってくると森に向かうと、哀しそうな叫び声をあげながら、木の幹を打つのである。

しかし、ドン・キホーテはサンチョの狡猾な嘘に気付くことはない。痛いのであれば、もう今日はこの辺にしておいたほうが良いと、従士を優しく労わるのである。

サンチョは、ドン・キホーテとの関係が以前までのものとは違うと理解した上でこれらの行動を起こしている。つまり、立場が上昇したこと、さらに、楽をして稼ぎたいと言う楽観的な物欲から、ドン・キホーテを騙している。

のちにくわしく見ていくが、ドン・キホーテの臨終でさえも、実は鞭打ってなかったのだからその分は必要ない、などと明かすことはない。それは、単に打ち明けることを忘れていたとは考えられない。なぜなら、遺書のときに給金の話をしている上に、ドン・キホーテが、鞭打ってくれた分はサンチョに払うようにと、皆の前で公言するときも口をつぐんだままだからである。

## 拮抗

では、サンチョは、アルトゥイズムとエゴイズム、どちらを優先させるのか。

このことがもっとも鮮明に描かれている章がある。それは、ドン・キホーテの臨終に臨む、後篇最終章である。サンチョ・パンサは、ドン・キホーテに対して、二つの相対する態度をとっている。一つは、遺産をもらえることを喜ぶ打算（エゴイズム）であり、もう一つは、死なないでほしいという深い愛情（アルトゥイズム）である。まず、彼の打算（エゴイズム）に着目してみよう<sup>155</sup>。

Y en tres días que vivió después deste donde hizo el testamento, se desmayaba muy a menudo. Andaba la casa alborotada; pero con todo, comía la sobrina, brindaba el ama, y se regocijaba Sancho Panza; que esto de heredar algo borra o templa en el heredero la memoria de la pena que es razón que deje el muerto.

ドン・キホーテは遺言作成の日から三日のあいだ生きのびたが、その間、何度も発作をくり返したので、家のなかには常にあわただしい雰囲気につつまれていた。それでも姪はよく食べ、家政婦はぶどう酒をよく飲んだし、サンチョはどことなく嬉しそうにしていた。何か遺産を受け取るという喜びは、死者を思いやって人が感じる、ごく自然な悲しみをやわらげたり、かき消したりするものだからである。

このときのサンチョは、ドン・キホーテが死ぬかもしれないという哀しさよりも、遺産を受け取れるかもしれないという喜びのほうを優先させ、その喜びなり期待なりを表情に出している。

上記のみを見れば、サンチョはみずからのエゴイズムにより重きをおいているようにも感じられる。

しかし、次にドン・キホーテに対する深い愛情（アルトゥイズム）を感じさせる個所を引用してみよう<sup>156</sup>。

Mire no sea perezoso, sino levántese desa cama, y vámonos al campo vestidos de pastores, como tenemos concertado: quizá tras de alguna mata hallaremos a doña Dulcinea desencantada, que no haya más que ver. Si es que se muere de pesar de verse vencido, écheme a mí la culpa,

diciendo que por haber yo cinchado mal a Rocinante le derribaron; cuanto más que vuesa merced habrá visto en sus libros de caballerías ser cosa ordinaria derribarse unos caballeros a otros, y el que es vencido hoy ser vencedor mañana.

さあ、お前さま、そんなにぐったりしてねえで、ベッドから起き上がり、約束どおり羊飼いの格好をして野原に出かけようじゃありませんか。そうすりゃあ、魔法から逃れた、それはそれは美しいドゥルシネーア姫が、どっかの草むらから、ひょっこり姿をあらわさねえともかぎらねえだ。もし、一騎打ちに敗れたのが無念で死になさるちゅうことだったら、あれはおいらのせいにしてくれろ。おいらが、ロシナンテの腹帯をしっかりと締めなかったから、お前さまが落馬し、それで打ち負かされたと思いなさればいいだ。おまけに、お前さまも騎士道物語の書物で読みなすったにちがいねえだが、騎士と騎士が倒したり倒されたりするのはあたりめえのことで、今日負けたやつがあしたは勝ったりするもんですよ。

上記からは、ドン・キホーテからの遺産をあてにしているようなそぶりはまったく見られない。そのような打算はまったく働いておらず、どうにかしてドン・キホーテに生き延びてほしい、元気になってほしいと切に、涙をながしながら訴える、善良な農夫の姿が浮かんでくるだろう。

以上より、最終章がサンチョ・パンサの二面性を示す実に重要な章であることが分かる。『ドン・キホーテ』のクライマックスである、ドン・キホーテの臨終でさえも、サンチョの二面性は姿を現す。

後篇第74章では、ドン・キホーテの死という悲劇性と、その死を前にした楽観的な傍観者たちの創り出す喜劇性が融合し、サンチョ・パンサの、愛する者の死を悼むアルトゥイズム（愛情）と、遺産を譲り受けることへのエゴイズム（打算）がみごとに調和しているのである。そしてエゴイズムは先に見た強欲と、アルトルイズムは「隣人を愛する」キリスト教徒の特徴と関連しているのである。

サンチョは、以上のように、打算と愛情がみごとな均衡を保つことのできる、「曖昧な」存在だと言うことができるのではないだろうか。

#### 4 現実直視と非現実直視

## 現実直視

サンチョは、多くの研究者たちから、理想主義者のドン・キホーテと比較され、現実主義者として扱われてきた。たしかに、当初は、サンチョは魔法の存在を信じておらず、現実をありのままと捉えてきた。ドン・キホーテが、巨人の再来だと言って風車に突っ込んで行こうとするのを、最後まで、風車なのだからやめるように、と諫言していた。同様に、ドン・キホーテが羊の大群を、軍勢だと言い張って突進しようとしたときも、サンチョはドン・キホーテをとめている。元々、騎士道物語を読みふけたためにドン・キホーテは頭がおかしくなったのだから、騎士道物語を読んでいるわけでもないサンチョからすれば、風車は風車だし、羊の大群は羊の大群と映っていたのは当然のことと言えるだろう。

サンチョが、きちんと現実を直視できていたというのは、マンブリーノの兜に関する従士の抗議からも明らかである。床屋の金盥をマンブリーノの兜だと主張し続けるドン・キホーテに対し、従士は“no puedo sufrir ni llevar en paciencia algunas cosas que vuestra merced dice”「旦那さまの話には、時々どうにも我慢のならねえ、聞くに耐えられねえところがある」<sup>157</sup>と抗議したうえで、ドン・キホーテがそんな状態なら、主人が王国や帝国を手に入れるとといった話まで虚妄のように思えるとぼやいている。

このときサンチョは、金盥をマンブリーノの兜と見なすドン・キホーテに不信の念を抱いている。しかし、主人がサンチョにした約束そのものには何ら疑問や不信を感じていない。ドン・キホーテの謳う騎士道精神がいまだ存在し、恩恵により“ínsula”（島）が与えられると信じている。

島はサンチョにとって、冒険に出るきっかけとなっているということは見えてきた。だから、島が手に入らないのではという不安が擡げれば、故郷に帰ろうと考えるのである。司祭が騎士道物語の内容を信じ込んでいる旅籠の主人を窘めているのを耳にしたサンチョは、“quedó muy confuso y pensativo”「すっかりうろたえ、不安にかられて考えこんでしま」<sup>158</sup>う。そして、“propuso en su corazón de esperar en lo que paraba aquel viaje de su amo y que si no salía con la felicidad que él pensaba, determinaba de dejalle y volverse con su mujer y sus hijos a su acostumbrado trabajo.”「主人との今度の旅の成り行きを見守って、もしそれが期待しているような首尾よい結果をもたらさなかったら、思い切って彼を見捨て、妻子のもとに戻って、また慣れ親しんだ仕事

をしよう」<sup>159</sup>と決心するのである。

このようにサンチョは、ドン・キホーテと違い、きちんと現実を直視している。それゆえ、ドン・キホーテの理想主義と比較され、現実主義と言われてきたのである。しかし、サンチョは本当に現実を直視し続けていたのだろうか。前述のように、サンチョは島という自らの野望のために、現実を直視しないようにしている。一つにはサンチョの欲によるものだということとはたしかだ。また、ドン・キホーテから影響を受けた結果だと考えられる。これはサンチョ・パンサのドン・キホーテ化と呼ばれている。この現象については次章で詳しく見ていきたいが、まず、サンチョの非現実直視的態度について見ていくことにしよう。

### 非現実直視

上で見たように、サンチョは当初、魔法の存在など信じていなかった。ただ、当初から騎士道に関する表面的なものだけを信じていた。たとえば、サンチョはドン・キホーテが言うままに、騎士道精神がいまだ存在すると思っていたし、また、遍歴の騎士という「職業」もたしかに存在し、その従士になれば、いつか恩恵として島が与えられると信じて疑わなかったのである。

冒険を共にし始めた段階では魔法の存在を否定していたサンチョだが、ドン・キホーテと行動を共にする内に、魔法の存在を信じるまでに至る。

たとえば、サンチョは前篇第35章で、魔法の存在を肯定していることが分かるだろう。サンチョは、ドン・キホーテと巨人の戦いに加勢してくれと、司祭たちに頼む。司祭たちは、サンチョに急かされて部屋に行く。やはりドン・キホーテはぶどう酒の革袋を切り裂いているだけで、巨人などいない。巨人などいないではないかと言う司祭たちに対して、サンチョは、主人が巨人の首を切り落とすのを、“por mis mismísimos ojos”「自分の目で」確かめたにもかかわらず、“encantamento”「魔法」のせいで見つからないと言い、あるはずのない巨人の首を探して部屋中を見てまわる<sup>160</sup>。

一方、ぶどう酒を損したことに激怒した宿の亭主は、ドン・キホーテが革袋を引き裂いていただけだとなぜ分からないのかと、サンチョに詰め寄る。そのときサンチョは、自分は何も分からないが、ドン・キホーテが切り落としたはずの巨人の首がないので伯爵領が遠のいてしまったとぼんやり答える。

このように、魔法の存在を肯定し、魔法に依存するサンチョの態度は、その結果、サンチョに利益がもたらされるかどうかにかかっているとと言えるだろう。

つまり、サンチョが前篇第35章で魔法や巨人の存在を肯定しているのは、ドン・キホーテが巨人を倒せば、ミコミコーナ姫から伯爵領を授かれるからである。伯爵領が欲しいばかりに、サンチョは魔法の存在を肯定化したのである。だからこそ、ミコミコーナ姫がただのドロテアに変わったと気づいたときに、サンチョの《魔法》が（ミコミコーナ姫に関することだけであるが）解けるのである。なおも「巨人」と戦い、首をはね、「血」を流させたというドン・キホーテに対して、いまいましように「巨人は革袋で、血は赤ぶどう酒だった」と反論し、非難している。

同様に、後篇第33章でドン・キホーテを迫害する魔法使いの仕業だという公爵夫人の言い分を信じているのは大変興味深い。

ドン・キホーテは、後篇第10章でドウルシネアの館に案内しろとサンチョに詰め寄る。しかしサンチョは、彼女宛の手紙を失くしてしまったあと、司祭たちと合流したものだから、その館がどこにあるか知るはずもない。ドン・キホーテの執拗な要求に困り果てたサンチョは、一旦主人の元を離れてから、色々なことに思いをめぐらせた揚げ句、主人の狂気を逆手にとって一芝居うってやろうと考える。サンチョが主人の元に戻ろうとしたとたん、驢馬に乗った三人の百姓女が近付いてきた。サンチョは彼女たちをドウルシネアと二人の侍女に仕立てることを思いつき、彼女たちの前で美辞麗句を並べたて、ドン・キホーテを困惑させる。

このとき、サンチョは「自らの」悪知恵でもって、ドウルシネア・デル・トボーソの代役を作り出している。その後、モンテシーノスの洞穴やライオンの冒険などと共に、この話を公爵夫人に語る。ドウルシネア・デル・トボーソをみずから作り出し、ドン・キホーテを謀ったのだ、と。すると公爵夫人は、それはすべてドン・キホーテの邪魔をする悪い魔法使いのせいだ、善良なサンチョが主人をだますなどありえない、悪い魔法使いがそう言わせたのではないかとからかう。サンチョは公爵夫人の言い分を全面的に受け入れ、「なるほど、自分が作り出すにすれば、気の利いた嘘だから、魔法使いの仕業に違いない」と結論づけるのである。

こうして、後篇第10章で起こったことは、サンチョの頭の中で、悪い魔法使いの仕業として書き換えられ、その後、醜くなったドウルシネアのために鞭打ちが課される展開となる。

このように、ドン・キホーテが最初に言っていた魔法の存在を全否定するこ



とはなくなり、部分的であるものの、サンチョはドン・キホーテと同様に魔法の存在を信じるようになる。

## 拮抗

魔法の存在を信じさせるにいたった最大で最初の理由は、サンチョの島への渴望である。それは前篇第35章からも明らかである。

前篇第35章で、サンチョはなぜ魔法の存在を肯定したのか。ドン・キホーテが巨人を倒すということは、ミコミコーナ姫とドン・キホーテが結婚することを意味する。そして、彼らが結婚するということは、サンチョが伯爵領を手にするということに結びつくのだ。早く領土を手に入れたいというサンチョの気持ち、魔法や巨人の存在を肯定する鍵となっていたのである。

また、対話者によってもその態度は変化する。たとえば、公爵夫人やミコミコーナ姫（だとサンチョが信じていたあいだ）など、権力者が魔法の存在を主張したさい、サンチョはいとも簡単にそれを信じてしまう傾向がある。

最後に、ミコミコーナ姫だと信じていたときと、彼女がただの平民に近い貴族だと分かってしまったあとのサンチョの態度の豹変ぶりを見てみよう。ここには、もはやミコミコーナ姫を崇めていたサンチョはいない。サンチョはミコミコーナ姫という夢幻を見失う。その地位もさして高いものではないと分かったときの落胆ぶりは相当なものである<sup>161</sup>。

以下は、ドロテアがフェルナンドと抱き合い、ついに愛を確かめ合ったときの皆の反応である<sup>162</sup>。

Y diciendo esto, la tornó a abrazar y a juntar su rostro con el suyo, con tan tierno sentimiento, que le fue necesario tener gran cuenta con que las lágrimas no acabasen de dar indubitables señas de su amor y arrepentimiento. No lo hicieron así las de Luscinda y Cardenio, y aun las de casi todos los que allí presentes estaban; porque comenzaron a derramar tantas, los unos de contento propio, y los otros del ajeno, que no parecía sino que algún grave y mal caso a todos había sucedido. Hasta Sancho Panza lloraba, aunque después dijo que no lloraba él sino por ver que Dorotea no era, como él pensaba, la reina Micomicona, de quien él tantas mercedes esperaba.

ドン・フェルナンドはこう言いながらドロテアをふたたび強く抱きしめ、深い情愛をこめて自分の顔を彼女の顔にすり寄せた。彼の愛情と後悔の念をありありと示す涙がどっとほとぼしり出たので、それを抑えるのに、大きな自制心を行使する必要があった。しかしルシンダとカルデニオ、それにその場にいたほとんどすべての人たちの涙にはそうした自制心が向けられることはなかったので、彼らの目からは涙があふれ放題になった。ある者は自分みずからの喜びゆえに、またある者は他人の喜びでもらい泣きしたものだから、その場の光景ときたら、あたかも何か、一同に重大な災難が降りかかってもしたかのようなありさまだった。サンチョ・パンサまでもが泣いた。もっとも後になって本人が語ったことによれば、彼が泣いたのは、ドロテアが実は、あれほど多くの恩恵を期待していた女王のミコミコーナではないことが判明したからであったというが。

ここから、サンチョが、ルシンダやカルデニオたちとは違い、感動からむせび泣いていたわけではないことが分かるだろう。サンチョにとっては、ミコミコーナ姫はドン・キホーテと結婚してくれる、また、自分に領土を与えてくれる神々しい存在であった。しかし、この場面で、ミコミコーナ姫は単なる農民の娘ドロテアであったことに気付くのである。サンチョの落胆が相当なものだったのは当然である。

以上のことから、サンチョは魔法の存在を信じたり信じなかったりしていることが分かった。そしてそれにはサンチョの強欲が絡んでおり、それに目がくらむと現実を直視できなくなり、その幻想がひとたび覚めると、また元の現実主義者のサンチョ・パンサに戻る。そして、この非現実直視と現実直視は、『ドン・キホーテ』の終わりまで螺旋階段のように重なりながら展開し、行きつ戻りつという可逆性をつねにはらんでいるのである。

## 5 臆病と勇敢

### 臆病

次に、サンチョが本当に臆病なのかを考察していこう。われわれには、彼が臆病者だというイメージがある。しかしそのじつ、ドン・キホーテの言葉に拠っているところが大きい。ドン・キホーテは何度も、サンチョが臆病者だと言

っている。たとえば、前篇第18章でも、ドン・キホーテはサンチョを臆病ものだと詰っている。このように、サンチョを臆病で気の小さい農民だと読者もとらえ、勇敢なドン・キホーテと臆病なサンチョという図式が出来上がってしまった。しかし、はたして、サンチョはドン・キホーテのいうように、臆病なだけの従士なのであろうか。

## 勇敢

サンチョは、決して臆病でつねに日和見的な態度をとっているわけではない。マダリアーガは、サンチョが決して臆病なのではないと論じている。そこで、マダリアーガは、上で述べたように、サンチョが臆病だと考えられているのは、ドン・キホーテの台詞が大きいと主張する<sup>163</sup>。

Pese a estas y otras escenas por el estilo, Sancho tiene en las letras reputación de cobarde. Este error se debe en parte al propio Don Quijote, que no pierde ocasión de acusar a su escudero de falta de ánimos. Pero sería pecar de incauto y de injusto para Sancho el tomar al pie de la letra todo lo que Don Quijote dice de su fiel criado. (...) Sus frecuentes alusiones a la cobardía de Sancho son otras tantas afirmaciones indirectas de su propia valentía.

これらの場面(カルデニオの物語が狂気の発作で中断された折の彼と山羊飼いの喧嘩やドゥルシネーアの魔法を解かせようとサンチョへの鞭打ちを急かしたドン・キホーテに手向かう場面など)、ならびに同種の趣をもつ数ある場面にもかかわらず、サンチョは文学においては臆病者ということになっている。この偏見に一役買っているのがほかならぬドン・キホーテであって、彼はことあるごとに従者の勇気の欠如を指弾せずにはおかない。しかし、ドン・キホーテが自分の忠実な召使いについて口にすることをすべて鵜呑みにしたのはナイーブすぎるであろうし、第一サンチョに対して不公平というものである。(中略)彼がサンチョの臆病さにちよいちよい言及するのは、それだけ頻繁にみずからの勇気を間接的に誇示していることになるからである。

マダリアーガはこのように述べた上で、サンチョが『ドン・キホーテ』において、幾度となく実は単なる臆病者ではないことをわれわれに見せてくれているのだと続けている<sup>164</sup>。

Sobre este hervor de coraje animal lleva Sancho la tapa de su buen sentido, que le hace ser, no combativo, sino pacífico. La lucha en sí no es agradable. Sancho está dispuesto a luchar, pero sólo cuando hay razón para ello, es decir, causa. Frente a su amo, que pelea por gusto y por vocación de caballero desfacedor de entuertos. Sancho sostiene que sólo peleará cuando le vaya algo en ello, la bolsa, la vida o lo que sea. Pues, a medida que va creciendo en estatura moral, van aumentando en él los motivos de lucha. A este rasgo de su carácter se deben no pocas de las ocasiones en que pasa por cobarde a los ojos de su amo. Añádase la prudencia del hombre hecho a las cosas de la vida, que rehúye la lucha excesivamente desigual, prefiriendo no habérselas con fuerzas superiores, ya por el número, ya por la organización o la ley.

(サンチョは)煮えたぎるような動物的勇気を秘めながらも、その上に健全な常識で蓋をしているので、普段は闘争的にならず温厚なのである。戦うことは、それ自体決して愉快なことではない。サンチョには戦う用意がある、しかし、彼がそうするのは、そこに理があるとき、すなわちそうするに値する理由があるときに限られる。気まぐれや騎士としての使命感で戦ったりする主人とは違って、サンチョが戦うのは、そうすることによって何かが得られると思ったときだけである。得られるものは金銭でも、自分の生命でも、何でもいいのであるが、とにかく彼が論理的に成長するにつれて戦う理由も増えてくる。主人が彼のことを臆病だと誤解する場合の多くは、彼のこうした打算性に起因しているのである。しかも、実生活の経験豊かな人間の慎重さを備えた彼は、圧倒的に不釣り合いな戦いを避けるだけでなく、数においても、組織においても、あるいは法的にも、自分より上位の勢力とは関わりを持たずとしない。

たとえば、ドン・キホーテは前篇第21章で、道を歩く騎士（じつは床屋）

から戦利品としてマンブリーノの兜（じつは金だらい）を奪取した。その床屋は運命のいたずらにより前篇第44章で、ドン・キホーテ達が宿泊していた旅籠に入ってくる。サンチョの姿を認めた床屋は、彼を泥棒だと罵り、奪った金だらいと荷鞍、馬具を返せと怒鳴る。そのときサンチョは、片方の手でしっかりと荷鞍をつかんだまま、もう一方の手で相手の顔面に一撃をくらわせた。床屋も必死に応戦する。サンチョは、床屋が自分を“salteador de caminos”「ごろつき」「追い剥ぎ」呼ばわりしたのが我慢ならないのである。

サンチョはこのとき、自分のものだと思っていたものが奪われるのに我慢がならない。なぜならそれは、盗難品ではなく、戦いに勝利した戦利品なのだから、自分が持つのが正当なのだと主張しているのだ。この現象は、のちの章で見ていくように、サンチョ・パンサのドン・キホーテ化の一部だと思われる。つまり、もともと無益な戦いを好まないサンチョだが、ドンキホーテと共に旅をしていくことによって、だんだんと従士としての自覚を持ち始め、その従士としての誇りを傷つけられたときに、好戦的になるのではないかというものである。筆者は、この章においてサンチョが応戦したのは、単に金盃というそこそこ高価なものが自分の手から離れていくことに怒ったのではないと考えている。そのため、上でマダリアーガが言うように、騎士としての使命感で戦うドン・キホーテと異なり、サンチョが戦うのは、「そうすることによって何かを得られると思ったときだけ」だというのは正当な意見ではないと思われる。

たとえば前篇第24章で、ドン・キホーテから罵詈雑言を浴びせられたカルデニオが、ドン・キホーテに殴りかかる場面がある。そのときの、サンチョの反応は以下のとおりである<sup>165</sup>。

Sancho Panza, que de tal modo vio parar a su señor, arremetió al loco con el puño cerrado, y el Roto le recibió de tal suerte, que con una puñada dio con él a sus pies, y luego se subió sobre él y le brumó las costillas muy a su sabor.

主人がこんなひどい仕打ちを受けるのを目の当たりにしたサンチョ・パンサは、拳を固めて狂気の若者に襲いかかったが、身構えていた《檻褻の騎士》の強烈な拳骨の一撃を浴びて、逆に相手の足もとに伸びてしまった。しかもカルデニオは、すかさず倒れた男の上に乗ると、そのあばら骨を思う存分に踏みつけたのである。

このようにサンチョは立派に主人を守ろうとし、カルデニオが森に逃げ込んだあとに、「最初からカルデニオが正気を欠いていると教るべきではなかったのか」と山羊飼いを詰っている。

この場面でサンチョが勇敢さを見せても、物質的なことは何も得られない。それこそ殴られ損である。それでも、サンチョがカルデニオの強襲からドン・キホーテを守ったのは、のちに記述するドン・キホーテへの愛情と、サンチョ自らの勇敢さが調和した結果なのであろう。

以上のように、サンチョが臆病なだけでないことを確認したが、それではサンチョは、臆病な性格なのか、それとも勇猛な性格だと言えるのだろうか。

## 拮抗

おそらく、この相反する特徴が忙しなく拮抗するのは後篇第14章の《森の従士》との騒動であろう。

《森の従士》はサンチョに、主人たちだけが決闘するのではなく、自分たちも形だけはその決闘に加わらなければならず、袋を手にして半時間ほど殴り合いをするべきだと提案する。サンチョは、それに応えて“*No seré yo tan descortés ni tan desagradecido, que con quien he comido y he bebido trabe cuestión alguna, por mínima que sea*”「それにおいらは、いっしょに飲み食いした人間を相手に事を構えるほど、ぶしつけな恩知らずになるつもりはねえ。」と、その申し出を断る<sup>166</sup>。

すると、《森の従士》はさらなる提案をする<sup>167</sup>。

*Para eso, yo daré un suficiente remedio: y es que antes que comencemos la pelea, yo me llegaré bonitamente a vuesa merced y le daré tres o cuatro bofetadas, que dé con él a mis pies: con las cuales le haré despertar la cólera, aunque esté con más sueño que un lirón.*

喧嘩の理由ならわしがちゃんと手はずをととのえるから心配御無用。つまり、戦いをおっぼじめる前にそっと兄さんのそばに寄って、三つか四つしたたかなびんたをくらわせて、足元にのしちまうのよ。そうすりゃ、たとえ兄さんが冬眠鼠よりぐっすり眠りこけていたところで、腹のなかの怒り虫が目を覚

ますことは請け合いだね。

《森の従士》は、サンチョが自分に遠慮していると考えたので上のような提案をしたわけだが、サンチョは怒って《森の従士》に以下のように反論する<sup>168</sup>。

Contra ese corte sé yo otro, que no le va en zaga: cogeré yo un garrote, y antes que vuesa merced llegue a despertarme la cólera haré yo dormir a garrotazos de tal suerte la suya, que no despierte si no fuere en el otro mundo; en el cual se sabe que no soy yo hombre que me dejen manosear el rostro de nadie.

おいらもそれに負けねえ手を打つまでよ。つまり、太い棒を探してきて、あんたがおいらの腹の虫を起こしにくる前に、あんたの腹の虫をその棒で叩きのめし、あの世でなけりゃ目覚めねえくらいに、しっかり眠らせちゃうのさ。あの世じゃ、おいらがこの顔をこづかれて黙っているような男じゃねえことはよく知られているからね。

このように、《森の従士》に強気な態度を取っていたサンチョだが、その後すぐに臆病さが姿を見せる。ドン・キホーテが《森の騎士》と決闘するさいに、サンチョは初めて《森の従士》の大きな鼻を見ることになり、大そう脅えてしまう。サンチョはドン・キホーテに“suplico a vuestra merced, señor mío, que antes que vuelva a encontrarse me ayude a subir sobre aquel alcornoque, de donde podré ver más a mi sabor, mejor que desde el suelo, el gallardo encuentro que vuesa merced ha de hacer con este caballero”「旦那様、お願いだから、合戦がおっばじまる前にちょっと手を貸して、おいらをあのコルク櫓へ登らせておくんない。お前様があの騎士と交えなざる勇ましい戦いを、心ゆくまでじっくり眺めるにゃ、地面の上よりもあそこのほうがよさそうだからね。」<sup>169</sup>と懇願している。

マダリアーガいわく、“Sancho con miedo verdadero, provocado por un peligro desconocido, y para él sobrenatural.”「(サンチョは) 未知のものや超自然的な現象を前にすると、震えあがる。」<sup>170</sup>ので、普通の顔だと思ってい

た《森の従士》の大きすぎる鼻を見て、急に恐ろしくなるのだ。

ただ、このとき、《森の従士》は変装しているため、鼻に飾り物をしているだけであり（のちに、ドン・キホーテが《森の騎士》に勝利すると、《森の従士》はドン・キホーテ主従の同郷者であるトメ・セシアルだと判明する。トメ・セシアルはみずから偽物の鼻をとり、自分が《森の従士》などではないことを主従に説明する）、その意味においては未知なものでも超自然的な現象でもない。

しかし、サンチョは、ドン・キホーテと行動を共にするうちに、主人が謳う騎士道物語世界に浸かり、“ドン・キホーテ化”している。そのため、偽物の大きな鼻が偽物であると判断できなくなり、サンチョの脳内では、未知で恐ろしいものとして変換されるのだ。

サンチョはこのように、勇敢さと臆病さを併せ持っており、さらにその二つの特徴はたとえ同じ章であっても併存し、刻一刻とその性質を変化させている。サンチョの勇敢さは、後述する“サンチョ・パンサのドン・キホーテ化”の一つである騎士道精神の高揚と、ドン・キホーテへの愛情（アルトゥイズム）、または一部強欲が混じり合っている。

さらに、サンチョの臆病さは、生来の争いごとを好まぬ性格に起因するものであるが、それに加えて、ドン・キホーテ化したことも原因の一つに数えることができる。

なぜなら、サンチョは《森の従士》とのやりとりにおいてもはや彼の鼻が本物であるか偽物であるかの判別がつかなくなっている。大きな鼻を異常に恐れ、ドン・キホーテに「より安全な」場所に自分を連れていくように頼むのである。

このように、サンチョのドン・キホーテ化は、「臆病」と「勇敢さ」という相反する二つの特徴を刺激する奇妙な誘引剤になっている。

## 6 愚鈍と知恵

### 愚鈍

サンチョの愚鈍さは、随所に見られる。たとえば、前編第20章で披露した語り口調や、その話の終わりがたを例に挙げることができる。

ひとつ楽しい話でもして、ドン・キホーテの気晴らしになればとサンチョは次のように話を始める<sup>171</sup>。



Digo pues, que en un lugar de Extremadura había un pastor cabrerizo, quiero decir que guardaba cabras; el cual pastor o cabrerizo, como digo, de mi cuento, se llamaba Lope Ruiz; y este Lope Ruis andaba enamorado de una pastora que se llamaba Torralba; la cual pastora llamada Torralba era hija de un ganadero rico y este ganadero rico...

かつてエストレマドゥーラのある村にひとりの羊飼いが、といっても彼が番をしていたのは山羊だから、むしろ山羊飼いと言うべきでしょうが、おいらの話の中心人物のこの羊飼いだか山羊飼いだかは、その名をロペ・ルイスといつて、このロペ・ルイスはトラルバという名の羊飼いの娘に首ったけだった。このトラルバと呼ばれた羊飼いの娘は裕福な牧畜業者の娘で、この裕福な牧畜業者は…

サンチョの語り口には回りくどいところがあり、伏線となっていないような仔細なことまで気にしている。また語彙も少ないことが分かるだろう。たとえば、“como digo, de mi cuento”「おいらの話の」では、“como digo”は余計であると言わざるを得ない。“un pastor cabrerizo, quiero decir que guardaba cabras;”「ひとりの羊飼いが、といっても彼が番をしていたのは山羊だから、むしろ山羊飼いと言うべき」“el cual pastor o cabrerizo”「この羊飼いだか山羊飼いだか」というのも、聞き手からすれば別にどちらでもよさそうなことである。そもそもcabrerizoは名詞なのだから、pastorは別に必要もない。

上記の問題はもうひとつあり、同じ言葉を何度も繰り返しているという点だ。un pastor cabrerizoと言っておいて、pastor o cabrerizoと、もういちど同じ言葉の繰り返しをおこなっている。同じく“una pastora que se llamaba Torralba”「トラルバという名の羊飼いの娘」“la cual pastora llamada Torralba”「このトラルバと呼ばれた羊飼いの娘」、 “un ganadero rico”「裕福な牧畜業者」“este ganadero rico”「この裕福な牧畜業者」のように二回ずつ繰り返していく。

これにはドン・キホーテも “Si des a manera cuentas de tu cuento, Sancho, repitiendo dos veces lo que vas diciendo, no acabarás en dos días; dilo

seguidamente, y cuéntalo como hombre de entendimiento, y si no, no digas nada” 「お前がそんなふうに、なんでも二度ずつくり返しながら話した日には、二日かかっても終わらんぞ。いま少しすつきりと、分別ある人間らしく話してはどうじゃ。」とサンチョを詰っている<sup>172</sup>。

以上を踏まえれば、この内容に五十九語使う必要はなく、*En un lugar de Extremadura había un cabrerizo, que se llamaba Lope Ruiz; Andaba enamorado de una pastora que se llamaba Torralba; Ella era hija de un ganadero rico y él...*と、半分以下の二十五語に抑えることができることが分かるだろう。

サンチョはドン・キホーテの注意を受け流し話を続ける。羊飼いが山羊を川に渡すという場面になるとサンチョは、渡していく山羊の数をちゃんと数えておいてくれという。そして、話が中盤にさしかかったところでドン・キホーテにこれまでに渡ったのは何頭なのかと問う。そんなもの数えているわけがない、と答えるドン・キホーテに、それではこの話の先を続けることはもうできないという。驚くドン・キホーテにサンチョは “*así como yo pregunté a vuesa merced que me dijese cuántas cabras habían pasado, y me respondió que no sabía, en aquel mismo instante se me fue a mí de la memoria cuanto me quedaba por decir, y a fe que era de mucha virtud y contento.*” 「おいらがお前様に、何頭の山羊が渡りましたかって聞いたら、お前様が知らねえと答えなすったんで、まさにあの瞬間に、おいらの頭の中から、これから喋ろうと思っていたことがそっくり消えちまったってわけですよ。まったくの話、たいそうためになる愉快的話だったんですけどね。」とうそぶく<sup>173</sup>。

ドン・キホーテは “*una de las más nuevas consejas*” 「世にも珍しい話」で “*jamás se podrá ver ni habrá visto en toda la vida*” 「語り口も締めくくり方も（中略）見たことも聞いたこともないもの」だが “*no esperaba yo otra cosa de tu buen discurso*” サンチョの「結構な分別からして、これくらいのことを予想しなかったわけではない」と呆れて言っている<sup>174</sup>。

ドン・キホーテは当初サンチョのことを “*de muy poca sal en la mollera*” 「ちょっとばかり脳味噌の足りない男」<sup>175</sup>と評していたように、愚鈍な部分が大いにある。語り口や、*ínsula*をいつか統治できると信じ込んでいた点からも明らかである。

しかし、これらは仕方のないことだ。たしかに、*ínsula*に関して言えばサン

チョの強欲故の愚鈍さと言えるかもしれない。しかし、そもそもサンチョには学がない。学校にも行っておらず、おそらく多くの時間を農作業に充てたのであろう。アルファベットの読み書きもできず、ドン・キホーテの手紙を再現するときには司祭の力を借りていたし、また、バラタリア島から妻のテレサ・パンサに手紙を送るときにも、世話係に代筆してもらっていた。

しかし、サンチョはただの愚鈍な農民ではない。だからこそ、多くの読者を惹きつけているのだ。そして、登場人物たちも、サンチョの別の一面を垣間見て驚くのである。しかし、それは「知識」ではない。なぜなら、前述したようにそういった意味の教育がなされていないので、「知識」量では、登場人物の誰にも勝てないのである。

サンチョ・パンサの武器は「知識」ではなく「知恵」なのだ。それでは、次章で、彼の知恵について見ていくことにしよう。

## 知恵

サンチョは、後に見ていくように、段々と「教育」されてはいく。しかし、やはり知識量は遠くドン・キホーテには及ばない。サンチョの愚鈍さと対比させられるのは、知識ではなく知恵であろう。それではいかなる場面でサンチョはその知恵を働かせるのであろうか。

それについてはまず前篇第44章の、バシジェルモ (bacyelmo)<sup>176</sup>という造語を挙げることができるだろう。たしかにそれはサンチョの機転が生んだものである。前篇第21章で登場した床屋が、前篇第44章で再登場する。床屋は、サンチョを見て、奪った馬具と金盥を返すよう要求する。サンチョは、それらは戦利品なので返す必要がないと主張する。するとドン・キホーテはそれに続いて、たしかに戦利品としてそれらを奪ったが、金盥などは奪っておらず、マンブリーノの兜なら奪ったと言う。その後主従の「金盥かマンブリーノの兜か」という不毛な会話が続くが、結局、サンチョが bacía (盥) + yelmo deMambrino (マンブリーノの兜) を組み合わせた造語 bacyelmo (バシジェルモ) を用いることによって一応の決着がつく。サンチョの目にはこの時点でやはりマンブリーノの兜などではなく金盥として映っている。しかし、ドン・キホーテがそこまでマンブリーノの兜だと主張するなら、不毛な会話を断ち切るために、造語を作り出したのだ。

とはいえ、サンチョはドン・キホーテがいつかは名を上げ、自分にどこかの *ínsula* を与えてくれるということには疑いを持っていない。また、おそらく、

馬具と *baciyelmo* を戦利品として床屋から奪うことに疑問も持っていないのであろう。

また、とくに後篇ではサンチョの知恵が目立つ。たとえば、後篇第45章での *ínsula* 統治や、《鏡の騎士》にドン・キホーテが敗れたあと、後篇第66章で村への帰路に行く主従が遭遇した村人の相談にも素晴らしい機知を働かせていることが分かるだろう<sup>177</sup>。

これらすべては、サンチョが農民であることに起因しており、生活の知恵や、人間関係を円滑にするためのいわゆる処世術に長けていると言えよう。

### 拮抗

サンチョには学がないため、無知で、また、話し方も粗野で幼稚である。さらに、階級的に目上のものや自分より学のあるものにとりたてて弱い。そのため、ドン・キホーテや公爵夫人が魔法の存在を説くと、何の疑いもなく信じてしまう。抽象的なことを処理する能力にも長けてはいない。

しかし、より具体的で生活に根付いたことであれば、サンチョの機知は大いに発揮される。さらに、ドン・キホーテがどんどんと「衰弱」していく後篇にで、さらにサンチョの機知が冴えわたる。また、サンチョの幼稚で回りくどい言い方やさらには言いまちがいの、ドン・キホーテ以外にとっては、魅力に映っており、この二つの特徴は、実は「相反する」というよりはむしろ表裏一体であることが分かるだろう。

## 7 サンチョ・パンサという人物

以上、見てきたように、サンチョはドン・キホーテと同じくらい複雑な人物である。なぜなら、その特徴一つ一つがほかの特徴と混ざり合うことで立脚しているからで、一概には「相反する特徴を複数有している」ということができないからである。

さらに、サンチョは「アンビヴァレント」というよりも「アンビグイティ」な存在であろう。「アンビヴァレント」だというとき、正反対の感情や特徴が同時に現れることを意味している。しかしサンチョは、たとえば愛情と裏切りという感情が交互に起こっている。それは至極まともな感情の変化なので「アンビヴァレント」と呼ぶよりむしろ曖昧さを意味する「アンビグイティ」がサ

ンチョには合うように思われる。

また、その曖昧さも、読者が共感を持ちやすいようなものになっている。欲から解放された人間は存在するだろうか。神を恐れぬ人間がいるだろうか。それも中世スペインにおいて、古いキリスト教徒なら、なおさらのことであろう。

「情」を湧かせない人間がいるだろうか。生きるためなら多少の嘘は許容されるのではないだろうか。何かに対して恐れをいただき、また勇気を振り絞って行動に移すこともあるのではないだろうか。識字率の低い当時、サンチョの語り口に何人の者が笑みをこぼしたであろうか。これほどまでに、十六・十七世紀のスペイン社会を反映させた登場人物がいたであろうか。これらはすべてセルバンテスの文才がなしえたことだ。

とはいえ、「現実直視」と「非現実直視」に関しては、当時の社会云々では済まないだろう。この二つの一見すると相反する特徴が、サンチョのほかの特徴と混ざり合っただけのものではないということは見えてきたが、とくに「非現実直視」に関しては、ドン・キホーテの影響によるものが大きい。

なぜなら、サンチョは、冒険当初には現実をありのままに見ていたからである。それでは、このようなサンチョの変化をわれわれは如何に見ることができるのであろうか。次章で詳しく見ていくことにしよう。

---

<sup>88</sup>前篇第7章。スペイン語版 p86、日本語版 p64 上下段

<sup>89</sup>京都外国語大学イスパニア語学科編『『ドン・キホーテ』を読む』 p102

作者はドン・キホーテの従士をサンチョ（太鼓腹の聖人）と名付けながら、無学で、世俗的欲が深く、食べることと寝ることだけが取り柄の人物であると読者に思わせた。読者はサンチョのネイミングは皮肉な諧謔であると捉え、そのギャップを笑い、彼の馬鹿げた道化ぶりを楽しんだ。その過程において俗性と精神性を変化自在に織り交えて見せ、温かい人間味に溢れ庶民的な人間くささを残すサンチョを実に巧妙に昇華させ、名実ともに太鼓腹の聖人に仕立て上げている。

<sup>90</sup>Molho, Mauricio, “*Cervantes: raíces folklóricas*” p278。訳は拙訳。

<sup>91</sup>Salvador de Madariaga, “*Guía del lector del “Quijote”*”

<sup>92</sup>牛島信明『ドン・キホーテの旅—神に抗う遍歴の騎士』 pp187-188

<sup>93</sup>山崎喜直『異常心理学入門』 p172

<sup>94</sup>ミシェル・フーコー『精神疾患とパーソナリティー』中山元訳, p148

<sup>95</sup>同上。 p180

<sup>96</sup>後篇第43章。スペイン語版 p875、日本語版 p349 下段

<sup>97</sup>同上。

- 
- <sup>98</sup>後篇第7章。
- <sup>99</sup>後篇第13章。“no me amaño a dejarle, por más disparates que haga”  
「いくらばかなことをしなさっても、見捨ててしまおうなんて気にはとてもなれねえのよ。」(スペイン語版 p651、日本語版 p100 下段。)
- <sup>100</sup>前篇第17章。
- <sup>101</sup>前篇第23章。
- <sup>102</sup>トビ・ナタン『他者の狂気』p5
- <sup>103</sup>京都外国語大学イスパニア語学科編『『ドン・キホーテ』を読む』p102
- <sup>104</sup>後篇第2章。スペイン語 p575、日本語版 p20 下段
- <sup>105</sup>後篇第5章。スペイン語版 p597、日本語版 p43 下段
- <sup>106</sup>前篇第32章。スペイン語版 p344、日本語版 p347 上段
- <sup>107</sup>Eduardo Urbina “*El sin par Sancho Panza, parodia y creación*” pp90-91
- <sup>108</sup>Salvador de Madariaga “*Guía del lector del “Quijote”*” p135、『ドン・キホーテの心理学』p211
- <sup>109</sup>前篇第29章。“¿qué se me da a mí que mis vasallos sean negros?  
¿Habrá más que cargar con ellos u traerlos a España, donde los podré vender,(...) Par Dios que los he de volar, chico con grande, o como pudiere, y que, por negros que sean, los he de volver blancos o amarillos”  
「おいらの家来どもが黒人であっても、それがどうしたっていうのかね？連中を船で運び、売り飛ばすまでのことよ。(中略) おいら神にかけて、大人も子供もいっしょくたにして売りとばし、連中がいくら黒かろうが、それをまっ白な銀貨と金貨に変えてやらい。」(スペイン語版 p314、日本語版 pp311 下段—312 上段)
- <sup>110</sup>後篇第63章。“y Sancho, aunque aborrecía el ser gobernador, como queda dicho, todavía deseaba volver a mandar y a ser obedecido:” 「サンチョは、すでに述べたように、領主の職に嫌気がさしてやめたのであったが、それでもなお、もういちど人に命令し、服従されてみたいという願いを抱いていた。(スペイン語版 p1029、日本語版 p530 下段)
- <sup>111</sup>Eduardo Urbina “*El sin par Sancho Panza: parodia y creación*” pp90-91
- <sup>112</sup>スペイン語版には“*El Quijote de Avellaneda*”, Alonso Fernández Avellaneda, Editorial Juventud を、また日本語版には『贋作ドン・キホーテ』岩根圀和訳、ちくま文庫：を使用した。
- <sup>113</sup>her、haber の意味,p42, p61,p77 などといった方言が多く見られる。
- <sup>114</sup>『贋作ドン・キホーテ』第25章。“que no soy yo de los negros de las Indias ni de los luteranos de Constantinopla, de quienes se dice que comen carne humana.” (p285) 「わしゃ人の肉を食らうとか言うアメリカ大陸の黒ん坊でもなけりゃコンスタンティノーブルのルター派でもねえだ。」(p80)
- <sup>115</sup>『セルバンテス』ジャン・カナヴァジオ著
- セルバンテスの主人公たちは、一つの目的を体現し、さまざまな幻滅にもかかわらず執拗にそれを追求する。それに反して、アベジャネーダの人物たちは生きていない。かれらはあてどなく流浪するマリオネットにすぎず、事件のまにまに少しずつ解体していく。かれらのみせかけの交流は、沈黙の対話、二人の冗長な一人語りの永遠の往復運動にすぎない。(p403)

- 
- 116 第 1 8 章。スペイン語版 p215、日本語版上巻 p303  
117 第 2 2 章。スペイン語版 p246、日本語版下巻 p24  
118 第 3 3 章。スペイン語版 p372、日本語版下巻 p207  
119 第 3 5 章。スペイン語版 p395、日本語版下巻 p238  
120 第 3 5 章。スペイン語版 p400、日本語版下巻 p246  
121 第 2 2 章。スペイン語版 p252、日本語版下巻 p32  
122 後篇第 2 章。スペイン語 p575、日本語版 p20 下段  
123 同上。  
124 後篇第 5 章。スペイン語版 p597、日本語版 p43 下段  
125 前篇第 4 7 章。スペイン語版 p509、日本語版 p519 上段  
126 「ヨブ記」一〇・21-22  
127 ウィリアム・シェイクスピア『ヴェニスの商人』大場建治訳  
128 トマス・アクィナス (1225-1274)。『神学大全』で知られるスコラ学の神学者。  
129 落合仁司『〈神〉の証明』 p164  
130 シェイクスピア『ヴェニスの商人』 pp166-167  
131 立石博高・関哲行・中川功・中塚次郎『スペインの歴史』 p122  
132 同上。 p142

しかし、異教徒がキリスト教に改宗するのは、社会的迫害または蔑視の風潮がかなり強かったためだと思われる。たとえばヴェニスの商人は、当時のキリスト教がどのように世間で評価されていたか、他宗教の者がいかに迫害されていたかを知る重要な資料だと言えるだろう。

『ヴェニスの商人』は、セルバンテスと同時代のイギリス人作家シェイクスピアの作品で、友人バサーニオのために金を借りに来たキリスト教徒のアントーニオと、金貸しのシャイロック（ユダヤ人）の話である。シャイロックはアントーニオに金を貸す際、期日までに金を返せなければ違約金がわりにアントーニオの体の肉を 1 ポンドもらうという約束をする。金を返せなくなったアントーニオの代わりにバサーニオが金を返すと提案するのだが、シャイロックはそれを拒み、アントーニオの肉 1 ポンドを要求する。バサーニオの恋人であるポーシャは裁判官に変装し、「証文は肉のみを記述しており、血は一滴も与えられていない。切り取るときにキリスト教徒の血を一滴でも流せば、財産はすべてヴェニスの国法に従い国庫に没収される」と判決をくだす。さらに、死刑になるはずのシャイロックは、キリスト教徒に改宗するという条件のもと、死刑から解放されるのである。

この作品は、喜劇である。もちろん、アントーニオやバサーニオたちからすれば大団円である。自らの意思でキリスト教徒に改宗したシャイロックの娘、ジェシカも父親の財産請負人となり、キリスト教徒と結婚する。そこには他の

---

宗教が入り込む余地など微塵もない。キリスト教以外の宗教は悪であり、そのことが当時大々的に受け入れられていたのだ。ユダヤ教徒は金貸しで成功した嫌な奴らで、彼らから金を借りようとも、頭を下げることはない。他宗教からキリスト教に改宗するものが多すぎて、キリスト教徒たちは少なからず反感を持っている。さらに、死刑を逃れるためにはキリスト教徒に改宗（しかも自らの意思には反しているのに）しなければならない。列挙すれば、この作品がいかにキリスト教を軸に作られているかが分かるだろう。そこには、シャイロックの感情は一切関与しないのである。

<sup>133</sup>Menéndez Pidal “*Historia de España El siglo XVI*” p418

<sup>134</sup>Menéndez Pidal “*Historia de España El siglo XVI*” p41

<sup>135</sup>Menéndez Pidal “*Historia de España El siglo XVI*” p416

<sup>136</sup>前篇第2 1章。スペイン語版 p215、日本語版 p197 上段

<sup>137</sup>前篇第4 7章。スペイン語版 p509、日本語版 p519 上段

<sup>138</sup>後篇第4 3章。スペイン語版 p875、日本語版 p349 下段

<sup>139</sup>後篇第5 3章。スペイン語版 p954、日本語版 p440 上下段。

<sup>140</sup>*Guía del lector del “Quijote”*、『ドン・キホーテの心理学』スペイン語版 pp174-175、日本語版 pp265-266 下線は筆者。

<sup>141</sup>羊の軍勢に飛びかかっていったドン・キホーテを見たサンチョは前篇第1 8章でドン・キホーテと冒険をしていることを呪っていたし、後篇1 3章においても、森の従士に、ドン・キホーテがサラゴサに着くまでは仕えるつもりだがそれから後は村に帰ろうと考えていると言っており、実際サンチョは何度かドン・キホーテを見捨てようとしている。

<sup>142</sup>Denys Armando “*El drama psicológico del Quijote*” p106

<sup>143</sup>後篇第6 2章。スペイン語版 p1024、日本語版 p524 下段

<sup>144</sup>後篇第6 3章。スペイン語版 p1029、日本語版 p530 下段

<sup>145</sup>後篇第6 5章。スペイン語版 p1045、日本語版 p548 上段

<sup>146</sup>後篇第1 3章。スペイン語版 p651、日本語版 p100 上段

<sup>147</sup>前篇第2 0章。スペイン語版 p194、日本語版 p174 上段

<sup>148</sup>前篇第2 0章。スペイン語版 p201、日本語版 p181 下段

<sup>149</sup>前篇第1 8章。スペイン語版 pp179-180、日本語版 p158 下段

<sup>150</sup>前篇第1 8章。スペイン語版 pp180-181、日本語版 p160 下段

<sup>151</sup>前篇第3 1章。

<sup>152</sup>後篇第1 0章。

<sup>153</sup>後篇第6 0章。

<sup>154</sup>後篇第7 1章。

<sup>155</sup>後篇第7 4章。スペイン語版 p1097、日本語版 p608 上段

<sup>156</sup>後篇第7 4章。スペイン語版 p1095、日本語版 p606 上段

<sup>157</sup>前篇第2 5章。スペイン語版 p256、日本語版 p246 下段

<sup>158</sup>前篇第3 2章。スペイン語版 p344、日本語版 p347 上段

<sup>159</sup>同上。

<sup>160</sup>前篇第3 5章。スペイン語版 p384、日本語版 p388 下段

<sup>161</sup>前篇第3 6章、第3 7章にサンチョの落胆ぶりが描かれている。



- 
- <sup>162</sup>前篇第36章。スペイン語版 p399、日本語版 p404 下段
- <sup>163</sup>*Guía del lector del “Quijote”*, 『ドン・キホーテの心理学』 スペイン語版 pp123-124、日本語版 pp193-194
- <sup>164</sup> *Guía del lector del “Quijote”*, 『ドン・キホーテの心理学』 スペイン語版 p126 日本語版 p197
- <sup>165</sup>前篇第24章。スペイン語版 p249、日本語版 p238 下段。
- <sup>166</sup>後篇第14章。スペイン語版 p658、日本語版 p107 上段。
- <sup>167</sup>後篇第14章。スペイン語版 p658、日本語版 p107 上段。
- <sup>168</sup>後篇第14章。スペイン語版 p658、日本語版 p107 下段。
- <sup>169</sup>後篇第14章。スペイン語版 p661、日本語版 pp109-110 下段 - 上段。
- <sup>170</sup>*Guía del lector del “Quijote”*, 『ドン・キホーテの心理学』スペイン語版 p128、日本語版 p202
- <sup>171</sup>前篇第20章。スペイン語版 p196、日本語版 p176 下段
- <sup>172</sup>前篇第20章。スペイン語版 p197、日本語版 p176 下段
- <sup>173</sup>前篇第20章。スペイン語版 pp198-199、日本語版 pp178-179 下段 - 上段
- <sup>174</sup>以上のドン・キホーテの台詞はすべて前篇第20章。スペイン語版 p199、日本語版 p179 上段
- <sup>175</sup>前篇第7章。スペイン語版 p86、日本語版 p64 下段
- <sup>176</sup>前篇第44章。スペイン語版 p478、日本語版 p494 下段
- <sup>177</sup>後篇第45章では、計三つのサンチョの公平にして機知に富んだ裁きがおこなわれる。仕立屋と百姓男への裁き、老人二人への裁き、そして証人と娘への裁きの三つである。後篇第66章では、「体重が11アローバの人間と5アローバの人間という、目方がかなり違う二人を競争させるときどうすればいいか」という問いに対して、「細い人間が太い人間に目方を合わせ、細い人間が6アローバの鉄塊を背負うのはいけない。そうではなくて太い人間が細い人間に目方を合わせるのが公平だから、太い人間から6アローバの肉をそぎ落とせばいい」と助言する。

## 第3章 相互影響

### 1 関係性

両者の関係はどうなっているのか。通常、近くにいる他者と遠く離れた他者とは、遠くの他者よりも近くの他者との関係に、より満足を感じる。それを「相互依存論」(theory of interdependence) という<sup>178</sup>。

社会をみたとき、そのパターンは程度の差を考えなければ四つある。たとえば、二者間(AとBとしよう)の関係は、四パターンに分けられる。それは、AがBに影響を与え、BがAを真似ることになるが、AはBから何の影響も受けないパターン(I)。BがAに影響を与え、AはBを真似るが、BはAから何の影響も受けないパターン(II)。AはBに、BはAに影響を与え、相互に影響を受け、互いが互いを真似るパターン(III)。そして、AもBも互いに何の影響も及ぼさず受けないパターン(IV)である。

ここで、Aをドン・キホーテ、Bをサンチョ・パンサとしよう。当初研究者たちは(I)パターンを唱えてきた。しかし、近年、心理学が細分化され、さまざまな分野に及び、社会心理学、臨床心理学、言語心理学などが発達したことから、ドン・キホーテとサンチョ・パンサの関係が一方向のものではなく、互いに影響し合っているのではないかと考えられるようになり、(III)パターンが有力説となっている。

もともと心理学は、psyche(心)とlogos(論)の複合語であり、1590年にゴクレニクスがはじめてこの言葉を使ったと言われている。

かつて、心と肉体という二つの次元からなっていると考えられており、人間は死ねば、肉体は亡びて去ってしまうが、心は、霊魂となって肉体から離れ、永遠に存在するものとしてとらえられていた。(プラトンのイデア論に同じ)つまり、古くより心とか精神とかいった「もの」があるとして、「心の本質はなにか」を中心に研究が進められてきた。しかし、その後、多くの変遷を経て、現代の心理学では、心は「もの」ではなく、「こと」すなわち「現象」としてとらえられることになる。

十九世紀以降、心理学の領域が細分化され、その対象面ばかりでなく、その方法面も哲学とは道を違えるようになった。フロイト(1858~1939)によると、心理学とは「それに役立った技術のあつかい方を心得ていれば、どんな観察者

でも確かめうるように、客観的に証明された事象によって仮説を試験するもの」である。実験心理学（1810～）、動物心理学(1910～)、差異心理学(1900～)、児童心理学(1900～)、精神分析を扱う病態心理学(1830～)そして社会心理学(1910～)などへと細分化された。

## 2 相互影響についての研究

これらの心理学の成果を利用しながらも、肝要なのは、作者セルバンテスが両者の関係をどのように描いているのか、である。

たしかにドン・キホーテとサンチョ・パンサは、ともに冒険をする内に、互いの関係性を変化させ、また互いに影響を及ぼし合うようになったと昨今の研究により言われている。つまり、初めはドン・キホーテに依存をするだけだったサンチョ・パンサだが、しだいに教育され、精神性を高めていき、ついにはドン・キホーテから「自立」する。対してドン・キホーテは、段々とサンチョとの関係において主導権を失っていき、その狂気も弱まっていく。

このように、ドン・キホーテとサンチョ・パンサが影響を及ぼし合っていると、ミゲル・デ・ウナムーノが二十世紀初頭に認めて以来、多くの研究者がこの考えを支持してきた。

その後、サンチョ・パンサがドン・キホーテの言動を真似るようになる「ドン・キホーテ化」について、研究者たちはとくに注目し、その例証を挙げた。

それとほぼ同時に、ドン・キホーテがサンチョ・パンサの特徴の一部に感化される現象が「サンチョ・パンサ化」と名付けられ、その可能性を探った研究者もいた。

それでは、研究者たちの意見はどのようなものなのだろうか。まずは年代を追って、確認することにしたい。

上記にあるように、二者の相互影響を初めて認めたのはミゲル・デ・ウナムーノで、彼は“*La vida de Don Quijote y Sancho*<sup>179</sup>”においてその現象に言及している。

たとえば、サンチョは“quijotizado”「ドン・キホーテ化され」<sup>180</sup>ていき、“*la fe quijotesca y quijotizante*”「ドン・キホーテ的でドン・キホーテ化に働く信仰」<sup>181</sup>を受け継いでいく。ドン・キホーテ的側面は冒険中つねにサン

チョに癒着し、“Sancho bueno,... estabas y estás quijotizado...”「善人サンチョ、(…) 汝はかつて今もドン・キホーテ化されている」<sup>182</sup>のだとウナムーノは言っている。このようにウナムーノは、サンチョがドン・キホーテと行動を共にしたため、ドン・キホーテ的側面を帯びていったのだという見解をとっている。最終的には“Es Sancho, es tu fiel Sancho, es Sancho el bueno, el que enloqueció cuando tú curabas de tu locura en tu lecho de muerte, es Sancho el que ha de asentar para siempre el quijotismo sobre la tierra de los hombres.”「汝が死の床で狂気から癒えたときに狂気に陥ったのは、汝の忠実なサンチョ、善人サンチョなのだ。人間たちの住むこの地上にキホティズムを永久に定着させることになるのはサンチョなのである。」<sup>183</sup>とあるように、サンチョこそがドン・キホーテの騎士道精神をこれからも受け継いでいくのだという結論に至るのである。

次にドン・キホーテのサンチョ・パンサ化について言及してる箇所を確認したいのだが、ウナムーノは、サンチョ・パンサのドン・キホーテ化とは違い、ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化について単独では論及しない。必ずサンチョのドン・キホーテ化と共に説明している。サンチョ化という単語は著書において二度登場している。まず、一つ目は以下のようなものである<sup>184</sup>。

Día llegará en que fundidos en uno, o mejor, quijotizado Sancho antes que sanchizado Don Quijote, no tenga aquél miedo y distinga de sonos lo mismo de noche que de día y se atreve con batanes y con jayanes.

いつか両者が一体となる日が、いやもっと正確に言うなら、ドン・キホーテがサンチョ的になるよりはむしろサンチョがドン・キホーテ的になる日がやってこよう。すなわちサンチョが恐怖を抱かず、夜も昼も物音を聞き分けて、羅紗晒機とでも力持ちとでもあえて渡り合う日がやって来るであろう。

上記だけを見ると、ドン・キホーテがサンチョ・パンサ化するのは、サンチョと冒険を共にしてきた結果感化されたかのような印象を受ける。しかし、「サンチョ・パンサ化」が用いられる箇所をもう一つ見てみよう<sup>185</sup>。

..es no poderse concebir al uno sin el otro, y que muy lejos de ser dos cabos opuestos, como hay quien mal supone, fueron y son, no ya las dos mitades de una naranja, sino un mismo ser visto por dos lados. Sancho mantenía vivo el sanchopancismo de Don Quijote y éste qui jotizaba a Sancho, sacándole a flor de alma su entraña qui jotesca. Que aunque él dijera 《Sancho nací y Sancho pienso morir》, lo cierto es que hay dentro de Sancho mucho Don Quijote.

一方を考えると他方を抜きにして考えることはできないということであり、ある人々がまちがって考えていたように彼らがまったく正反対の人物であるというのはとんでもない嘘で、彼らはオレンジの両半分どころか、同じものを二つの側面から見たようなものである。サンチョはドン・キホーテのサンチョ・パンサ主義を生きいきと保っていたし、また一方ドン・キホーテは、彼のドン・キホーテ的真髓をサンチョの魂から引き出すことによって、サンチョをドン・キホーテ化したのである。たとえサンチョが、「わしはサンチョとして生まれ、サンチョとして死ぬべきである」と言ったとしても、サンチョの中にドン・キホーテ的要素が大いにあることは確かである。

このウナムーノの文章からは、同じ時間を共有したために起こった変化というよりもむしろ、両者が両者の性質を元々有している、というように感じられる。つまり、生来的に人間は普遍的な面を持っているが（たとえば、食欲や睡眠、性欲など）、何かの刺激を受けなければその潜在的な一面が露呈することはない。しかし、ある刺激、つまり自分の潜在的な部分を有しているような人物と長時間いれば、「影響」を受け始める。そう、ウナムーノは言いたかったのではないだろうか。

ウナムーノは、ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化だけでは言及せず、またその根拠も記していない。つまりサンチョのキホーテ化と両者の相互影響を肯定しているが、昨今問題になるような意味でのドン・キホーテのサンチョ・パンサ化については言い及んでいないと結論付けられる。

次に 1926 年になると Salvador de Madariaga が *Guía del lector del "Quijote"* で、二者は相互に影響し、「サンチョのドン・キホーテ化」「ドン・キホーテのサンチョ化」が起こっていると主張した。「ドン・キホーテのサンチョ化」について明言し、またその根拠を示した研究者なので、マダリアーガ

については後述するが、ここでは簡潔に、サンチョ化はドン・キホーテがことわざを使ったことと、ドン・キホーテの狂気が弱まっていることを論拠にしていることを述べておく。

1946年には、アウエルバッハは大作、『ミメシス』<sup>186</sup>でサンチョがドン・キホーテから多大に影響を受けているが、ドン・キホーテはサンチョからほとんど影響を受けていないと述べている。

1952年にはウラジミール・ナボコフが、『ナボコフのドン・キホーテ講義』<sup>187</sup>において「ドン・キホーテの狂気とサンチョの常識が相互に伝染しあう」と相互影響を認めている。ナボコフは Madariaga の説を参考しているが、「～化」のような言葉は一切用いていない。

1960年に Martín de Riquer が "*Aproximación del Quijote*" で、「サンチョのドン・キホーテ化」について触れている。Martín de Riquer の示すサンチョのドン・キホーテ化についてはのちに見ていきたい。

また 1967年にアメリコ・カストロが『セルバンテスとスペイン生粋主義』<sup>188</sup>において「各々の生き方を調和させ」と相互影響を認めている。

1968年に Jorge Sanchez Camacho は、著書 "*Quijotismo de Sancho*"<sup>189</sup>で、二者が影響を及ぼしあっていたこと、サンチョがキホーテ化しつつあったことを出しているが、「キホーテのサンチョ化」とまでは明言していない。

1977年、高橋康也は『道化の文学』で、ルネサンス期の文学の特徴を挙げており、その中で、ドン・キホーテが、サンチョ・パンサという下層に引きずりおろされていることを指摘し、それを「マダリアーガの言葉を借りれば、ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化、サンチョのキホーテ化が起こっている」<sup>190</sup>と述べている。

1979年に出版された "*El ingenioso hidalgo Don Quijote de la Mancha*" を編集した Juan Avalle Arce は、二者間に相互影響があったこと、「サンチョのドン・キホーテ化」や「キホーテのサンチョ化」についても明言している<sup>191</sup>。

1991年に Eduardo Urbina が "*El sin par Sancho Panza*" で、二者間の相互影響、サンチョのキホーテ化について言及している。Urbina のサンチョのキホーテ化の根拠はかなり詳しいので、のちに検討していく。「キホーテのサンチョ化」については一切言及していない。

1992年に Daniel Eisenberg は「二者は *parecerse* し始める」と相互影響を認めている。"*Don Quijote llega a cobrar matices religiosos, santos y hasta*

mesiánicos” とあるように、サンチョが教育され、ドン・キホーテが宗教的になるのが根拠である<sup>192</sup>。しかし、相互影響についての記述はたったの 6～7 行しかなく、具体的なことはなにも書かれていない。また「キホーテ化」「サンチョ化」などの語は一切ないため、ドン・キホーテとサンチョ・パンサが相互に影響し合っているという以上のことは主張していないものとする。

2002 年、牛島信明は「ドン・キホーテの旅」において、両者が影響しあっていたこと、また、「サンチョのキホーテ化」「キホーテのサンチョ化」を明言し、サンチョ化の根拠に衰退をあげずに、諺のみをあげている。牛島信明も、マダリアーガと同様、「ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化」を明言した貴重な研究者なので、のちの「ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化」で詳しく見ていくことにする。

2005 年、京都外国語大学の出版した『ドン・キホーテを読む』において古家久世が「サンチョのドン・キホーテ化」について論じている。古家久世は、両者の相互影響については一切触れておらず、そのため、「サンチョ化」という言葉も使用していない。

以上より、Eduardo Urbina と古家久世のみ相互影響について触れていないが、大方、相互影響はあるものと考えられている。「サンチョのキホーテ化」を明言しているのは、マダリアーガ、Martín de Riquer、Jorge Sanchez Camacho、Avalle Arce、Eduardo Urbina、牛島信明、古家久世である。また、「ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化」という変化について明言しているのは、マダリアーガ、高橋康也、Avalle Arce、牛島信明だけだ。

それでは、多くの研究者が意見を同一にしているサンチョ・パンサのドン・キホーテ化について次章で見ていくことにする。

### 3 サンチョのドン・キホーテ化

#### 定義

サンチョ・パンサのドン・キホーテ化は、多くの研究者によって言及されてきた。たとえば、ミゲル・デ・ウナムーノの『ドン・キホーテとサンチョの生涯』、Eduardo Urbina の“*El sin par Sancho Panza*”や、Martín de Riquer の“*Aproximación al Quijote*”、ウラジミール・ナボコフの『ナボコフのドン・キホーテ講義』でも、この現象を前後篇にわたる『ドン・キホーテ』の特徴の一つとして挙げている。

Eduardo Urbina は以下のようにサンチョ・パンサのドン・キホーテ化を分析している<sup>193</sup>。

El «quijotismo» de Sancho radica en ser desde el comienzo del primer Quijote su compañero de aventuras y desde el segundo su compañero de fama; en ambos casos la correspondencia queda matizada por la parodia.

サンチョの《キホティズム》は、前編でドン・キホーテとともに冒険にでかけ、後編でドン・キホーテとともに名声を求めることに由来している。どちらの場合も、その対応はパロディー色が強い。

#### 《教育》

Eduardo Urbina は、サンチョが《教育》されていくことがドン・キホーテ化にほかならないと述べている<sup>194</sup>。

El «quijotismo» de Sancho radica en ser desde el comienzo del primer Quijote su compañero de aventuras y desde el segundo su compañero de fama;

サンチョの《キホティズム》は、前編でドン・キホーテとともに冒険にでかけ、後編でドン・キホーテとともに名声を求めることに由来している。

たとえば、サンチョが前篇第52章において妻テレサ・パンサと繰り広げる会話からサンチョのドン・キホーテ化を見出すことができる。

主人と共に村に帰ってきた(連れ戻されてきた)サンチョ・パンサに対して、妻は、“vuestras escuderías”「従士奉公」をしてどんな実入りがあったのかと尋ねる。サンチョは、「その手のものはなにも」ないが、「もっと価値のある、たいした物を持ってきた」のだと言う。しかし、それがどんなものかは、結局明示されていないので、推測するしかないが、目に見えない「榮譽」である可能性が高い。というのも、その後“no hay cosa más gustosa en el mundo que ser hombre honrado escudero de un caballero andante buscador de aventuras.”「正直な男にとって、冒険を求める遍歴の騎士の従士になるほど



楽しいことは、まずこの世にはねえ」<sup>195</sup>と言っているからだ。サンチョはみずからを古いキリスト教徒と自負していることから、この場合、正直な男はサンチョ自身である。この対話により、サンチョが物質的な満足と同じくらい、精神的な満足を重視していることが分かる。つまりサンチョは、粗野で物質的な欲求のみに忠実だった以前に比べ、《教育》されていることになる。

そして後篇に入れば、サンチョはもはや粗野で無学な田舎者ではない。後篇第12章で、従士がまるで哲学者のように話すのを聞いたドン・キホーテは、愚かな部分が減ってきたなど言う。サンチョは、“que algo se me ha de pegar de la discreción de vuestra merced”「旦那様の思慮分別がいくらかおいらにのり移ったから」<sup>196</sup>だと答える。ドン・キホーテは、サンチョの言ったことにまちがいはないと改めて思うのだ。

このようにサンチョが《教育》されていくのは、Eduardo Urbinaも指摘するように、ドン・キホーテ化だと言って差し支えないだろう。

### 精神の上昇

サンチョは《教育》された結果、精神的な満足を優先させるようになるが、この精神の上昇も、同様にドン・キホーテ化として見なすことができる。

サンチョは当初、「島がもらえる」という物的な欲望に動かされており、島の太守になることが目的だった。それゆえに、サンチョは前篇第11章で、“me sean de más cómodo y provecho”「名誉はいらないからほかの利益になるようなもの」<sup>197</sup>が欲しいとドン・キホーテに言う。しかしドン・キホーテと行動する内に、サンチョは“hacer otra salida que nos sea de más provecho y fama”「名声をあげるために旅に出かけ」<sup>198</sup>ようと自分から主人に話を持ちかけるまでになる。

ちなみに、サンチョの精神は上昇し続けるわけではない。彼は《アンビグイティ》な存在なので、状況しだいで形而上学的な問題に悩むこともあれば、俗的な物欲に身を任せることもある。たとえば、後篇第53章で公爵夫妻から任された《島》で悲惨な目に遭い、領主を放棄したときのサンチョは、哲学的な心境に陥った聖人の相貌を呈する。それは“dejadme que vaya a buscar la vida pasada, para que me resucite de esta muerte presente.”「わしをこの生地獄から抜け出させ、昔の暮らしを探しにいかせてもらいたい」<sup>199</sup>や、“que desnudo nació, desnudo hallo: ni pierdo ni gano;”「わしは一文なしでこの島を治めにきて、一文なしでこの島を出ていく」<sup>200</sup>といったサンチョの言葉か

らもうかがえる。サンチョは、領主としての窮屈な生活より、粗野な農民としての自由な生活の方がいいとこのとき考えた。しかし後篇第63章では“*todavía deseaba volver a mandar y a ser obedecido*”「もういちど人に命令し、服従させてみたい」<sup>201</sup>と願っていたし、同第65章でも、“*Yo, que dejé con el gobierno los deseos de ser más gobernador*”「領主になる気は捨てた」<sup>202</sup>が、“*no dejé la gana de ser conde.*”「伯爵になりたい気持まで捨てたわけ」<sup>203</sup>ではないとはっきりと述べており、彼の《アンビグイティ》な個性がよく表されている。

### 騎士道精神の高揚

精神が高揚したサンチョは、主人の騎士道精神に刺激され、従士に相応しい行動をとり始める。そうした態度も、サンチョ・パンサのドン・キホーテ化と認めることができる。

この立場をとっているのがMartín de Riquerである。Riquerは、“*Nueva aproximación al Quijote*”において、以下のように述べている<sup>204</sup>。

Aquí no es precisamente el escritor, Cervantes, quien parodia los libros de caballerías, sino los criados del Duque; y lo hacen con tal propiedad que no tan sólo don Quijote cae en el engaño, lo que es muy natural, sino también Sancho, que cada vez va creyendo más y más en las fantasías caballerescas y se va 《quijotizando》.

ここでセルバンテスは騎士道物語をパロディにしているのではなく、公爵夫妻の使用人たちのパロディの中にいる。それはドン・キホーテだけではなく、だんだんと騎士道物語的虚構を信じるようになるサンチョをも巻き込むのである。

ドン・キホーテは前篇第21章で、道を歩く騎士（じつは床屋）から戦利品としてマンブリーノの兜（じつは金だらい）を奪取した。その床屋は運命のいたずらにより前篇第44章において、ドン・キホーテ達が宿泊していた旅籠に入ってくる。サンチョの姿を認めた床屋は、彼を泥棒だと罵り、奪った金だら

いと荷鞍、馬具を返せと怒鳴る<sup>205</sup>。そのときサンチョは、片方の手でしっかりと荷鞍をつかんだまま、もう一方の手で相手の顔面に一撃をくらわせた。床屋も必死に応戦する。サンチョは、床屋が自分を“salteador de caminos”「ごろつき」「追い剥ぎ」呼ばわりしたのが我慢ならない。サンチョは、それらの品はすべて主人が正当な戦いで獲得した“despojos”「戦利品」なのだから、自分にはそれらを有する権利があると反論する。《臆病》なサンチョが、誰に守られるわけでもなく、一対一のつかみ合いの喧嘩をしている。このような大騒動を、ドン・キホーテは“con mucho contento”「大いに満足して」眺めており、“túvole desde allí adelante por hombre de pro, y propuso en su corazón de armalle caballero en la primera ocasión que se le ofreciese”「これからは従士をひとかどの人間と見なそう、そして、できるだけ早い機会に騎士に叙任してやろうと心に決め」た。この時点でドン・キホーテは、サンチョの騎士道精神を感じ取っていたのである。

もう一例引いてみよう。後篇第13章で、サンチョの娘を《森の従士》が“puta”「売春婦」呼ばわりしたので、サンチョは“háblase más comedidamente; que para haberse criado vuestra merced entre caballeros andantes, que son la misma cortesía”「もっとことばに気をつけろ、遍歴の騎士の従士なんだから」<sup>206</sup>と言って答める。

彼はもはや、遍歴の騎士の従士であることが何を意味するのかを知っている。サンチョは、娘を売女だと言われたことに憤りを感じているだけではなく、遍歴の騎士の従士であるみずからの誇りも傷つけられたと感じたからこそ、(実際は俄か従士である)《森の従士》の言葉遣いを咎めたのだ。このようにサンチョは、ドン・キホーテの標榜する騎士道に触発され、そうした「騎士道」に近づいていく。この過程はたしかに、サンチョ・パンサのドン・キホーテ化としてみることでできよう。

## 魔法への依存

騎士道精神を高揚させ、主人の心に近づいたサンチョは、騎士道物語の中へとじわじわ溶け込んでいく。サルバドール・デ・マダリアーガは、サンチョが魔法の存在を信じ始めることも、ドン・キホーテ化だと述べている<sup>207</sup>。筆者もこの考え方に同意しているものの、サンチョは、魔法の存在に関して曖昧な態度をとっていることから、影響されることによって考え方や人格が変貌をとげるわけではないと考えられる。

たとえばサンチョは前篇第35章で魔法の存在を肯定している<sup>208</sup>。サンチョはドン・キホーテがミコミコーナ姫のために巨人と戦っているのを、加勢に来てくれと、司祭たちに促す。彼らは、そんな訳はないと思いながらも、ドン・キホーテの部屋に行く。するとドン・キホーテはぶどう酒の革袋を切り裂いているだけで、巨人などいない。サンチョはあるはずのない巨人の首を探して部屋中を見てまわる。そして、主人が巨人の首を切り落とすのを、“por mis mismísimos ojos”「自分の目で」確かめたにもかかわらず、“encantamento”「魔法」のせいで見つからないとつぶやく。一方、ぶどう酒を損したことに激怒した宿の亭主は、ドン・キホーテが革袋を引き裂いていただけだとなぜ分からないのかと、サンチョに詰め寄る。そのときサンチョは、自分は何も分からないが、ドン・キホーテが切り落としたはずの巨人の首がないので伯爵領が遠のいてしまったとぼんやり答える。

Ya yo sé que todo desta casa es encantamento....y ahora no parece por aquí esta cabeza que vi cortar por mis mismísimos ojos, y la sangre corría del cuerpo como de una fuente.

「この宿で起こることの何もかもが魔法だってことが、おいらにもやっと分かったよ。(中略)それが今度は、ここらへんで首が消えちまった。切り落とされるところも、体からまるで泉みたいに血が吹き出すのも、おいらはこの両の目でちゃんと見たというのに。」

魔法の存在を肯定し、依存するサンチョの態度は、ドン・キホーテからの影響であり、ドン・キホーテ化だと言えるだろう。しかし、なぜサンチョは魔法の存在をこのとき完全に信じるに至ったのか。その考察をする前に、前篇第35章より後の章で(というのは、サンチョが魔法の存在を認めたが最後、最終それを信じ続ける単純な人間ではないことを強調するためだが)、サンチョが魔法の存在に対して否定的な態度をとっている章を例として取り上げたい。前篇第46章から第49章までがそれである。その冒頭の章でドン・キホーテとサンチョ・パンサは、仮装した司祭たちによって捕らえられてしまう。その直前でも、サンチョはきちんと現実を現実として受け止め、仮装したものたちが司祭と床屋であることを見抜いている。

ここで先ほどの疑問、「前篇第35章でなぜサンチョが魔法の存在を信じた

か」を考えてみよう。サンチョが魔法の存在を信じるか信じないかは、その結果、サンチョに利益がもたらされるかどうかにかかっている。つまり、彼が前篇第35章で魔法や巨人の存在を肯定しているのは、ドン・キホーテが巨人を倒せば、ミコミコーナ姫から伯爵領を授かれるからである。伯爵領が欲しいばかりに、サンチョは魔法の存在を肯定したのである。それに対し、前篇第46章から第49章にかけて魔法の存在を否定しているのは、もしサンチョが魔法の存在を肯定すれば、主従はそのまま司祭たちによって村へと連れ戻され、旅を続けられなくなるからである。だからこそ、ミコミコーナ姫がただのドロテーアに変わったと気づいたときに、サンチョの《魔法》が解けたのである。なおも「巨人」と戦い、首をはね、「血」を流させたというドン・キホーテに対して、いまいまいそくに“en lo que toca a la cabeza del gigante, o , a la horadación de los cueros, y a lo de ser vino tinto la sangre, no me engaño, vive Dios.”「巨人の首に関しちゃ、いや少なくとも、革袋に対する穴あけと、流れ出た血がぶどう酒だってことに関しちゃ、おいら神にかけて間違っちゃいませんよ」<sup>209</sup>と反論し、非難している。

このように、状況の変化によってサンチョの心は揺れるが、全体としてはマダリアーガが言うように、サンチョのドン・キホーテ化の一つは、サンチョが魔法の存在を否定しなくなるという点に、認められるだろう。

## 現実の歪曲

魔法の存在を肯定したサンチョは、次に、ドン・キホーテに対しては現実を曲げて話しても構わないと考えた。つまり、田舎娘のアルドンサ・ロレンソを高貴なドゥルシネーア姫だと思い込み、巨人に相見えることを切願し、魔法使いを実在する敵のように憎む主人に対しては、現実など役に立たないと判断したのだ。

たとえば、サンチョがドゥルシネーア姫の様子をでっちあげて伝える際の心情は“ya estaba cansado de mentir tanto y temía que no le cogiese su amo a palabras”「もう嘘八百を並べるのにはあきあきし、何時なんどき主人に言葉尻をとらえられるのではないかとびくびくしていた」<sup>210</sup>と前篇第31章では記されており、サンチョが良心の呵責を覚えていたことが分かる。しかし、現実を曲げてドン・キホーテに語ることに對して、徐々に楽しみを感じていく。

ドン・キホーテは、後篇第10章でドゥルシネーア姫の館に案内しろとサンチョに詰め寄る。しかしサンチョは、ドゥルシネーア姫宛の手紙を失くしてし

まったあと、司祭たちと合流したものだから、彼女の館がどこにあるか知るはずもない。ドン・キホーテの執拗な要求に困り果てたサンチョは、一旦主人の元を離れてから、色々なことに思いをめぐらせた揚げ句、主人の狂気を逆手にとって一芝居うってやろうと考える。サンチョが主人の元に戻ろうとしたとたん、驢馬に乗った三人の百姓女が近付いてきた。彼女たちをドゥルシネーア姫と二人の侍女に仕立てることを思いついたサンチョは、ドン・キホーテの所へと急ぐ。そしてもうすぐドゥルシネーア姫がここをお通りになられますと言うのだ。しかし三人の田舎女を目にしたドン・キホーテには、彼女がただの百姓女にしか見えない。哀れな騎士は目をこすり、うろたえる。サンチョは「姫」とした女の前に跪き、こんなことを言い出す<sup>211</sup>。

*Reina y princesa y duquesa de la hermosura, vuestra altivez y grandeza sea servida de recibir en su gracia y buen talento al cautivo caballero vuestro (...)*

「美しさの女王様で王女様で公爵夫人様、つんとお高くていとやんごとねえお前様をお願いいたします。(中略)お前様の囚われの騎士を、どうか、お前様の御好意とお情けで受け入れてやってください。」

一方、ドン・キホーテは、美しいドゥルシネーア姫が魔法使いによって醜い百姓女に変えられてしまったのだと嘆き始めるのだ。注目すべきは、芝居がうまくいったサンチョの反応である。首尾よく窮地を脱したと思った彼は“*contentísimo*”「たいそう気をよくして」<sup>212</sup>、「主人のたわごとを聞いて、こみあげてくる笑いかみ殺すのに一苦労」“*Harto tenía que hacer el socarrón de Sancho en disimular la risa, oyendo las sandeces de su amo, tan delicadamente engañado*”<sup>213</sup>していた。もはや、良心の呵責を覚えているサンチョの姿はそこにはない。サンチョは、自分の企みが思いどおりに運んだのでにやりとするのである。このような態度は、サンチョのピカレスク的な一面を物語っている。

風車を巨人と、旅籠を城と見なしていたのはドン・キホーテだけであった。しかしドン・キホーテを騙したサンチョは、主人が思い描いている騎士道物語世界を逆手にとり、醜い村娘を美しき思い姫ドゥルシネーア姫に仕立てた。そこで主従の関係の逆転現象が起きるのだ。現実を歪曲し、ドン・キホーテを欺

くサンチョは、たしかにドン・キホーテ化していると言っていいだろう。

また、サンチョが現実を歪曲させ、ドン・キホーテを言いくるめる場面はほかにもある。それは後篇第17章である<sup>214</sup>。

Si son requesones, démelos vuestra merced: que yo me los comeré... Pero cómalos el diablo, que debió de ser el que ahí los puso.(...) A la fe, señor, a lo que Dios me da a entender, también debo yo de tener encantadores que me persiguen como a hechura y miembro de vuestra merced,...

「もしそれが凝固乳なら、おいらにくださいよ、食っちまうから…だけど、そんなもなあ悪魔にくれてやるがいいさ、きっとあいつが入れたに違いねえんだから。(中略) 旦那様、神様がおいらにお授けくださった知恵によって判断すると、どうやらおいらにも魔法使いが付きまとっていて、おいらがお前様の家来であり、手足であるというので、おいらに悪さをしていやがるんですよ。」

以上見てきたように、サンチョ・パンサのドン・キホーテ化と言っても、研究者によって、その内容には違いがあることは否めない。Eduardo Urbinaはサンチョの《教育》、《教育》の結果＝精神の上昇（そして精神の一部である騎士道精神の萌芽を論じた『騎士道精神の高揚』を含めることもできるだろう）までがサンチョ・パンサのドン・キホーテ化だという。サルバドル・デ・マダリアーガは《教育》、精神の上昇に加えて魔法への依存までがサンチョ・パンサのドン・キホーテ化だとしている。そして牛島信明は《教育》と精神の上昇、騎士道精神の高揚に加えて現実の歪曲までがドン・キホーテ化に入っていると唱える。そのためその範囲の違いは多少存在すると言える。筆者は、考察してきたとおり、《教育》から、現実の歪曲まで、すべてがサンチョ・パンサのドン・キホーテ化だと考えている。なぜなら、これら全ては、ドン・キホーテがいなければ起こりえなかったサンチョの変化だからである。このように、サンチョ・パンサのドン・キホーテ化は多岐に亘り、変遷を経ていく。

では次に、“ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化”とはどのようなものなのか見ていこう。

## 4 キホーテのサンチョ化

### 定義

ここでは、近年唱えられてきているドン・キホーテのサンチョ・パンサ化をみることにする。

ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化 (Sanchificación de Don Quijote) は、サンチョの影響により、ドン・キホーテの口調や考え方、または態度が、変化していくことである。このドン・キホーテのサンチョ・パンサ化 (Sanchificación de Don Quijote) は、多くの研究者によって言及されているものではない。なぜなら、サンチョ・パンサのドン・キホーテ化 (Quijotización de Sancho Panza) が、本篇で明確であるのに対し、ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化 (Sanchificación de Don Quijote) ははっきりと描かれていないからである。

Juan Bautista Avallé-Arce は “*El ingenioso hidalgo Don Quijote de la Mancha de Miguel de Cervantes Saavedra. Edición, estudio y notas de Juan Bautista Avallé-Arce*” の Estudio Preliminar において、サルバドール・デ・マダリアーガは『ドン・キホーテの心理学』において、また牛島信明は『ドン・キホーテの旅』において、ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化 (Sanchificación de Don Quijote) が起こっていることを主張している<sup>215</sup>。

以下はナボコフの「ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化」の定義とその根拠である<sup>216</sup>。

ドン・キホーテの狂気とサンチョの常識とが相互に伝染しあうのだとか、後編に入ってドン・キホーテがサンチョ的な傾向を見せ始めるのに対してサンチョは主人と同様に気が狂ってくるとか、いろいろな批評家たちに指摘されている。たとえば、サンチョは自分の妻を説いて島の太守になる話を何とか信じさせようとするのだが、これは、ドン・キホーテがサンチョを説いて風車を巨人だと、旅宿を城だと思わせようとしたのと同じだ。著名ではあるけれど、凡庸な批評家ルードルフ・シヴィルが他人思いで古風な騎士と現実主義的で実利主義の従者の対照を強調する一方、犀利なスペインの批評家サルバドル・ド・マダリアーガはサンチョをもう一人のドン・キホーテ、調子の違うドン・キホーテだと見ている。実際の話、この二人は一篇の終わりまで



に彼らの夢想と運命を交互に交換するようである。(中略) 二人の主人公たちは相互に影響が重なり合い、一つに融合して、一つの統一体を成しているのであって、われわれはそれを受け入れるしかない。

また牛島信明は以下のように主張する<sup>217</sup>。

二人のやりとりに見られる関係が、ドン・キホーテとサンチョのそれぞれの出発点を端的に示している。このように狂気—日常性、空想—現実性といった、ほとんど図式化された対称点から出発した主従は、長い遍歴においてある時は和気あいあいと言葉を交わし、またある時は対立しながらも、いくたの艱難を共に辛酸をなめ合うのである。(中略) 緩慢ではあるが着実に進行する二人の関係は、知らぬ間に、相互に影響し影響されるという、人間の微妙な有様をみごとに反映している。

このように、サルバドル・デ・マダリアーガや牛島は、ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化を自著で取り上げているが、その範囲はきわめて狭いようだ。両氏は、①諺 (refrán) ②衰退 (ocaso/declinación) をサンチョ・パンサ化としている。しかしこれだけで、ドン・キホーテがサンチョ・パンサ化していると言えるのだろうか。

### 言葉、とくに諺

サンチョの最大の特徴である言葉に関わる点で、ドン・キホーテがサンチョ・パンサ化しているとサルバドル・デ・マダリアーガは言う。たとえば、ドン・キホーテは後篇第57章で諺を並べ立てるなどサンチョに諭しながら、諺を二つ並べる。するとサンチョは「旦那さまも諺を並べている」と指摘する。この箇所では、いつも従士の言葉遣いを咎めてきたドン・キホーテが、咎められる立場に身を置き、主従関係が逆転してしまっている。後篇第68章でも同様にサンチョよりもすばやく二つ諺を並べている。

まず、後篇第67章の引用は以下のものである<sup>218</sup>。

—No más refranes, Sancho, pues cualquiera de los que has dicho basta para dar a entender tu pensamiento; y muchas veces te he aconsejado

que no seas tan pródigo de refranes y que te vayas a la mano en decirlos; pero paréceme que es predicar en desierto, y 《 castígame mi madre, y yo trómogelas》 .

—Paréceme, que vuestra merced es como lo que dicen; 《Digo la sartén a la caldera; Quítate allá, ojinegra》 . Estáme reprehendiendo que no diga yo refranes, y ensártalos vuestra merced de dos en dos.

「サンチョよ、諺はもうたくさんだ。お前がいま口にしたうちのどれ一つをとっても、それだけでお前の考えを伝えるには十分ではないか。わしはこれまでお前に、やたらに諺をふりまくでない、諺を使うときには慎重にせよと、くり返し忠告しておいたはずじゃ。だがそれもどうやらそれも《馬の耳に念仏》であり、《お袋がお仕置きしても、おいらは出し抜いて仕返す》というようなものであったらしいな」

「おいらが思うに、旦那さまのなさることは、《フライパンが鍋に向かってどなった—そこをどけ、この尻黒野郎！》っていうのとそっくりだね。なぜかって言やあ、おいらに諺をつつしめと口うるさく叱っておきながら、御自分では二つずつ並べていなさるんだから。」

次章の後篇第68章では以下のような会話が繰り広げられる<sup>219</sup>。

— Nunca te he oído hablar, Sancho — dijo don Quijote, — tan elegantemente como ahora; por donde vengo a conocer ser verdad el refrán que tú algunas veces sueles decir: 《No con quien naces, sino con quien paces》 .

— ¡Ah, pesia tal — replicó Sancho —, señor nuestro amo! No soy yo ahora el que snsarta refranes; que también a vuestra merced se le caen de la boca de dos en dos mejor que a mí, sino que debe de haber entre los míos y los suyos esta diferencia; que vuestra merced vendrán a tiempo y los míos a deshora; pero, en efecto, todos son refranes.

「サンチョ、わしはこれまで」とドン・キホーテが言った。「おまえがそんな立派な口のきき方をするのを一度も聞いたことがないぞ。なるほど、これでやっとお前が時どき口にする、《誰から生まれたかじゃねえ、誰と飯を食ったかだ》とか《氏より育ち》といった諺が本当だということがよく分か

ったわ」

「ああ、こりゃいったいどうしたことですかい、旦那様」と、サンチョが応じた。「いま諺を並べたのはおいらじゃありませんよ。やっぱりおまえさまの口からも諺が飛び出してくるんだね、それも二つずつ、おいらより早くに。もつとも、お前様の諺とおいらのやつには違いがあつて、お前様のはちょうどいい折にやつて来るけど、おいらのは飛んでもねえ時にわいてでるってことだ。それでも、どっちも諺であることには違いがありませんがね。」

ドン・キホーテがここで諺を二つ並べているのは、たしかにサンチョ・パンサの影響もあるのだろう。しかしこれは、一時的な影響・変化でしかないのではなからうか。ドン・キホーテはこれ以上諺を並べ立てることもなかったし、連続した二つの章でしかこの現象が起こっていないからだ。つまり、これだけでは、サンチョ・パンサ化しているという確固たる論拠にはならないのである。

## 衰退

ドン・キホーテの衰退とは何なのか。「衰退」という概念と、それがドン・キホーテのサンチョ・パンサ化に属するのかを考察する。

サルバドル・デ・マダリアーガは、ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化を、ドン・キホーテの衰退とみなしている。つまり、ドン・キホーテは、騎士道精神を掲げ理想世界に生きていたが、サンチョの影響により、その世界は脆弱なものになり、それとともに精神状態が衰退し、死に至ったのだとマダリアーガは論じているのだ。

この点について考察する前に、まず“衰退”という言葉を見ていこう。“衰退”という言葉を用いるとき、元あった状態よりも悪化することが大前提である。しかし、ドン・キホーテの場合は異なるのではないか。というのも、彼は狂っているからである。本論文で筆者はそれが伴狂ではないと考えているものの、この場合、狂気の種類は関係のないことである。狂人が常人の考え方に近づいていく、つまり正気を取りもどしていくことを“衰退”と言うのか。

くわしく言えばドン・キホーテは後篇に入り元気をなくしていく。精神と肉体を同じレベルにおくのであれば、“衰退”という言葉は使えるかもしれない。体力がなくなり“衰弱”しており、精神が体力にリンクしているからだ。しかし、「正常な人間が、体力の衰えとともに、頑固ではなくなった」という状況

とは同じではない。そもそもドン・キホーテは良識と常識のある平常な人間だったわけだが、騎士道物語に触発されて狂人になったのだ。平常な人間だった狂人が、平常な人間にもどっていく過程をなぜ“衰退”と呼ぶことができるだろうか。この言葉はむしろ“回帰”という言葉が相応しいのではないか。

それでは、ドン・キホーテが俗人に近づいた、つまり“回帰”している箇所を確認して行こう。

ドン・キホーテは、後篇第11章で《死の宮廷》一座<sup>220</sup>を前に、新たなる冒険が到来したと意気込むが、説明を受けると、彼は役者一座をあるがままの現実だとして受け止める。さらにドン・キホーテは後篇第24章で、旅籠を旅籠とみなしており、城であるとは言わなかった。同様に後篇第26章では、人形劇の人形が実際のモーロ人だと妄想し、破壊しつくしてしまうが、己の非を魔法使いのせいにし、悪気はなかったのだとしながらも、カスティーリャ通貨で弁償すると詫びている。

前篇では、旅籠を城と見なし、旅籠の主人からここは城ではないので金を払ってくれと言われた時でさえ、ドン・キホーテは頑として了承しなかった。しかし、後篇では自分の過失として認め、カスティーリャ通貨で支払うとさえ言っている。これは、ドン・キホーテが常識を取りもどしていることの表れであり、彼の精神が“回帰”しているといえるのではないか。

この「ドン・キホーテ回帰説」を確固たるものにするため、さらにいくつか例を出そう。後篇第27章では、彼と冒険を共にしてきた、騎士の片腕とも言える従士、サンチョを見捨てたのである。これはドン・キホーテの最大の特徴、騎士道精神に反するものである。

後篇第29章では、ドン・キホーテの回帰が二度に亘り表されている。まず、彼はこれまでサンチョの言葉遣いを執拗に直し続けていたが、この章で初めて咎めない場面が出てくる (leña「せけどう」とサンチョは言うものの、ドン・キホーテはそれを訂正しない)。また、(脳内には存在した) とらわれの姫君を見捨て、旅を続けている。そのときドン・キホーテは“Amigos, cualquiera que seáis, que en esa prisión quedáis encerrados, perdonadme; que, por mi desgracia y por la vuestra, yo no os puedo sacar de vuestra cuita.”「どこのどなたかは存じあげぬが、その牢獄に閉じ込められておいでの友よ、どうか拙者をお赦しください。拙者とあなた方の不運ゆえ、拙者はあなた方をその苦境よりお救いすることができんのじゃ。」<sup>221</sup>と言っている。

後篇第41章には木馬クラビレーニョの冒険が描かれているが、ここでもドン・キホーテの想像力がなくなっていることがわかるだろう。公爵夫妻から笑いの種とされた主従は、老女たちを救うため、目隠しをしたまま、空飛ぶ木馬にのって欲しいといわれる。怯えるサンチョにドン・キホーテは、“*En verdad que no sé de qué te turbas ni te espantas.*”「それにしても、お前がどうしてそんなに取り乱し、怯えているのか、わしにはとんと解せぬぞ。」<sup>222</sup> “*no parece sino que no nos movemos de un lugar.*”「まるで、同じ場所からまったく動いてはいないと思えぬほどじゃ。」<sup>223</sup>と感想を述べている。また、地球全体を目にしたというサンチョに対し、“*De mí sé decir que ni me descubrí por alto ni por bajo, ni vi el cielo, ni la tierra, ni el mar, ni las arenas.*”「拙者に関して言えば、拙者は目隠しを上げることも下げることもしませんでしたので、天も地球も、海も陸地もいっさい見てはおりませぬ。」<sup>224</sup>と答えている。もう彼はサンチョのように冒険することができない。

後篇第48章では、公爵夫妻の館で老女ドニャ・ロドリーゲスがドン・キホーテのもとに娘のことで相談に来る。しかし何者かによって部屋の明かりが消され、老女はスリッパでしたたかに打ち据えられたとき、ドン・キホーテは、もはや、おし黙ったまま、じっとしており、内心では、その打擲の嵐が自分にまで向けられるのではないかと、びくびくしていたのである<sup>225</sup>。

...que era una compasión; y aunque don Quijote se la tenía, no se meneaba del lecho, y no sabía qué podía ser aquello, y estábase quedo y callando, y aun temiendo no viniese por él la tanda y tunda azotesca.

それは誰の心にも同情をかきたてる光景であった。もちろんドン・キホーテも老女に同情していたが、彼はベッドの中で身動きひとつしようとしなかった。目の前で何が起きているのかまったく分からなかった彼は、おし黙ったまま、じっとしており、内心では、その打擲の嵐が自分にまで向けられるのではないかと、びくびくしていたのである。

騎士道精神に奮い立たされ続けた前篇でのドン・キホーテはもはやいないのだ。ドン・キホーテは、“夢から覚め”つつあり、巨人や魔法使いでもない人間が、ドニャ・ロドリーゲスを打っているのだと理解している。彼は益々回帰

し、俗人へと近づく。

後篇第58章の“Con razón se la dan.(la= la palma de la hermosura)”「ドゥルシネーア姫に美の栄冠は当然のことでござる」といったあとで、“si ya no lo pone en duda vuestra sin igual belleza.”「もつとも、おん身たち（主従が道中出くわした二人の牧女たち）のたぐいまれな美しさを目にしたあとでは、いささかためられませんがな。」<sup>226</sup>と付け加えているのも興味深い。

後篇第10章で、サンチョがドン・キホーテを騙して、醜い百姓女をドン・キホーテの思い姫ドゥルシネーア・デル・トボースに仕立てたとき、ドン・キホーテには、彼女がただの醜い百姓女にしか見えなかった。（視覚的正常）さらに、百姓女から漂うニンニクのおいしさをそのまま感じている。（臭覚的正常）

ここで、前編第16章の場面と比較してみよう。旅籠で寝付こうとするドン・キホーテは、自分が今名高い城にやってきており、城主の姫君が自分に一目ぼれをしたため、彼女が今夜彼の部屋に忍び込みに来ると妄想している。その夜、運悪く、馬方と逢引の約束をしていたその宿の女中マリトルネスが、馬方の部屋に行く途中、そのような妄想にとりつかれたドン・キホーテによって捕まえられてしまった<sup>227</sup>。

Tentóle luego la camisa, y, aunque ella era de harpillera, a él le pareció ser de finísimo y delgado cendal.(...) Y el aliento, que, sin duda alguna, olía a ensalada fiambre y trasnochada, a él le pareció que arrojaba de su boca un olor suave y aromático; (...) Y era tanta ceguedad del pobre hidalgo, que el tacto, ni el aliento, ni otras cosas (...) no le engañaban,(...)

粗末な麻布のシュミーズに手をふれたが、彼にはそれが極上の薄絹に思われた。（中略）古くなったニンニク入りのサラダの悪臭を発していた女（マリトルネス）の息さえ、彼にとってはそれが、馥郁たる芳香と感じられた。（中略）実際、この哀れな郷士の盲目ぶりはたいそうなものだったので、手ざわりにしても口臭にしても、（中略）彼が幻想から目覚めることはなかった。

この場合、ドン・キホーテは視覚的異常をきたしているだけでなく、臭覚的

異常や触覚的異常もきたしている。それが、彼の狂気である。

しかし、後篇になるとドン・キホーテの五感がしだいに常人のそれと重なってくる。それが如実に描き出されているのが後篇第10章なのだ。

その時のドン・キホーテの台詞は、“Yo no veo, Sancho, sino a tres labradoras sobre tres borricos.”「わしにはな、驢馬に乗った三人の百姓女にしか見えぬぞ。」<sup>228</sup> “transformado a mi Dulcinea, sino que la transformación y volvieron en una figura tan baja y tan fea como la de aquella aldeana”「あの田舎娘のような下賤で醜い姿に変えてしまい」<sup>229</sup> “me dio un olor de ajos crudos, que me encalabrinó y atosigó el alma.”「生ニンニクのものすごい臭いがぶーんときたので、わしは頭がくらくらして、魂まで毒された気になったものよ。」<sup>230</sup>

さらに、ドン・キホーテにとって決定的な出来事が起こる。後篇第64章で《銀月の騎士》と戦い、敗北を喫するのである。

自分の思い姫のほうが美しいとドン・キホーテに迫る場面で、彼は以下のように述べる<sup>231</sup>。

Dulcinea del Toboso es la más hermosa mujer del mundo, y yo el más desdichado caballero de la tierra, y no es bien que mi flaqueza defraude esta verdad. Aprieta, caballero, la lanza, y quítame la vida, pues me has quitado la honra.

「ドゥルシネーア・デル・トボースはこの世で随一の美姫にして、拙者こそ、地上でもっとも武運つたなき騎士でござる。しかし拙者の弱さゆえに、この真実を曲げることはあいならぬ。さあ騎士よ、拙者の名誉を打ちくだいたからには、その槍で拙者の生命をも奪いとってください。」

このときは、先に見られたような言葉遣いはしていない。《fermosa》《cautivo》《aquesta》などを口にするのではなく、それぞれ《hermosa》《desdichado》《esta》を用いている。この変遷については多くの説が存在するが、もっとも有力な説は、打ちのめされたドン・キホーテが独自の理想世界の中でもはや生きることができなくなったからだというものである。これは、ドン・キホーテが衰退していき、ついには死に至ったのだという結末にも関連

している。このように、ドン・キホーテは理想世界に生きていた前篇と後篇の前半部には騎士道物語的な言葉遣いであるのに対し、終焉に近づくにつれて、俗人的な言葉遣いに移り変わっていることが分かる。

ドン・キホーテがひどく意気消沈しているのを見たサンチョは、何度も主人を慰めるが、もはやドン・キホーテは考える気力さえ失っている。後篇第68章に至ると、ドン・キホーテがほとんど夢から覚めた状態になっているのが分かる。主従は何者かに捕らえられ、侮辱的な言葉をかけられる。そのときドン・キホーテは、ひどく狼狽し、“de los cuales sacaba en limpio no esperar ningún bien y temer mucho mal”「はっきりと分かったのは、この状況から何かよいことを期待することはできない、それどころか、より大きな災難が待ちうけているおそれがある」<sup>232</sup>と考える。もはや、ドン・キホーテが新たな冒険にめぐりあうことはない。ドン・キホーテにとっては、不意の出来事が「大きな災難 (mucho mal)」になったからだ。

サンチョとの関係にも変化が生じてくる。サンチョがいなければ、精神的な支えを失ってしまうことが後篇の後半部に描かれている<sup>233</sup>。

Cuéntase, pues, que apenas se hubo partido Sancho, cuando don Quijote sintió su soledad; y si le fuera posible revocarle la comisión y quitarle el gobierno, lo hiciera.

サンチョが出発してしまうと、とたんにドン・キホーテはどうしようもない孤独感に襲われた。実際、かりにサンチョの任命を無効にし、サンチョの領主就任を取り消すことができるものなら、ぜひともそうしたいとさえ思ったほどである。

以上のように、ドン・キホーテは何らかの原因で“回帰”していく。しかし、そうなるべきではなかった。ドン・キホーテをドン・キホーテたらしめていたのは騎士道精神にほかならず、その彼が回帰し、俗人（正常な人間）へと戻り、騎士道精神から遠ざかっていくとき、アイデンティティーを保てなくなり、死に至ってしまうからである。

ともかく、ドン・キホーテは正常な人間に近い状態へと戻っていくのだが、これはサンチョ・パンサ化だろうか？ ドン・キホーテが回帰していくのはサン



チョー一人の影響であろうか。そのようにみることはできないだろう。なぜなら、もしドン・キホーテのサンチョ・パンサ化という現象が起こっているのなら、それは理想世界の崩壊以外にも見られるものだろう。しかしその現象がひたすら理想世界の崩壊にあるのなら、それは、ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化ではなく、ドン・キホーテの俗人化（または回帰）という表現が相応しいように思えるからだ<sup>234</sup>。なるほど理想世界と現実世界の温度差を悟るのに、サンチョも一役買ったかもしれないが、それだけではなく、ドン・キホーテは司祭や親方をはじめとする出会うすべての人々の影響も受けているからである。

しかし、なぜマダリアーガや牛島信明は、根拠として二つしかないにもかかわらず、ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化を明言したのであるだろうか。

その理由としては二つある。一つはやはりウナムーノの存在が大きかったためであろう。さらにウナムーノが根拠を示さずに「サンチョ・パンサのドン・キホーテ化」「ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化」を唱えてしまった。そのためウナムーノの論拠を明示する意味で、両方の現象に同調したためであろう。しかし、ウナムーノはこれまで見てきたとおり、サンチョ・パンサのドン・キホーテ化については冒険を共にすることで影響されていくのだと考えている。しかしドン・キホーテに関して言えば、苦楽を共にしたからというよりむしろ生来の普遍的な面を主従が共有していたという見方をとっている。このことから相互影響以上の意味ではこれらの言葉を用いていないように思われる。

もう一つは、心理学がどんどんと細分化されていった時代にマダリアーガがドン・キホーテの心理学を研究していたという点だ。前述のとおり、フロイト（1858～1939）の研究が盛んになったまさに心理学全盛期である。実験心理学（1810～）、動物心理学（1910～）、差異心理学（1900～）、児童心理学（1900～）、精神分析を扱う病態心理学（1830～）そして社会心理学（1910～）と詳細に分けられた。

マダリアーガは、社会心理学に傾倒しており、社会心理学では「似た者夫婦」理論が大きく取り上げられた。所謂、夫婦が長年連れ添っていると、互いに似通ってくるというものだが（近年では「似た者夫婦理論」に懐疑的な見方をする心理学者が増えている）、それをさらに踏み込んだものが「サンチョ・パンサのドン・キホーテ化」「ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化」というわけである。現象があるので根拠もある、とマダリアーガは考えたに違いない。

相互影響は見られるものの、ドン・キホーテがサンチョ・パンサに与える影響力は、サンチョ・パンサがドン・キホーテから受ける影響力と比べられないほど低く同時に質的にも異なる。そのためドン・キホーテが、サンチョ・パンサ化しているとは言えない。それは、サンチョがドン・キホーテ化していることとは大きく異なっている。

## 5 サンチョのドン・キホーテ化が起こった理由

サンチョがドン・キホーテに「影響」(influencia)を受けたため、サンチョのドン・キホーテ化が起こったと言われている。しかし、「影響」というよりもむしろ、これは、社会心理学でいうところの、「模倣」の一つではないだろうか。

サンチョのドン・キホーテ化が、より進んだ理由の一つとして、ドン・キホーテとサンチョ・パンサを比べたとき、ドン・キホーテのほうがサンチョ・パンサよりも教養があり、洗練されているので、そのような人物が自分より野卑な人間から影響をうけるのではないのではないかという理由がある。

それは、まさしく「模倣」という概念にほかならないのではないか。まずは、「模倣」とは社会心理学的にどのようなものであるのかを示したうえで、なぜサンチョがドン・キホーテを模倣しようとしたのかについて明らかにしていきたい。

板倉聖宣は、『模倣と創造』で、「模倣の反対語は、創造というより独創である」と語っている。板倉は続けて、「模倣は創造でありえても独創でありえない。模倣は「ほかを模し倣う」のに対し、独創は「独りで創る」のであるから、言葉の定義そのものからして模倣は独創ではありえない。」と説明する。板倉から見れば、反対に、模倣が創造であることは可能で、たとえばオランダの学問を模倣して『解体新書』を訳出したことは、創造的な仕事だと言う<sup>235</sup>。

池田満寿夫は、「模倣は人間が生存しているかぎり当然なことがらであり、表現をうながすものである以上、それは技術をも含めた表現であることが読み取れるが、他方、影響は、影の形に従い、響の音に応ずるのだから、必ずしも関係された結果における表現をうながすものではない。」と説明し、今まで、心情的にしかこれらの言葉を使用していなかったことを認めている<sup>236</sup>。

ここで面白いことが起こる。ドン・キホーテも騎士道物語の主人公の言動を

「模倣」していることだ。

これはほかの研究者の意見を借りれば「パロディ」とも言い換えられるが、ドン・キホーテは先に見たように騎士道物語を読みふけたために頭がおかしくなり自身を騎士道物語の主人公だと思い込むようになった。騎士道物語の主人公の身なり、行動、言葉遣い、理念すべてを「模倣」した。ドン・キホーテにとっては模倣に「値する」からそのすべてを模倣しようとした。

後篇になれば、騎士道物語の主人公を模倣しているドン・キホーテを、さらに模倣しようとする人物が二者出現する。一人はドン・キホーテと冒険をしていたサンチョ・パンサなので出現というのはおかしいが、従者であるサンチョ・パンサと、「アベジャネーダ版ドン・キホーテ」である。彼ら二者は模倣の模倣をおこなっていることが分かる。

このように、模倣とは、末端にどんどんと影響を及ぼしていく社会的な現象なのだが、この模倣の概念を分かりやすく説いた研究者がいる。それがガブリエル・タルドである。タルドは社会学者であり、模倣についての著書を残した。それが百年以上前である。その著書により「タルドの模倣論」は注目を浴びることになった。

タルドの模倣論とは、二つの集団のうち、どちらか一方が模倣される側にまわるというもので、例を取り上げると、平民は盲目的に貴族をモデルに選び、田舎の人はパリに住む人をモデルに選ぶというものだ。「社会階層の上から下への模倣伝播」または「内から外への模倣」と呼ばれている。

またタルドは、ヘンリー・モーズリーが 1867 年発行した『精神の病理学』を持ち出して、催眠をかけられている人は、催眠術師の言うことを意識のないままに模倣しているが、その逆はありえないこと、つまり、この場合はかなり限定的で極端であるが、催眠術師（上）から被術者（下）からの模倣のみで、その模倣は逆流しないことを指摘している<sup>237</sup>。

タルドは、「もっとも模倣の対象になりやすい人々あるいは階級とは、人々がもっとも服従する相手である」<sup>238</sup>と述べ、大衆は王や宮廷、上流階級の支配を受けているあいだは彼らを真似するが、たとえばフランス革命の直前の数年のあいだは、もはや服従は敬意もなくなっているので、宮廷や上流階級の流行を模倣しなかったと説明する。そして、そのもっとも顕著な例が父親とその子供で、子供からすれば、父親はもっとも模倣すべき対象なのだという。

タルドが主張するように、模倣は下の者への現象だとすると、一つ疑問が生じる。下方にいる個人にはそれぞれ社会があるため、模倣べき対象が必ず二つ

以上存在する点である。つまり、個人は、よりよい模倣の対象を選択する必要があるのだ。その決定は、「自身の好みにしたがっているし、他方では論理的法則」<sup>239</sup>にかなっている。

もちろん下層から上層への模倣のながれが、まったく存在しないわけではない。タルド自身もこのことは認めている。

けれども、タルドは、こう述べている。「二人の人間が出会い、長いあいだ接触しつづけていれば、一方がどれほど優れていて他方がどれほど劣っていたとしても、最終的には双方が互いに模倣しあうことになる。ただし、模倣の程度が一方はより多いし、他方はよりすくない。」<sup>240</sup>つまり、彼がここで言っているのは、より多く上層から下層へ模倣の流れが起こるという意味なのである。

以上より、サンチョがドン・キホーテを模倣したのは、タルドの模倣論どおり、自分よりも権威のあるものをを真似ようとしたからであり、そうすることで同じ位置にいる者に対して優越感を感じることができるからである。同様にドン・キホーテが騎士道物語の主人公を真似ようとしたのは、彼らが自分たちの時代の人々よりも優れていると理解したためである。

また、ドン・キホーテは、騎士道物語の主人公を秀でた存在としているため、サンチョを真似る（模倣する）理由がない。

このことから、サンチョ・パンサがドン・キホーテ化するといった場合のようにドン・キホーテがサンチョ・パンサ化しているとは言えない。

---

<sup>178</sup>唐沢かおり『社会心理学』p100

<sup>179</sup>Miguel de Unamuno “*La vida de Don Quijote y Sancho*” Edición por Alberto Navarro

<sup>180</sup>後篇第7章。スペイン語版 p343、日本語版 p184 下段

<sup>181</sup>後篇第10章。スペイン語版 p350、日本語版 p189 下段

<sup>182</sup>後篇第33章。スペイン語版 p401、日本語版 p232 下段

<sup>183</sup>後篇第74章。スペイン語版 p516、日本語版 p341 下段、

<sup>184</sup>前篇第20章。スペイン語版 pp245-246、日本語訳 p105 上段

<sup>185</sup>後篇第2章。スペイン語版 p330、日本語版 p175 上段

<sup>186</sup>E.アウエルバッハ『ミメシス上下』

<sup>187</sup>ウラジミール・ナボコフ『ナボコフのドン・キホーテ講義』pp64-65

<sup>188</sup>アメリコ・カストロ『セルバンテスとスペイン生粋主義』p195

- 
- 189 Jorge Sanchez Camacho "*Quijotismo de Sancho*"
- 190 高橋康也『道化の文学』p201。しかしながら、高橋は、この現象を「互いに無関係な併存であって、相互浸透ではない」と述べており、ドン・キホーテが完全にサンチョ化することもその逆もあり得ないと主張しており、「対立物の果てしない入れ替り、響きかわすこだま、価値の転換ゲーム」という虚像同士の戯れにすぎないという説を展開している。(p203)
- 191 Miguel de Cervantes Saavedra "*El ingenioso hidalgo Don Quijote de la Mancha I, II*", editado por Avallé-Arce, Juan Bautista
- 192 Daniel Eisenberg "*Estudios cervantinos*"
- 193 Eduardo Urbina "*El sin par Sancho Panza, parodia y creación*" p136
- 194 同上。pp154-155
- 195 前篇第5 2章。スペイン語版 pp538-539、日本語版 p563 下段
- 196 後篇第1 2章。スペイン語版 p642、日本語版 p89 下段
- 197 前篇第1 1章。スペイン語版 p113、日本語版 p91 上段
- 198 前篇第5 2章。スペイン語版 p537、日本語版 p560 下段
- 199 後篇第5 3章。スペイン語版 p954、日本語版 p440 上段
- 200 後篇第5 3章。スペイン語版 p954、日本語版 p440 下段
- 201 後篇第6 3章。スペイン語版 p1029、日本語版 p530 下段
- 202 後篇第6 5章。スペイン語版 p1045、日本語版 p548 上段
- 203 後篇第6 5章。スペイン語版 p1045、日本語版 p548 上段
- 204 Martín de Riquer "*Nueva aproximación al Quijote*", p128  
Martín de Riquer が quijotización, quijotizar について言及しているのはこの箇所のみである。Riquer は Madariaga を読んでいるようだが、sanchificación については、全く触れていないことは興味深い。
- 205 以下すべて前篇第4 4章。スペイン語版 pp476-477、日本語版 p493 下段
- 206 後篇第1 3章。スペイン語版 p649、日本語版 p98 下段
- 207 "*Guía del lector del "Quijote"*", 『ドン・キホーテの心理学』
- 208 以下すべて前篇第3 5章。スペイン語版 p384 日本語版 p388 下段
- 209 前篇第3 7章。スペイン語 p404、日本語 p411 上段
- 210 前篇第3 1章。スペイン語版 p335、日本語版 p335 下段
- 211 後篇第1 0章。スペイン語版 p630、日本語版 p76 上段
- 212 後篇第1 0章。スペイン語版 p631、日本語版 p78 下段
- 213 後篇第1 0章。スペイン語版 p633、日本語版 p80 上段
- 214 後篇第1 7章。スペイン語版 p677、日本語版 p126 上下段
- 215 またアメリカ・カストロも著書『セルバンテスとスペイン生粋主義』p195  
において、(二人が)『共生しつつ、各々の生き方を調和させ』ているとすることから、ドン・キホーテのサンチョ・パンサ化を認めていると言えるだろう。しかしながらドン・キホーテのサンチョ・パンサ化がいかなるものなのかについての言及がなされていないので、本論文ではカストロの論証を用いていない。
- 216 ウラジミール・ナボコフ『ナボコフのドン・キホーテ講義』pp64-66
- 217 牛島信明『ドン・キホーテの旅—神に抗う遍歴の騎士』p155

- 
- 218 後篇第 6 7 章。スペイン語版 p1057、日本語版 p563 上下段
- 219 後篇第 6 8 章。スペイン語版 pp1059-1060、日本語版 p566 上段
- 220 ロペ・デ・ベガが、以前に“Auto sacramental de las Cortes de la Muerte”  
という戯曲を書いており、その登場人物も類似しているのは大変興味深い。
- 221 後篇第 2 9 章。スペイン語版 p781、日本語版 p247 上下段
- 222 後篇第 4 1 章。スペイン語版 p860、日本語版 p333 上段
- 223 後篇第 4 1 章。スペイン語版 p860、日本語版 p333 上段
- 224 後篇第 4 1 章。スペイン語版 p864、日本語版 p357 上段
- 225 後篇第 4 8 章。スペイン語版 p914、日本語版 p396 下段
- 226 後篇第 5 8 章。スペイン語版 p988、日本語版 p478 上段
- 227 前篇第 1 6 章。スペイン語版 pp136-137、日本語版 pp136-137 下上段
- 228 後篇第 1 0 章。スペイン語版 p624、日本語版 p75 下段
- 229 後篇第 1 0 章。スペイン語版 p632、日本語版 p79 上段
- 230 後篇第 1 0 章。スペイン語版 p632、日本語版 p79 上下段
- 231 後篇第 6 4 章。スペイン語版 p1041、日本語版 p543 下段
- 232 後篇第 6 8 章。スペイン語版 p1063、日本語版 p570 下段
- 233 後篇第 4 4 章。スペイン語版 p878、日本語版 p354 上段
- 234 『『ドン・キホーテ』における創造世界』において鈴木正士は、ドン・キホーテが騎士道物語世界を非騎士道物語に変換することがもはやできなくなつてしまったため、ドン・キホーテは衰退していったのだと述べている。
- 235 板倉聖宣『模倣と創造—科学・教育における研究の作法』
- 236 池田満寿夫『模倣と創造—偏見のなかの日本現代美術—』
- 237 ガブリエル・タルド『模倣の法則』 p128
- 238 同上。 p280
- 239 同上。 p133
- 240 同上。 p300

続けて以下のように言う。「どれほど傲慢な田舎貴族でも、アクセントや態度、心のあり方が、どうしても召使や小作人に似てくる。(中略)このような下から上への影響はあらゆる事実にあつては及んでいる。とはいえ、物理学における中心的な事実である、宇宙の熱温度が最終的には永遠の平衡状態へと向かうことを説明するのは、冷たい物体から熱い物体へのわずかな放射ではなく、熱い物体から冷たい物体への大規模な放射のほうである。」

## 終わりに

セルバンテスの『ドン・キホーテ』の魅力は、多様な登場人物が出てくるといふ近代小説の特徴を備えているという点に見い出される。そればかりでなく、ほかの作品への批評を作中に取りこんだり、『贋作ドン・キホーテ』の登場人物を本物のドン・キホーテ主従と会話させたりするなど、多くの点に感じとることができる。

しかし、やはり、この作品に登場する人物たちに魅力がなければ、『ドン・キホーテ』がここまで広く読まれることはなかったのではないだろうか。

セルバンテスは、登場人物たちすべてに「性格」を与えているが、作者がもっとも複雑な性格を与えたのがドン・キホーテとサンチョ・パンサであろう。

ドン・キホーテとサンチョ・パンサを、単なる狂気と愚鈍の塊だと揶揄する作中人物もいるが、それは正しくない。そのような判断を下すのは、実際に主従と会話を交わしてたわけではなく、前篇の『ドン・キホーテ』を読んだという、後篇に登場するサンソン・カラスコのような、「読者」なのである。

実際にドン・キホーテと言葉を交わした人物の何人かは、ドン・キホーテの狂気がそれほど単純なものだとは見做してはいない。たとえば、《緑色外套の騎士》こと、ドン・ディエゴの息子であるドン・ロレンソは、“No le sacarán del borrador de su locura cuantos médicos y buenos escribanos tiene en el mundo: él es un entreverado loco, lleno de lúcidos intervalos.”「世界中の医師と知恵のある公証人が寄ってたかっても、彼（ドン・キホーテ）の狂気を読み取ることはできないでしょう。あの狂気は判読不能の草稿のようなものですから。あの人は狂気のなかに素晴らしい正気が交錯する変わった狂人ですよ」<sup>241</sup>と、後篇第18章で述べていることから明らかである。

ドン・キホーテは、騎士道物語を読みふけて頭がおかしくなり、自らを遍歴の騎士と思い込んでいる、いわば騎士道物語に登場する主人公の滑稽なレプリカだが、セルバンテスは、そうした彼に一面性ではなく二面性を与えた。

すなわち、単なる狂人ではなく「正気と狂気のまじりあった」不思議な狂人としているのである。ときにはサンチョに常識的な説法をおこなわせることによって、ドン・キホーテがいつも狂っているわけではないことを示した。

ドン・キホーテは話が騎士道物語やその精神に及ぶと正気を失ってしまい、周りのものに対しひどく攻撃的になる。前篇第24章で、カルデニオが何気なく、エリサバット博士が王妃マダシマと情交を結んだと言ったとき、ドン・キホーテは躊躇なくカルデニオに襲いかかった。また、思い姫ドゥルシネアが軽んじられたときも激昂する。前篇第20章でドン・キホーテは、自分の武勲をドゥルシネア姫に報告しに行こうとしない囚人たちに攻撃をしかけようとしていた。また、別の場面で、ドゥルシネアの美しさを軽んじたサンチョに槍を振り下ろすなど、ドン・キホーテの狂気はドゥルシネアと緊密に結びついている。

しかしながら、最近の研究では、ドン・キホーテは実は狂っていないのではないかという意見が研究者から出てきた。この説の起源は半世紀以上前という古いもので、マーク・ヴァン・ドーレンが唱えた「ドン・キホーテ役者説」ほかならない。ドーレンに続き、牛島信明がこの佯狂説を擁護した。ドン・キホーテが、つねに第三者の目を気にしている自己欺瞞の狂人なのだと主張した。ドン・キホーテは、役者稼業に憧れていたという発言をしているし、また、「狂人になる」という、おおよそ狂人には相応しくないことを口にしてしているからというのが根拠である。

ほかにもドン・キホーテの正気の部分を挙げるができるだろう。しかしながら、それはやはり彼の一部でしかない。まったくの理性人かと言えば、そうとは考えられないからである。

なぜなら、ドン・キホーテは作中で人を殺してはいないものの、それらはすべて偶然のおかげだった。本当はもう少しで殺人を犯すところだったのだ。前篇第20章で、ドン・キホーテはサンチョに槍を振り下ろす。もしサンチョがその打撃を肩で受けていなければ、確実に死んでいたと書かれているのである。

また、ドン・キホーテは前篇第8章で、巨人だと思い込んだ風車に突撃する。もし正常な人間であれば、結末が予想できるのではないか。結局ドン・キホーテの槍は折れ、馬からも投げ出され、大けがを負っている。「役者」であり、皆の前で演じているというのなら、役者が舞台の上で実際にけがを負ったりするのだろうか。

つまり、ドン・キホーテは正気な部分を有してはいるものの、まったくの正気だとは考え難い。あるときは説法をおこなう有徳な人物、またあるときは、ありもしない騎士道物語を読み耽って攻撃的になってしまった狂人、というように、正気と狂気が交錯する人物と考えるのが妥当であろう。



このドン・キホーテの正気とも狂気ともつかない特徴をみごとに言い当てたのは、《緑色外套の騎士》こと、ドン・ディエゴの息子ドン・ロレンソである。ドン・ロレンソはドン・キホーテを「狂気のなかに素晴らしい正気が交錯する変わった狂人」と評した。

しかし、その狂気もドン・キホーテの終焉が近づくにつれて弱まっていく。それはドン・キホーテの美しいドゥルシネアへの思いにも影響を及ぼす。前篇であれほど彼女の美しさを思慕してやまなかったドン・キホーテはもはやいないのである。

こうした物語の進展に従って、ドン・キホーテの言葉遣いも変化していく。ドン・キホーテはアルカイズム的な言い回しを好んでいたのだが、しだいに影をひそめていく。中世騎士道物語でよく使われていたそうした言い回しとは、たとえば《Non fuyades》(現代スペイン語の《No huyáis》の意味)、《fermosas señoras》(現代スペイン語の《hermosas señoras》の意味)、《habedes fecho》(現代スペイン語の《habéis hecho》の意味)、《manguer》(現代スペイン語の《aunque》の意味)《cautivo》(現代スペイン語の《desdichado》の意味)などが挙げられる。

ドン・キホーテは《銀月の騎士》と戦って、敗れたとき、《銀月の騎士》の思い姫のほうがドゥルシネアよりも美しいと認めよと迫られるが、ドン・キホーテは《fermosa》《cautivo》《aquesta》の代わりに、それぞれ《hermosa》《desdichado》《esta》を用いている。

このように、ドン・キホーテは、徐々にアルカイズム的な言葉遣いを避けるようになるが、そのわけについて鈴木正士は、「ドン・キホーテは自身の築いた騎士道物語世界を、もはや現実世界に翻訳」することができなくなったためだと述べている。ドン・キホーテの狂気が弱まる過程については、もう一度確認することにしよう。

セルバンテスは、なぜドン・キホーテのような、正気と狂気が入り混じった狂人を主人公にすえたのだろうか。それについては、第一に、セルバンテスが『ドン・キホーテ』に悲喜劇性を持たせたかったからなのではないかと考えられる。完全なる狂人を登場させ、物語の結末で死なせてしまえば、作品は『ハムレット』のように悲劇になってしまう。しかし、ドン・キホーテのように正気と狂気を併せ持った人物を創れば、物語に喜劇性が生まれる。第二に、ドン・キホーテをまったくの狂人にしてしまえば、読者は感情移入しづらくなるためだと

いうことができよう。しかも、完全なる狂人の狂気は冷めたものであり、陰鬱である。ドン・キホーテの狂気はそうした暗いものではなく、からっとして乾いた、「非問題的」なものなのである。第三に、場面ごとにドン・キホーテが正気なのか正気でないのかの判断が、読者に任されることである。それにより読者は結果として笑みを浮かべるからである。たとえば、前篇第44章でドン・キホーテは、おかみさんと旅籠の娘に、旅籠の主人が客ともめているので、加勢するように頼まれるが、それを素気なく断る。そのため旅籠の娘とおかみさんは、ドン・キホーテの意外な反応に頭を掻きむしる。完全な狂人なら絶対に加勢したにちがいない。しかし、ドン・キホーテはそうはしなかった。そして、ドン・キホーテに愚弄される形になった二人の女を、読者は笑うのである。

このように、ドン・キホーテは、単なる狂人ではない。そのことが物語を一層面白いものにしていく。また、その狂気の度合も、後篇になると段々と変化していき、ついにはその狂気から解放される。ドン・キホーテは告解をしてアロンソ・キハーノとして最期を迎えるのである。しかしながら、結末は湿っぽい、憂鬱なものでは決してない。セルバンテスは、ドン・キホーテを正気と狂気が交じり合った狂人にしたのである。

同様にサンチョ・パンサにも、二面性を認めることができる。彼は、信心深いキリスト教徒にもかかわらず、強欲の権現のような人物である。一方で、敬虔なキリスト教徒であることに自負を持ち、それに相応しい行動をとるべく、たとえば領主職を手放すのである。しかし、強欲な男であることに変わりはない。百エスクードの入った持ち主不明の袋を自分のものにしたたり、ミコミコーナ姫から土地を分け与えて貰おうとドン・キホーテにミコミコーナ姫と結婚するように進言したりと、どうすれば自分が利益にありつけるかをいつも考えている。

また、ドン・キホーテを慕い、彼を見捨てるようなことはしないと公言する一方、ドゥルシネアにかけられた魔法を解くためにおこなうようにとドン・キホーテから頼まれた鞭打ちの数を最後までごまかし、ドン・キホーテから少しでも多くの金を受け取ろうとしている。主にドン・キホーテに向けられる愛情と打算は、後篇最終章でみごとに調和している。ドン・キホーテが元気になることを心底願っているものの、遺産を受け取ることを期待している。そして、冒険に再度出かけようと持ちかけながらも、鞭打ちの数をごまかすなど、サンチョ・パンサの二面的な性格がじつによく描かれている。

また、愚鈍のように見えて時として驚くような知恵ばたらきを見せることも大きな特徴である。サンチョには学がなく、そのため知識は乏しい。だからこそ、古語の *ínsula* が分からずにドン・キホーテとともに冒険に出かける動機になったのである。多くの言いまちがいをして、そのたびにドン・キホーテから指摘されている。しかしながら、みずからの生活経験をもとに世の中を渡っていく知恵に長けている。バラタリア島で領主職を勤めるにあたって見せた機転は周囲のものをびっくりさせる体のものであった。

最後に、サンチョは臆病かと思えば、いったん緩急あれば、勇敢に敵に立ち向かうこともあるのを指摘しておかなければならない。彼が臆病だというのは、ドン・キホーテの台詞によるところが大きい。しかし実は、主人のために勇気を振り絞る場面も少なくないのである。そうした二面性をよく表しているのが森の従士とのやりとりにほかならない。サンチョは森の従士に対して攻撃的になったり、その大きな鼻を恐れたり、刻一刻と態度を変化させていく。

このように、サンチョもドン・キホーテに劣らぬほど、複雑であいまいな性格を備えている。その意味では、人間くさくて魅力的な人物になっており、読者を飽きさせることはない。

さらに作者は、ドン・キホーテとサンチョ・パンサのあいだに見逃せない現象が起こるようにしている。それが現代社会心理学でいうところの「相互影響」である。

人は他者との交わりにおいて、大なり小なり影響を受ける。それは、関係が密になればなるほど大きくなる。長い遍歴の旅を共にするドン・キホーテとサンチョ・パンサの場合も例外ではない。

そして、主従の影響関係を、研究者たちは「～化」という言葉を使って説明している。サンチョ・パンサがしだいにドン・キホーテの持つ特徴を帯びていくことは「サンチョ・パンサのドン・キホーテ化」と呼ばれている。

その現象は、以下の五点に要約できる。つまり、サンチョがドン・キホーテに「教育」されていくこと。それにより欲望の対象を物質から名誉などの精神性の高いものにうつすこと。騎士道精神が高揚していくこと。魔法の存在を信じ始めること。そして現実を歪曲して見るようになることである。

これらは、比較的長い期間を経て見られる変化であることは言うまでもない。また、五点それぞれが補完的にはたしながら、「ドン・キホーテ化」現象を起こしているのである。

ミゲル・デ・ウナムーノは、ドン・キホーテの方にも変化が見られること、そして、その変化はサンチョ・パンサ化と呼ぶにふさわしいことを指摘した。

しかし、ドン・キホーテはまったく正気の間人とは言えず、内に狂気を秘めている。そのような人物と、サンチョ・パンサが同等に影響を及ぼし合うことがあるのだろうか。

また、正気のときのドン・キホーテの神レベルを考えれば、サンチョ・パンサよりも高尚であることは疑いない。したがって、サンチョのような身分の低いものが高いものを真似ることはあっても、その逆は考えられない。

以上から、『ドン・キホーテ』の魅力は主人公の主従にあること、そして二人が互いに影響を及ぼし合っていること、しかし、ドン・キホーテは、サンチョ・パンサに比べると、あまり影響を受けなかったこと、といった結論が導き出される。

『ドン・キホーテ』は、セルバンテスの時代に大流行していた騎士道物語のパロディにほかならないが、主人公が当時注目を集めていた「狂気」に駆られているという設定が斬新である。

また、作者は、セルバンテスと同時代の劇作家ロペ・デ・ベガが書いた戯曲の批評や、『ドン・キホーテ』後篇が出版される一年前に出た贋作『ドン・キホーテ』の作者への痛烈な批判を、登場人物たちの口を借りておこなったり、作品を入れ子構造にしたり、十五世紀の小説では考えられないほどのたくさんの趣向を凝らしている。

それだけでも、この長篇小説は、世界中の人々に読まれるのだが、何よりも、ドン・キホーテとサンチョ・パンサを中心とした登場人物たちが魅力的で、人間的であり、現代においても共感できる点が多くあるからこそ、人々に愛されていると言えよう。

---

<sup>241</sup>後篇第18章。スペイン語版 p690 日本語版 p141 下段

#### 参考文献

- Aranguren, José Luis L, *Estudios literarios*: Editorial Gredos, 1976.
- Armand Gothier, Denys, *El drama psicológico del Quijote*, Madrid: EdicionesStvdvm, 1962.
- Avery, William T, “Elementosdel Quijote” , Sevilla:Anales Cervantinos IX (1961-62),1962, pp1-28.
- , “Elementos dantescos del Quijote” , Madrid: Anales Cervantinos VIII-X IV(1974-75), 1972, pp3-36.
- Basanta, Ángel, *Cervantes y la creación de la novela moderna*, Madrid:ANAYA, 1992.
- Borges, Jorge Luis,*Magias parciales del Quijote*, Buenos Aires: Emecé Editores, 1960, pp65-69
- Cejador y Frauca, Julio,*La lengua de Cervantes*, Madrid:Establecimiento tipográfico de Jaime Ratés, 1905
- Cervantes Saavedra, Miguel de, editado por Francisco Rodríguez Marín,*El ingenioso hidalgo Don Quijote de la Mancha I , II ,* Madrid:Espasa-Calpe, 1958.
- , editado por Avalle-Arce, Juan Bautista,*El ingenioso hidalgo Don Quijote de la Mancha I , II ,* Madrid: Editorial Alhambra,1979.
- , editado por Riquer,Martín de,*El ingenioso hidalgo Don Quijote de la Mancha*, Barcelona: Editorial Planeta,2005.
- Estrada, Mauro Rodríguez y Alba, Carlos Rodríguez de, *El Quijote, Sabiduría y creatividad*, México: Lumen, 1999.
- Fuentes, Carlos, *Cervantes o la crítica de la lectura*, Madrid:Editorial Joaquín Mortiz, 1994
- Garrote, Gaspal, *Quijote versus Sancho. Dos visiones del mundo*, Madrid: Editorial Temas de Hoy, 1995.
- González, Alberto Navarro, “El Quijote y Cervantes” , Madrid: Anales Cervantinos VIII – X IV(1974-75),1972,pp59-68.
- Paz Gago,José María, “El mecanismo ficcional del Quijote:Ficción realista y ficción maravillosa” ,Madrid: Anales Cervantinos X X VII (1989),1990, pp21-44.

- Lapesa, Rafael, *Historia de la lengua española*, Madrid: Gredos, 1981.
- Madariaga, Salvador de, *Guía del lector del "Quijote"*, Madrid: Espasa-Calpe, 1976.
- Maldonado de Guevara, Francisco, "El incidente Avellaneda" , Madrid: Anales Cervantinos V (1955-56), 1956, pp41-62.
- , "De estudios cervantinos" , Sevilla:Anales Cervantinos IX (1961-62), 1962, pp45-96.
- Marasso, Arturo, *La invención del Quijote*, Buenos Aires: Librería Hachete, 1954.
- Márquez Villanueva, Francisco, *Fuentes literarias cercantinas*,Madrid: Gredos,1973.
- , *Personajes y temas del Quijote*, Madrid:Taurus,1975.
- Martínez Torrón, Diego, "La locura de Don Quijote. Ideología y literatura en la novela cervantina" , Madrid: Anales Cervantinos X X X IV(1998),1998, pp23-36.
- Menéndez Pidal, Ramón, *Historia de España El siglo XVI* , Madrid:España-Calpe,pp329-330  
LA ECONOMÍA,pp395-425 LA SOCIEDAD,1989.
- Molho, Mauricio, *Cervantes: raíces folklóricas*, Madrid: Gredos, 1976.
- Olmeda, Mauro, *El ingenioso de Cervantes y la locura de Don Quijote*, México:Editorial Atlante,1958.
- Predmore Richard L, "La función del encantamento en el mundo del "Quijote" " , Madrid: Anales Cervantinos V (1955-1956),1969, pp63-78.
- Riley, Edward C, "Episodio, novela y aventura en "Don Quijote"", Madrid: Anales Cervantinos V (1955-1956),1969, pp209-230
- Riquer, Martín de, *Aproximación al Quijote*, Barcelona: Editorial Teide, 1960.
- , *Nueva Aproximación al Quijote*, Barcelona: Editorial Teide, 1967.
- Rubio, David, *La filosofía del Quijote*, Valladolid: Editorial Sever Cuesta, 1953.
- Shakespeare, William, *The tragedy of Hamlet*, Great Britain: The folio society .1954.

Unamuno, Miguel de, *Vida de Don Quijote y Sancho* : Edición por Alberto Navarro, Madrid: Catédra, Letras Hispánicas, 1988.

Urbina, Eduardo, *El sin par Sancho Panza, parodia y creación*, Barcelona: Anthropos, 1991.

Van Doren, Mark traducción de Pilar de Madariaga, *La profesión de Don Quijote* , México: Fondode Cultura Económica, 1962.

Vega, Lope de, *El caballero de Olmedo*, Alhambra, edición por Francisco Rico, Madrid: Catédra, 1984.

アベジャネーダ、岩根圀和訳、『贗作ドン・キホーテ』、東京：筑摩書房、1999.

アウエルバッハ、E. 著、篠田一士・川村二郎訳、『ミメーシス上下』、東京：筑摩書房、1984.

ボルヘス、ホルヘ・ルイス、鼓直訳、『伝奇集』、東京：岩波書店、1993.

ブッチャー、ジェイムズ、浅井義弘訳、『異常心理学』、東京：福村出版、1982.

セルバンテス、牛島信明訳、『ドン・キホーテ前編・後編』、東京：岩波書店、1999.

カナヴァジオ、ジャン、円子千代訳『セルバンテス』、東京：法政大学出版局、2000.

カストロ、アメリコ、本田誠二訳、『セルバンテスとスペイン生粋主義』東京：法政大学出版局、1966.

フェルナンデス、ハイメ、柴田純子訳、『ドン・キホーテへの招待一夢、挫折そして微笑』、習志野：西和書林、1985.

フーコー、ミシェル、蓮實重彦・渡辺守章監修、『ミシェル・フーコー思考集成 I 狂気・精神分析・精神医学』、東京：筑摩書、1988.

一、中山元訳、『精神疾患とパーソナリティー』、東京：筑摩書房、1997.

ガセット、オルテガ、A. マタイス・佐々木孝訳、『ドン・キホーテに関する思索』、東京：現代思潮社、1968

平井久、『現代基礎心理学』、東京：東京大学出版会、1982.

オックマン、ジャック、阿部恵一郎訳、『精神医学の歴史』、東京：白水社、2007.

本田誠二、『セルバンテスの芸術』、東京：水声社、2005.

一、「詩人としてのセルバンテス」(『イスパニア図書第1号』京都セルバンテ

- ス懇話会編) pp4-15、1998.
- 一、「セルバンテスと対話文学」(『イスパニア図書第6号』京都セルバンテス懇話会編) pp8-22、2003.
- 池田満寿夫、『模倣と創造—偏見のなかの日本現代美術—』、東京：中公新書、1969.板倉聖宣、『模倣と創造—科学・教育における研究の作法—』、東京：仮説社、1978.
- 石田春夫、『ふりの自己分析』、東京：講談社、1989.
- 岩根圀和、『贋作ドン・キホーテラ・マンチャ男の偽者騒動』、東京：中公新書、1997.
- 岩根圀和、『物語、スペインの歴史』、東京：中公新書、2002.
- 井沢元彦、『ユダヤ・キリスト・イスラム集中講座』、東京：徳間書店、2004.
- 唐沢かおり、『社会心理学』、東京：朝倉書店、2005.
- 加藤尚武、『現代倫理学入門』東京：講談社学術文庫、1997.
- 河合祥一郎、『謎解き『ハムレット』』、東京：三陸書房、2000.
- 木村榮一、『スペインの鱒釣り』、東京：平凡社、1996.
- 京都外国語大学イスパニア語学科編、『『ドン・キホーテ』を読む』、大津市：行路社、2005.
- マダリアーガ、サルバドール＝デ、牛島信明訳、『ドン・キホーテの心理学』、東京：晶文社、1992.
- 本村凌二、『多神教と一神教』、東京：岩波書店、2005.
- ナボコフ、ウラジミール、行方昭夫・河島弘美訳、『ナボコフのドン・キホーテ講義』、東京：晶文社、1992.
- 中西信男、『ナルシズム、天才と狂気の心理学』、東京：講談社、1987.
- ナタン、トビ、松葉祥一訳、『他者の狂気』、東京：みすず書房、2005.
- ノエル、ジャン・ベルマン、石木隆治訳、『精神分析と文学』、東京：白水社、1990.
- 小田晋、『狂気と犯罪の深層心理』、東京：河出書房新社、2006.
- 落合仁司、『〈神〉の証明』、東京：講談社現代新書、1998.
- 小俣和一郎 精神医学の歴史 第三文明社 東京 2005.
- パス、オクタビオ、牛島信明訳、『弓と豎琴』、東京：ちくま学芸文庫、2001.
- パスカル、ブレーズ、由木康訳、『パンセ』、東京：白水社、1990.
- ラペサ、ラファエル、山田善郎監修、『スペイン語の歴史』、京都：昭和堂、2004.



- プラトン、藤沢令夫訳、『プラトン全集 5 パイドロス』、東京：岩波書店、1974.
- ラッセル、P. E、田島伸悟訳、『セルバンテス』、東京：教文館、1985.
- ルシュラン、モーリス、豊田三郎訳、『心理学の歴史』、東京：白水社、1990.
- 斎藤環、『文学の精神分析』、東京：河出書房新社、2009.
- 作啓一、『生の衝動』、東京：みすず書房、2003.
- 世路蛮太郎、「丸谷文学と『ドン・キホーテ』」(『イスパニア図書第7号』京都セルバンテス懇話会編) pp69-83、2004.
- シェイクスピア、ウィリアム、福田恆存訳、『ハムレット』、東京：新潮文庫、1967.
- 一、小田島雄志訳、『ヴェニス商人』、東京：白水Uブックス、1983.
- 一、大場建治訳、『ヴェニス商人』、東京：研究社、2005.
- 清水憲男、『ドン・キホーテの世紀』、東京：岩波書店、1997.
- 霜山徳爾、『天才と狂気』、東京：学樹書院、2000.
- 澁澤龍彦、『都心ノ病院ニテ幻覚ヲ覚エ見タルコト』、東京：立風書房、1990.
- 鈴木正士、「『ドン・キホーテ』の全体像・関係する二つの世界」(『イスパニア図書第4号』京都セルバンテス懇話会編) pp36-42、2001.
- 一、『『ドン・キホーテ』における創造世界』、大津市：行路社、2008.
- 高橋康也、『道化の文学—ルネサンスの栄光』、東京：中公新書、1977.
- タルド、ガブリエル、村澤真保呂・信友建志訳、『社会法則／モナド論と社会学』、東京：河出書房新書、2008.
- 一、池田祥英・村澤真保呂訳、『模倣の法則』、東京：河出書房新書、2007.
- 立石博高・関哲行・中川功・中塚次郎、『スペインの歴史』、京都：昭和堂、1998.
- ツルゲーネフ、イワン、河野興一・柴田治三郎訳、『ハムレットとドン・キホーテ』、東京：岩波書店、1955.
- ウナムーノ、ミゲル・デ、アンセルモ・マタイス・佐々木孝訳、『ドン・キホーテとサンチョの生涯』、東京：法政大学出版局、1972.
- 牛島信明、「美しき人、ドン・キホーテ」(『イスパニア図書第3号』京都セルバンテス懇話会編) pp31-43、2000.
- 一、『ドン・キホーテの旅—神に抗う遍歴の騎士』、東京：中公新書、2002.
- ベガ、ロペ・デ、長南実訳、『オルメードの騎士』、東京：岩波文庫、2007.
- ワイントローブ、D. J・ウォーカー、E. L、浅井正昭訳、『知覚』、東京：福村出版、1982.

山崎喜直、『異常心理学入門』、東京：学文社、1987.

横山滋、『模倣の社会学』、東京：丸善ライブラリー、1991.